

---

# 真・恋姫†無双～女神の恩恵～

ぱむ～ん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜女神の恩恵〜

### 【Nコード】

N7334M

### 【作者名】

ばむ〜ん

### 【あらすじ】

少年は死を受け入れた。だが、そうは行かない運命がある。

「おねえさま！死んじやったよ？」

「とりあえず、別の世界に送ってしまおう」

「あらあら、大変ね？」

どうなる！？

## 彼、世界を渡る（前書き）

勢いでやってしまった…。今は公開している。

完結していないのに二作目作成。たぶん亀以上、と言っか大地の如く更新しないかも好評なら考えるけど

## 彼、世界を渡る

「せい！はあっ！」

朝早く静まり返るジムで一人身体を動かす

「おい！そろそろ、終いにしろよ！衛」

そこにジム主の先生が来て催促する

「はい！後、ワンセットしたら終わります」

軽やかに足技をを重ねていく

「まったく、これが護身術の域かよ……。俺でもまず、勝負にならんぞ……。世界、行ったんだけどな……」

衛の技の切れを見て彼はそんな事を呟く

「ふう、先生！ありがとうございます！」

全ての練習を終えて礼をする

「おう！おつかれ！だがな、衛。そろそろプロになるのを決めたらどうだ？お前ならあつと言つ間にスター選手だ。」

「いえ、自分のは飽く迄も自衛手段です。自分は会社務めが決まっていますし、あまり目立つことはしたくはありません」

恩師の誘いを断り、サラリーマンとして生きていくと宣言

「うゝゝむ。そう言ってもお前他に何やってたっけ？」

「え？高校生の頃は弓道やって大学生で八極拳と太極拳です。師には皆伝を載っています」

「……………お前は何を目指してるんだ？勿体無いと思うが、お前がそうと決めたんならもう何も言わん、ただ今日みたいに偶には家に来て稽古をつけてくれよ」

「ええ！自分でお役に立てるなら何時でも呼んで下さい。ではまた  
次回の稽古の時間に…」

そして改めて頭を下げてジムを後にする

「いまだき珍しい真面目で律儀な青年なんだが、真面目すぎて融通  
が聞かんのがいかんな。あの才能は勿体無い……。そもそも今の時  
代にいるのが間違いなんじゃないか？」

彼の才能は次元が違つと最後にもらしその場をあとにした

「あつ！最後に孤児院に寄つてから帰ろう。今日買った漫画でも持  
つていつてやろうかな？」

近くのお菓子屋に足を向ける衛。  
だがそこで前方から明らかにオーバースピードで近くの賑わう店に  
突っ込む車が見えた

「な！？病気か何かか!？」

まだかなり遠い状態だが衛はしっかりと中の様子が見えていた。家族を乗せたワゴン、その運転席で胸を掴み苦しげな父親、その後ろで父親の心配をしている母親、母親の隣のチャイルドシートで泣いている子供。

まだ若い家族。それを見てから彼の行動は早かったと同時に死の覚悟もしたかも知れない

「ぐが！？…どつりやああ！！！！」

店を背にし、突っ込む車を横抱きに思い切り横から蹴りを入れた。運転席側のドアが思い切り凹んだが、車の機動は大きく逸れ電柱に向かっていく。最後の仕上げとばかりに掴んだままだった車の前方に体を潜り込ませていく。そして

「ぐふ！？…はあはあ、無事ですか？」

衛は額に血を滲ませながら家族に笑いかける。

父親のほうもまだ胸を抑えているが怪我そのものは誰にも見当たらない。

車も扉とフロントが多少歪んでいるだけに留まり、電柱は横に傾いているだけだ。

被害そのものは、本来あるべき物より圧倒的に少ない、だがそれを成し遂げた衛は

「ぐう！？…はあはあ、ダメだこりゃ。右腕と大事な…はあ、臓器が軒並…はあ、潰れてやがる」

息も絶え絶えになりながらも自分の状況を確認していく

「後…はあ、五十メートルでもありゃ、はあ、止められたんだけどなあ……ゲブ！！」

《ビチャッビチャッ！》

口から大量の血液が流れ出ていく。

そこで彼は自分の死ぬ限界点と言うものを自覚したが、そこで彼の意識は消えていく

( さよなら、皆…………… )

何も無い白い空間、そこに三人の女性の姿がある

『へえ、私たちの運命を変えちゃったんだ』



一番子供っぽい女性が驚き

『人間の分際で、神の決定に逆らったか。面白い』

三人の中で一番年上の女性が不敵に笑う

『彼が私たちの決めた運命の、特異点ということかしら？』

真ん中の女性が確認する

『そのようだ。こういう者は、生きてるうちに見つけて特異点たる要因を消すのが慣わしだが…』

『もう、死んじやったね…』

『ええ、その場合は別の世界に転生として送るのだけど…。』

『そう、この場合少し複雑だ。特異点と言っても全部が全部今回のように私たち神の決定に逆らう者ばかりではない、いや、むしろ逆らえる場合のほうが貴重だ。そうした逆らったものは功績を認められ、何かしらの恩恵を受けて世界を渡る』

『そんなに珍しいの?』

『そうね?確か前こんな事があったのが別の神様の所で数万年前じやなかったかしら?』

『うわ!長っ!』

『まあ、そういうわけだ。これより我らの恩恵をこの者に……。私は生前と変わらぬ身体能力を』

『なら、私は人の限界を除きましょう』

『つまりは、どういうこと?』

『鍛えた分だけ強くなるってこと。極端に行くと鍛え続ければ地球も割れるわ』

『うわ!?!凄すぎない?』

『平気よ、大体千年単位で鍛え続けなきゃならないから』

『いいから、最後は、お前だぞ』

『え！？えくと！？じゃあ！カア〜ッブ！で送っちゃえ！』

『あら、今ので五百年に短縮されたわ』

『それくらいへ〜きだつて！』

『そうね、死ぬ寸前くらいまで鍛え続けければクレーターくらいできるだろっけど平気よね！』

『……………』

『あら？如何したの？』

『よその神様の星にクレーター作る奴送るのは拙いだろ……………』

彼、世界を渡る（後書き）

ちなみにこの三人はこれ意向出す予定はありません

彼、旅立つ（前書き）

連投！

## 彼、旅立つ

(うっ！眩しい!?)

「オオ！目を開けたぞ！」

「そんなに大声を上げなくても聞こえていますよ？」

視界が霞んだままながらも耳はしっかりと周りの状況を捉えてくる

(なんだ？死んだんじゃないのか？ここは病院か?)

「分かっているが、どうしようもないんだ！この気持ちまさしく愛だ!!！」

(グ ハムさん!?)

衛は若干オタクが入っていた。

そして、ふっと、身体が軽くなる。視界も回復していく

（ああ…。なるほど、転生と言つものか）

視線が高くなり、見下ろす形になってはじめて自分の状況が理解できた。

小さくなった身体。今まで居た所とは明らかに文明レベルで違う。

（この人たちが俺の両親か…。）

彼は施設育ちのため本当の両親を知らなかったので、初めて出来た肉親に顔を緩めた

「おお！おお！？笑ったぞ！？私に笑いかけたぞ！？」

「ええ、護も貴方に似て凛々しい顔立ちをしていますね。とても綺麗に笑っています」

（名前は変わらないんだな）

そのことばかりはホツとする衛。だが彼は知らない名前は一緒でも文字が違うということ…。大した問題ではないが。

「そつだ！この子は我が家の跡継ぎ、姓は太史、名は慈、字は子義、

「真名は護だ」

「……………真名とは何だ？それに太史慈だと！？三国志なのか！」

五年後

「せい！はっ！りゃっ！」

護は五歳にも拘らず以前と変わらぬ動きで、鍛錬している。動きそのものは以前と同じだが如何せん、リーチの違いに最初は戸惑った。

「如何いう事が分からんが、以前のまま、いや以前以上じゃないか？特に…。ふっ！！」

《ズガンッ！》



目の前にあった、一メートルほどの岩が僅かに砕けた。

「力が異常に上がってる。これなら、夢にまで見た漫画の技が出せるかも知れん」

護は、まず、体力をつけようと三歳になつてすぐ走る練習をしたが、肉体的未発達のはずの三歳児の身体で以前と同様の体力で、スピードも僅かに遅い程度だった。(これは足の長さが原因と考えられる)それだけでも驚愕するところなのに、少し力を入れただけで食器の類を粉碎してしまった。

それ以来、力のコントロールのため鍛錬と瞑想を欠かさない。

「おゝい！護よ！母さんが呼んでるぞ。そろそろ学の時間だと、言っていた」

「父様、分かりましたすぐ参ります」

「それにしても、お前の《手混回》だったか？動きは独特だな。どこでその動きを知ったんだ？ずっと家にいたはずだが…。幾つかは見覚えがあつたんだが、そこだけ分らなかった」

「《テコンドー》です……。これはその、夢で……」

自分でも無理やりなことは理解しているが、前世で学んできたなど言えるわけもない

「そうか！そうか！やはり私の子だな！その歳で大人顔負けの動きに、学も修める！おそらくその独特の体術も天より授かった物なのだろう！」

いきなり息子の前で自分の世界に入り息子の褒めちぎりを始めた。経験上この状態に入ったら自分で抜け出してこない限り喋り続けるのだ。

「では、母様のところに行きます。」

その場に父を放置して母のところを目指す。背後から 我が子は天に愛されているのだああ！！！！と雄たけびを上げていた。

青洲という所の小さな村に住んでいる。

俺は聞き分けのいい子して可愛がられ、幼くして文字、計算などをこなす神童としても知られるようになった。

曲りなりにも、一流企業と言われるところに就職が決まっていた身としては、勉強は現役でやっていた訳で、特に苦戦することなくこ

の世界の学を修めていった。

そしてこの世界で生きていく上で俺は多少のアドバンテージを持っていることになる。

まだ細部まで確かめてはいないものの、ここは三国志の時代なのだ。もしかしたらまったく違う歴史を辿るかも知れないが、自分がどの勢力に属するのかが分かっているだけでもよしとしよう。

さらに五年俺は幼児から少年にレベルアップし、戦闘技術もさらに磨きがかかっていた。

最近、山賊の被害が増えているらしい。それも隣町が先日やられたとか傷だらけになりながらも逃げ延びてきた村人が言っていた。

それからと言うもの村の男連中が交代で見張りに立ち警戒するようになった。

「さ、山賊だああー！！！！」

悲鳴に似た怒号が辺りに山賊の到来を知らせる

「皆武器を持ってえー！！女、子供は村よりはなれ、大人しくしておれ」

山賊に対抗する村人は二百人前後、対する山賊は千人は下らない。子供である自分だが、村一番の武力があることで戦列に加わる。

「すまないな。お前を戦わせることになってしまった…」

「気にしないでください。私も村のために戦えるのが嬉しいのです」

手足の甲冑を確認していく。

「ああ、だが我らは時間を稼げればいい。刺史殿が軍をむけられた様子。彼らが来る少しの間耐えればよい」

「承知！」

「はあああ…！」

裂帛の気合と共に、蹴りを放つ。

《グチャッ！》

「く！！？」

今の出何人目か分からないほど、倒していく。蹴りを繰り返すたびに、潰れる感触が足に伝わる。

初めての殺し、だがその余韻に浸っている間もなく押し寄せてくる。吐きそうになりながらも、周りをフォローしながら戦う。

「一人で当たるな！！必ず複数で敵に当たれ！！」

指示を飛ばしながら縦横無尽にかける。

それからどれほどの時間戦っていたか分からないが、既に仲間を自分を入れても数十人がいいところ

「父様、生きておいでか？」

「ああ、なんとかな。」

父様に背中を預けて油断なく周りに視線を送る

「……………ここだけの話。刺史殿が間に合わないのは分かっていたんだ」

語りだす父

「馬に無理をさせでもしない限り、後半日は掛かる。それに疲労した山賊を叩くほうが軍にとっても良いからな」

「そうですか…」

「何だ驚かないんだな」

「ある程度は予測していましたので…」

「そうか…。では最後の一旦でに逝くか」

「ええ、お供しましょう」

周りの村人も頷いてくれた。

自分も身体に力を籠め、初めての戦闘で硬くなっていた筋肉を解していく。

だがそこで、遠くに砂塵を確認できた

「お、おい！あれを見る！軍が来てくれたぞ！！」

「やべえ！野郎ども引きあげだあ！！」

逃げていく山賊、それを追う軍の旗、そこから一騎抜け出てこちらに向かってくる。

「遅くなった！我が名は孔融、青洲の刺史だ。ここまでの被害が出てしまったこと、真に申し訳ない。」

「お止めください。ここまでの道中、さぞ急がれたことでしょう。通常よりも半日も早く来てくれたのです。礼をするのはこちらの方です。孔融殿、ありがとうございます」

孔融殿は父と話し終わるとこちらを珍しげに見つめてくる

「ほう、君のような童も、戦に出たか」

「はい、このたびは誠にありがとうございました。」

「なに、これがワシの仕事だ。それより童、お主、大層優秀というではないかどうだ、我らと共に来る気はないか？」

「申し訳ございません。これより村の復興、警備に関しても見直すなど、やらなくてはいけない事が幾つもあるのです……」

「ははは！気にするな。それに若い芽を摘み取るようなことはしてはいかな。」

「申し訳ありません。いつかこのご恩、お返しいたします。」

「ははは！気長に待つとするとさ！」

それを最後に孔融殿は去ってしまった。

其れからというものの、復興に自警団の組織に、訓練、ありとあらゆる事に力を入れていった。

そして、さらに数年の月日が流れ、少年は青年となり、村は以前以上に活気に溢れ、自警団は軍隊顔まけの統率がなされていた。

「全員、集合！」

「「「「はー！」」」」



護は自警団の初代団長としていまままで厳しく訓練をしてきた

「俺は今日を持って、自警団を止める」

故に、自警団内で圧倒的な支持を持っていたしその宣言は、あまりにも突然だった

「俺は、これより見聞を広めるたびに出る。そしていつか、どこかの軍に仕官する。」

「ど、どうしてですか!？」

「俺たちを置いて行かないでくれ!」

「駄々捏ねてごめんなさい!」

様々な声が飛び交うなか、彼の大きな声に回りは静まる

「皆知っているだろうが、年々、山賊の出現が頻繁に起きている。俺は此れを群雄割拠の前触れだと思っている。故に俺はより早く安全な生活が約束される国を作ってみせる。そのため俺は村を出る」

「「「「「うおおおオーー!!!!」」」」」

突然の歓声に護は一步引く

「すげえ！俺たちの村から將軍様が出るかもしんねえ」

「何言つてんだ！かもじゃねえ！子義さんならならねえほづが可笑しいつてもんだ！」

「ばんざーい！ばんざーい！」

その夜、村は宴会を開きお祭り騒ぎとなった。

朝焼けが村にかかるころあい

《カチャツカチャツ》

手足の装備を確認し、肩に荷袋を担ぎ村の外に足を向ける。

「護！！まちなさい！」

その声に振り返ると、肩で息をする母親の姿があった。

「母様、そんなに急いで如何されました？余り身体が丈夫ではない

のですから無理をされてはいけません」

心配になり母に近寄る。

そこで肩に手をかけた瞬間に抱擁で返された

「私は旅立つ貴方に母として何も出来ません。でもその代わりに此れを…。」

母から渡されたのは膝下まで届く羽織と鉢巻、羽織は紅く、背中に”義”と刺繍されている。鉢巻は青い。

「この鉢巻は父さんが若いころに使っていたものなんですよ？そしてこの羽織は私が一から作ったんです。共に出来ない私たちの代わりにこの品《想い》を共に持って行ってください」

「母様…。ありがとうございます。母様たちの想い、しかと受け取りました…。行って参ります」

「行ってらっしゃい、護。私の可愛い息子……。」

彼、旅立つ（後書き）

更新は一作目が優先なんで、やはり（更新は）大地の如く！

彼、世界の不思議を知る（前書き）

大地とか言って投稿するおバカです。

どうぞ見てやって。

## 彼、世界の不思議を知る

(のどが渇く…)

ここは何処だ…

目が霞む…)

護はこの一週間、飲まず食わずの状態で過ごしている。  
その理由は、

「町は何処だ…。荒野ばかりではないか…」

迷子になっていた。

そもそも護は、衛の時から方向音痴で悩まされていた。

一度死ぬことになったのも道を間違えてよく知らない所を歩いていたときに遭遇したに過ぎない。

それが生まれ変わって治ったと思ったたら何故か以前にも増して道に迷う事が分かった。

「見えてきた…！旅に出て初めての町…！」

目に見える位置に町が見えてきた。余りの嬉しさに、軽くスキップのような状態になるが、体力が無い状態だと、まるでキョンシーの



少女が尋ねてきた

「ほれは、ひふれいひまひた、ひふんはいひひほほひまふ」

口いっぱい詰め込んで喋ったため、言葉になっていなかった

「ちゃんと食べてから言いなさいよ！」

「…ゴクン。失礼しました。俺は、姓は太史、名は慈、字は子義、真名は護と言います」

「ちよつと！？何いきなり真名まで言ってるのよ!？」

常識ハズレの行動に見た目知的な、猫耳フードの少女が慌てる

「恩人にはそれなりの態度で臨まねば、失礼でしょう?」

「恩人だからって、そんなに簡単に教えて言い分けられないでしょ!」

「それを決めるのは俺だと思っんですがね…」



その後、何だかんだ言いながら、真名を呼んでもらえることになった。

それから数日、恩返しとして仕事をこなし、その仕事も終わりを迎えたので、また旅を続けるために町を出ることにした。

「お世話になりました。苟？殿、この数日本当に楽しかった。あの時助けてくれたのが貴女で良かった。またどこかで会いましょう」

「いいわよそんなの、あんな所で死なれたら、おかしな噂が立つちやうでしょ！だからしょうがなく助けただけなんだから！…まあ元気でやんなさい」

「ええ、ありがとうございます。それでは…」

紅い羽織を纏って、目的の地を目指す。目的地への方角は教えてもらったのでその方角に

「行っちゃったわね…。変な男が居なくなっって清々するわ。さて私も旅支度をしなくっちゃ」

必要な物を掻き集め、旅支度を済ませていく。  
今仕えている袁家に見切りを付けて、最近売り出し中の曹操の元に  
向おうとしていた。

「苟？様！大変でございます！！」

使用人が慌てた様子で部屋に飛び込んできた。

「五月蠅いわね！何事！？」

突然入られた事でイライラしながら答えを待つ

「そ、それが賊がこの村を目指して向ってきております！その数、  
およそ千です！」

「な！？」

そんな数を迎撃できる戦力なんてこんな小さな町にあるわけが無い。  
一番近くの軍もここまででは間に合わない。

「すぐに戦える者を集めなさい！私が指揮を取るわ、死にたくは無  
いでしょう！？急ぎなさい！」

彼女は必死に頭を回転させる。

この先を生き抜くために…

「しまった、また迷った…。何故こうなるんだろつか、ちゃんと言われた方角に向っているのに…。こっちに行けばいいんだろ？」

指を指して、道を細かく確認する護。しかしその指先は自分が歩いてきた方角をむいていた

「うゝん、一度戻って、もう聞いて確認した方がいいな。確か町はこっちだったよな」

町に引き返すことにしたが、またしても方角が違う場所に向いた

「よし！少し急ぐか」

指差した方に向かってダッシュ！！…したはずがまたとんでもなく違う方向に走っていった

「もう少し持ちこたえなさい！」

荀？は、千に対して三百という絶望的な戦力差で挑み、一時間に亘り戦線を維持していた

「ぎゃあ！？」

だがそれも、徐々に目に見えて押され始めるのだった。

「くっ！せめてあと二百あれば…！」

「テメエか！？こいつらの指揮してたヤツア！！！」

どんなに数が集まろうと、所詮は素人の集団。穴は自ずと出来てしまっし、こつもあっさり敵の接近を許してしまう。

「え！？」

「覚悟しやあがれ!!」

荀?に向って凶刃が振り下ろされる。ゆっくりと時間が流れているような錯覚に苛まれながら彼女は眼を閉じた

「やれやれ、戦場において男女の差を言うつもりは無いが、貴様のような下種が手を出すには、この人は高嶺の花と言うものだ」

なかなか来ない痛みを不思議に思うと同時に、最近聞いたような声が聞こえてきた。

閉じていた瞳を開けて目の前に起こったことを確認する。

「怪我は無いですか、荀?殿?」

目の前には笑顔の青年と、顔が潰れたさっきの襲撃者が居た

「アンタ……」

「話は後回しにした方が良いでしょうね。俺は何処に行けばいいか指示をしてください」

辺りの警戒をしながらそんなことを聞いてくる

「え？そ、そうな、中央が若干圧され気味だから先ずそこに援護を  
…」

「了解、中央の敵を殲滅しよう」

「て！一人で行く気！？バカじゃないの！？死にたいの！」

「死にはしないさ、貴方が指揮を取るのは一騎当千の将だ。安心して良い」

そう言うと彼は走って中央の戦線に突撃していった

「なんなのよアイツ…」

「我が名は太史慈！！義により立ちし、鬼神なり！！匪賊ども！我が前に立つ不幸を呪うがいい！！」

名乗りをしながら突撃、その瞬間……人が飛んだ。  
どうという怪力によって行えば、人が数十人と飛ぶのか、その場にい

た全ての人間が思っただろう

「数が多い！面倒だ！」

そついうと近くに落ちていた敵を掴むと

「人手裏剣！！」

立て回転させながら敵陣に投げつけた

「まだいくぞ、拳骨メテオ！！」

地を砕き、手のひらサイズにした岩をその豪腕を持って両翼の戦場にも投げつける。

滅茶苦茶である、殴り飛ばし、蹴り砕き、敵を投げ、岩を投げる。

その戦闘手段はもはや人ではなく、正しく鬼のようだとその場に居たものの共通の認識となった。

そして、それから程なくして、たった一人の人間の手によって、瞬く間に戦いは終わった。

「助けてもらったことに関してはお礼を言ってあげるわ。だけど何で戻ってきたのよ」

戦いの事後処理を後の者に任せ、今は苟？の屋敷に身を置いている。

「それが、それが半刻歩いたところで道が解らなくなってしまっ  
して、もう一度教えてもらおうかと一刻ほど走ってきました」

「それじゃ何？貴方は半刻の距離を一刻走り抜けなきゃ辿り着け  
ないの」

「それで辿り着けたのはもはや僥倖と言えるでしょう。辿り着けな  
い虞すらありましたからな。戦場の音に誘われたと言いますか…。  
とにかく戻れてよかった」

笑いながら、とんでもなく間抜けなことを言っているこの男が、さ  
つきまでの戦場の鬼と同一人物だとは思えない

「…ハア。こっちに着なさい！」

彼女に言われるがままについて行くと、そこは馬舎だった。

「こいつをアンタにあげるわ。頭もいいから、いきたい所を言えば  
連れてってくれるわ。あ、名前も無いから勝手に付けて」



そして示されたのは、馬の並ぶその中でも、一際目立つ大きな身体  
の青毛と言われる真っ黒な馬。

「いただけませんよ、こんなに立派な馬」

「良いのよ。此方としてもいい厄介払いが出来るんだから」

「は？」

「コイツ誰も乗せたがらないのよ。それでも良い馬だから今まで繫  
いで置いたのだけれど、ちょうど良い機会だからこの無駄飯喰らい  
を貰ってって」

「誰も乗れない馬を渡されても……」

そう言っ近づいていくのだが、その馬は匂いを一度嗅ぐと、それ  
以降、気にした素振り見せなくなったので、試しにその背に上って  
みることにした

「乗れてしまいましたね……。ではお前は黒獅こくしと名づけよう」

苟？は簡単に乗れてしまった事に呆れていたが、予定通り厄介払い  
が出来たと喜んでいた。

「それでは荀？殿。今度こそ、お別れです、また会いましょう」

「ええ、そうね。…それと！」

「はい？」

「私の真名は桂花よ。覚えておきなさい」

「え！？しかし」

「いいからもう行きなさいよ！」

「は、はい！」

この一件の後、桂花の男嫌いは緩和されたが、男に対する評価が厳しくなり、前と変わらぬ、もしかしたら前以上の態度を男に取ることになった

「とりあえず、黒獅よ。人が一番多いところに向ってくれ」

黒獅一つ嘶き、走る

「それにしても、馬まで貰ってしまうことになってしまったな。騎

馬戦では無手は出来ないな。何か得物を……。太史慈だからやはり双鞭かな？ゲーム的に……」

昔やっていたゲームのうる覚え知識から自分の姿を固めて行く護

「それにしてもお前は早いな、荀？ど……桂花には感謝をしなければ  
な。……ん？荀？？………っ！？何故女性なのだ！？」

今になって始めてこの世界の異常性に気付いたが

「……まあ、タイムスリップのようなことが既に起きてるんだから、  
パラレルワールドくらいあるよな」

さすが昔オタクが入っていただけに、SF的な事象を納得してしま  
った

彼、世界の不思議を知る（後書き）

書いてて、キャラ崩壊してるなあ、と思っている。

直さないが、こんなヤツじゃない！とか思ったら感想ください

旗とか考えてます。ほら、真紅の呂旗、とか紺碧の張旗とかそういうの。

募集中です。自分じゃ思いつかないから（汗）

はネタバレじゃないよ!？

彼、龍と戦場を共にする（前書き）

あれ？意外と書ける…

一作目があるので、毎回このペースでは書けないと思うのだが、待  
つてくれている読者のため、身を粉のようにし、がんばります

## 彼、龍と戦場を共にする

ある村で食事をしながら考える

「さて、ここから何処に向うか」

海沿いの呉へ向おうとしていたが、何も実績の無い人間が行っても一兵卒からだろうし、今は袁家の下についている形になっている為、回し者として疑われかねない

「とりあえず、このまま洛陽に向うか」

人が多い場所といたら、迷い無く洛陽を目指した黒獅を信じることにした

「さて出発するか…」

「さ、山賊だあー!!」

席を立った所で慌てた様子の男が入ってきた

「どうしてえ？そんなに慌てて」

「だから山賊が来たんだよ！さっき、槍持った姉ちゃんが向かっていったがあの数じゃどうしようもねえ」

「失礼、御仁。その場所は何処で？」

「誰だいアンタ？」

「我が名は太史慈子義、少しばかり武に覚えのあるものです。それより、場所を教えてください」

「余りお勧め出来ませんね。ここは洛陽の近く、時間さえ稼げれば軍が着ます。今犠牲になりに行くのは懸命ではありません」

場所の情報を聞いていたら、眼鏡をかけた知的な女性と頭に人形を乗せ、飴を啜えた少女が話しかけてきた

「ですね。星ちゃん一人では厳しいでしょうが、幸い近くに溪谷があり、囲まれる心配はありませんから、十分時間は稼げますからね。逆に足手まといが来ればそれだけ動きが制限され難くなるかもしれませんから」

酷い言われようだが、見た目が完全に優男で如何見ても使えそうに無かったからだろう。

「まあまあ、一人より二人と言います。ここは信じて行かせてもらえませんか？それにさっき言った様にこれでも武にはそれなりの自信があるのですよ」

少しの思案の後、ぼんやりした雰囲気の少女が結論を出した

「わかりました、そこまで言われるのでしたら、一度行ってみましょうか」

「ちょ、ちよつと風！」

「いいじゃないですか、稟ちゃん。星ちゃん一人でギリギリなのは本当なのだから、戦闘を見てそれでも戦えると云うのなら加勢をしもらえれば星ちゃんの負担が減りますからねえ」

二人で言い合いをしていたが少女のほうが勝ったようだ

「失礼しました、風は程立といいいます」



「私は戯志才と呼んでください」

「自分は太史慈と言います。それで早速なんですがその場へ」

「そうですね、ここからですと馬を使えば間に合うかと…。ですか  
らまず馬の確保を」

「それなら心配要りませんよ。お二人なら一緒に乗っても大丈夫な  
ほどの馬がいますから」

二人を馬舎に案内した

「これは…」

「大きいですねえ、お兄さんはどこかの貴族さんか何かですか？」

「いえ、コイツはある人からお礼にと戴いたものなんです。まあ、  
見ていただいたようにコイツなら問題なく行けますね」

「匪賊ふぜいが私を殺れると思うな!!」

眼下では、紅い槍を持った女性が一人で大立ち回りを演じていた。現在、崖の上からその様子を眺めている

「素晴らしいですね、彼女は。あそこまでの人は中々お目にかかれませんか」

その素晴らしい槍技に思わず言葉が口に出る

「不味いですね、聞いていたより何倍も人数がいます、これは星ちゃんでも危ないかもですね」

今も変わらずのほほんとした口調で話し続ける程立だが、その顔には僅かに焦りの表情が浮かんでいた。

「何言ってるんですか、それを解消する為に自分がこの場に来たんじゃないですか」

黒獅から降りて身体を解し始める

「貴方こそ何を言っているんですか！これは如何見ても時間稼ぎができる物じゃ有りません。どうにか星さんに連絡を取って撤退すべきです」

戯志才さんが慌てた様子で静止をかけてくる

「そうですね、それが賢明でしょう。お兄さんには星ちゃんに伝令と言つ形で行ってもらつて、そのまま逃げてきてください」

程立さんもそう判断を下したのか、逃げることを推す。

だがアレなら何とかできる気がするんだがな？

「一つ確認するが。伝令に行くのは良いが……別に全滅させてしまつても良いのだろ？」

だからつい、何となく言つてしまった。

その言葉に二人は絶句し、次に何言つてるんだコイツみたいな目で見てきた

「え、え〜と。黒獅、危なく成つたら逃げるなり、踏み倒すなりして凌いでくれ」

返事の嘶きを力強くして答える黒獅。

「いい子だ。では、いつてきまッす!」

「「は?」

そして俺は崖から飛び降りた

「ちっ!」こう数が多くては!」

星は圧倒的な数の違いに次第に追い詰められていく。  
足場も既に多くの屍で、不安定になっており動くに動けない、まさに絶体絶命である

「.....!」

「ん?」

そんな絶望的な状況の時に空からおかしな音が聞こえてくる

「流星！！」

それは音ではなく人の声だった。しかし可笑しい、上というところからかなり高さがある、そんな場所から人の声が？

「ブラボー脚ッ！！」

高所より落ちてきたモノはすさまじい衝撃と共に粉塵を舞い上げてその姿を隠す。

その時の衝撃で数十人は舞い上がった。

突然の介入に星は勿論、賊たちも動きが止まった

「我が名は、太史慈。義を失いし賊共よ。我が拳にて粉碎しよう」

煙から出てきたのは、若い男。星は咄嗟に槍を構える。あの高さから落ちて無傷で正常に立っているその出鱈目さ、警戒するには十分な衝撃を与えている

「そちらの槍使い、え、名前を聞き忘れていた…。事情は程立殿、戯志才殿から聞いている。とにかく此処は共同戦線にて、時間を稼ぐとしたいが如何に…」

「ふっ、もとよりこの場を退くつもりは無い！」

両名の名を出したことで、援軍であると理解した星は、不適な笑みを浮かべて太子慈の隣に並ぶ

「いい気迫です。では……」

「応！常山の昇り龍、趙子龍」

「烈火の鬼神、太史子義」

「「推して参る！」「」

彼、龍と戦場を共にする（後書き）

場所なんかは適当で捏造です。

近くにそんな場所ねえよ！とか言われても反応できないのでその辺は申し訳ありませんとしか言えないですが…

前回の技クロスは、人手裏剣（ケンイチの無敵じいちゃん）拳骨メテオ（ワンプの伝説じいちゃん）

今回の技クロスは、流星ブラボー脚（錬金のキャプテン）

感想待ってます！

彼、武器を作る（前書き）

俺は悟った…

交互に更新できるだろうと…



## 彼、武器を作る

「はい！はい！はいい！！」

趙雲が放つ突きは一突きごとに敵の息の根を止めていく

「流石は趙子龍、凄まじい速度の突きを出すものだ」

少しばかり離れたところから、戦闘を覗き見ながらも、力の籠もった拳で二三人纏めて吹き飛ばす

「ふむ、試してみるか……」

数が多いことを良い事に技の実験台にする事にし、大きく腕を振りかぶる

「魔神拳！……やはり拳圧を飛ばすのは出来ないか。ま、出来たら既に人外か」

失敗。拳が当たった人間は何人も巻き込んで吹き飛んでいったが、技は出なかった。

割と簡単に諦める護。だがまだ実験は続いていた

「嵐脚は同じ理由で却下、すると……。指銃!……これは上手くいったが、態々指だけで突く意味は何だ?」

迷走する実験、だが戦闘は確実にこなす

「いいか、手裏剣とメテオだけで」

結論、多く技を使っても余り意味がないと悟り、自身が鍛えた武術と弾制限のない技を主に使うことにした。そして賊の悪夢が始まる

「や、止めてくれ!投げないで……ぎゃあああ!……」

「い、岩が!降って来るう!……」

「たった二人で……こいつ等化け物か!??」

それはまさに天災の様な出来事、賊は戦慄した事だろう。相手が使う武器は、折れたり使えなくなるような、鉄製の武器などではなく、自分達の仲間であったり、大地その物なのだから

「これは圧巻ですな。まさかこの様な出鱈目な戦い方を為さるとは……」

「おお、子龍殿、如何された？」

「なに、太史慈殿が暴れたお蔭で、あのもの達は自分から軍に向って逃げ始めました。手持ち無沙汰に成ってしまったのですよ」

彼女の言葉で辺りを見渡せば、確かに戦う意志を失ったものたちは逃げるように散っているようだ

「…そのようだ。では、崖の上の彼女達に合流するのでしょうか」

「そうだな、そう言えばまだちゃんと名乗ってなかったな。私は姓は趙、名は雲、字は子龍と言う。それと、真名は星と言う。貴殿なら我が真名、預けられよう」

「ありがとうございます、自分は姓は太史、名は慈、字は子義、真名は護と言います。こちらこそ貴女の武には感服しました」

お互いの自己紹介をした。戦場を共にしたことで、友情のようなものが築けたような気がした

「おうおう、お二人さん、イチヤイチャしてんじゃねえぞ」

「いらら、宝？。邪魔したらダメですよ。これからお兄さん達は甘い一時を過ごすのですから」

握手を交わしていたら、気の抜ける声が聞こえたので振り返ると、なぜか黒獅が二人を乗せて降りてきた

「そ、そんな、こんな外で…ブフウー…!!」

何に反応したのか、戯志才さんが盛大に鼻血を噴いて倒れた

「稟ちゃん、トントンしますね。トントン」

慣れた手つきで介抱しだす程立さん、おそらく本当に慣れているんだろ。

「とりあえず、一度村に戻ったほうがいいですね」

「そのようだ、では行くか」

「あ！その前に」

「如何された？護殿」

懐に手を遣り、星さんに近づき

「ほれ！薬だよ。傷が残ったら大変だ」

微かに切れていた顔に薬を塗る。

「むっ、す、すまん、助かる」

帰りはゆっくり、黒獅に倒れた戯志才さんを乗せ、後ろに体力のない程立さん、それを引く俺と隣に星さんが並ぶ。

「ほう、青洲から来られたか」

先ほどいた店に腰を据え、食事を取っていた

「ええ、これから洛陽に行くのですが、お三方はどちらに？」

「私達は洛陽とは反対の方角ですな。後三日ほど滞在してから立つつもりです」

「そうですか。あ、そつだ！星さん、この近くに鍛冶屋がありますか？」

「ん？鍛冶屋ですか？それなら丁度良い、腕の良い鍛冶屋がいると聞いてきたのだがこの騒ぎ。共に行くとしますか」

「お兄さんは無手みたいですけど、何をお求めですか？」

「いや、あんな立派な馬がいるのに、馬上では無手では何もできないんで、騎馬戦専用の武器を作ろうと思ひまして」

「なるほろ。確かい、あれほろの馬なら使わない手は無いへすね」

未だに血が止まらないようで鼻声の稟さん。ちなみにここに来るまでの道中で真名の交換を行っている。

曰く、星さんが許したのならと言うことらしい。

そして向った町外れの鍛冶屋、ぼろぼろの建て住いだが、中から鉄を打つ音が聞こえてくる。

「じめん。店主は居られるか！」

「なんでえ、珍しい、客か…」

奥の工房から出てきたのは、白髪が見え隠れする男、ガッチリとした身体は鍛冶師というより兵士のそれである。

「金と重量は気にしないでいい、けして折れず、刃こぼれしない武器が欲しい。出来るか？」

「ああ？それなら出来ないこと無いが、重すぎて使いもんになんねえぞ？」

「それでいい、それ位じゃないと俺の力に耐え切れそうに無いからな」

「わあーったよ、そっちのねえちゃんは如何すんだ？」

「それなら私の武器の磨ぎをお願いしたい、それからメンマを…」

空気が凍る、何故この場でメンマなのだ

「ねえちゃん、何処でそれを…」

乗ったオヤジさん、如何いうノリだ。

「何、うまいメンマがあると聞いては来ないわけにはいくまい」

「おめえっ!!」

店主が近づき、星さんの手を握る。星さんもその手を熱く握り返し

「「同士よ!!」」

「だから何?このノリは…」

腕の良いってそっちの意味?

「いや、すまんすまん。武器のほうは三日ほどで出来るから取りに来てくれ。メンマは明日が食べ時だ、上手い酒と一緒に用意してくぜ!兄弟」



「フツ、それは楽しみだ」

終始着いていけず、苦笑いでやり過ごす。

宿への帰り道、道の真ん中で仁王立ちしていた少年を見つける。  
少年は俺を見つけると、意を決して、近づいてくる

「兄ちゃん！俺をあんたと一緒に連れてってくれ！！」

そんなことを言ってきた

彼、武器を作る（後書き）

最後に出たこの少年は、今後も主要人物として登場させて行きます。

名前は太史慈の関係者を使います。  
歴史が捻じ曲がる流石の恋姫

彼、深紅の呂旗を発見す（前書き）

黄巾党がまだ居るからこんな話を作ってしまった…

## 彼、深紅の呂旗を発見す

「何と、弟君と旅をされていたか」

突然目の前に現れた少年の台詞にフリーズしていたら、星さんが驚いた顔で尋ねてきた

「いや、私には弟はいません。濟まない少年、誰かと間違えていないか？」

なるべく傷つかない様に優しく語り掛ける。見た感じではまだ十にも満たないだろう

「いや、アンタだ！アンタ太史慈さんだろ。俺、前の街から追っかけて来たんだ！」

聞くところによると、桂花がいた町から着いて来た様だ。

「とはいっても、親御さんは如何した？俺に着いて来る事を承諾する訳有るまい」

「母ちゃんはずっと前に死んだ。父ちゃんあの時の戦いの傷の所為

で死んじまった。だけど俺、あの時の戦い見てたんだ！兄ちゃんの強さに惚れた！ついていきたいんだよ！」

この村に来るのに家にあつた金を全部使い、連れて来て貰ったらしい

「しかしだな……」

「連れて行つて遣れば宜しいではないか。それともこんな少年を一人で放り出すお積もりで？」

「うっ！？」

「そうだ！俺これ作ったんだ！アンタの旗だ！兄ちゃんほど強ければ何時か必要だろうと思つてな、作るのに時間掛かったけど、良い出来なんだ、見てくれよ！」

少年は背に背負っていた棒を前に出し、紐を解いた。そこから翻る緋色の太旗。何処にこんなものを作る余裕があつたのかわからないほど立派な物だった

「ほう、これは素晴らしいですな」

「まったく、こんな物まで……。解ったよ。君を連れて行こう、君、名は？」

そこで初めて少年は困った表情を見せる

「俺の真名は、政まつりってんだ。それ以外は忘れた」

「おいおい、自分の家名を忘れるなよ……」

「しょうがないだろ！色々勉強する前に父ちゃん死んじゃうし、いつもこつちで呼ばれてたんだから！」

子供らしく怒りながら詰め寄ってくる。今までが大人びた態度をとっていた所為か、その代り様が微笑ましく、つい笑いそうになった

「解ったよ、でもなにも無いのは不便だろう。……そうだな、これからは俺の弟として姓は太史、名は享きょう、字は元復と名乗れ。俺の真名は護と言っ」

「……いいのかよ、俺、アンタの弟名乗っていいのか！？」

「母上たちには報告しなければならぬが、お前は俺の弟では不服

か？」

「まさか！嬉しいんだ、父ちゃんが死ぬ前に言っただんだ、兄ちゃんみたいなお人に仕えたかったって。子供の俺が兄ちゃんの弟を名乗れるんだから父ちゃんもきつと喜んでるぜ！」

「そうか……。では帰るか、政」

「応！兄貴！」

「と、言うわけでコイツは俺の弟の享です、よろしく遣ってください」

「こんちわ、俺の名は……。兄貴、俺の名前なんてえくの……。姓は太史、名は享、字は元復です！」

「何が、「と云うわけで」なのか解らないのですが……」

稟さんが半眼で疑問を口にする。当然だろう、鍛冶屋に出かけて帰ってきたら弟が出来ましたじゃ如何に軍師だろうと読めまい。

その日は、その説明だけで終わってしまい、翌日は何故か星さんとの模擬試合をし、その後一緒にメンマを肴に飲み明かす事となり、その次の日は政に必要な物を買集めて時間が過ぎていった

「では、またどこかでお逢いしましょう」

そして旅立ちの日、村の前に五人が集まり最後の別れをしていた。護の背には白い布に包まれた大きな武器がある、起き抜けすぐに取りに向かい、店主を困らせてしまったが、店主曰く「斬れるし、叩ける、持つことが出来る使い手なら何でも出来るが、こんなもん二度と作らん…」らしい。

その重量は、大人三人で抱えて運ぶほどあるのだが、それを片手で持ち、背に背負った時の運んできた人間の顔はなんとも表現出来ないほど呆けていた。黒獅に乗せられるか今になって心配していたが、コイツも大概鬼スペックだったようで、問題なく走っていた

「そうですね、味方の陣地でその旗を見れることを期待してます」

「ええ、知り合いと敵対するのは辛いですからね」

「いえ、少しでも楽しめただけなので、お兄さんみたいな人が敵だと疲れてしまいますからね」



「私はそれでも良いが？敵として相對した時は先日の再戦をさせて頂きますからな」

「ははは、お手柔らかに。では我らはこれにて」

「じゃあな、姉ちゃん達！」

「お二人とも！今洛陽には黄巾党が向っているとか！気を付けて旅をしてください！」

最後に稟さんが声をかけてくれ、二人を乗せた黒獅は洛陽に駆けて行く。その速度は荷が圧倒的の増えたにも拘らず、今までと変わらない速度であったことから、コイツは今まで乗り手に遠慮していたんじゃないだろうか？

「あゝあゝあ、何だよこの井勘定は！全く、ちゃんと計算しろよな！」

数日経ち、暇になったのか、政が今有る俺達の資金を数えだして呆れていた

「す、済まない……。だがお前、勉強してなかったんじゃないか？」

「何言ってるんだ？これは俺の遊びだぞ？勉強するのはな、こつこつ難しいことをペラペラ話すことを言うんだぜ？」

これが天才か……。学ぶことを遊びと捉え、文字も数も出来る。この時代ではこの子は重宝するのではなからうか？考えが少しばかりひねっているが……

と、そこで前方に砂塵を確認した。どこかの軍が進軍しているのだろうか？

その行軍を見て稟さんの言葉が思い出される。確か黄巾党が移動をしているとか、これは恐らくそれなのだろう。

「なあ、兄貴、アレって人だよな？なんか犬も見えるけど……」

「は？………ホントだ。しかもアレは方天画戟か……？」

黄巾党の進路上に女の子二人が犬を連れてその場にいた。

すると、黄巾党から三人の少女が出てきて会話を始めたのだった

「方天画戟と言えば呂布だが、まさかあの子が？いや、星さんの例があるからありえなくは無いんだが……」

気付かれぬように、離れた位置から様子を窺う。こちらからは見えるがアチラからは上手く見えない位置取りをし、いつでも駆け出せるように手綱を握る。

話し合いは決裂したのか、女の子は手に持つ方天画戟を構え、後ろに控えていた女の子が旗を掲げた

「やはりアレは…！」

蒼天に掲げられたのは深紅の呂旗。呂布の象徴たる紅い旗だった…

彼、深紅の呂旗を発見す（後書き）

月ちゃんが大好きなんで、董卓軍に所属させようと思ったんですが、どのように入れようか迷ったところ、萌将伝の話を聞き、恋に推薦のようなことをして貰おうとこうなりました。

ちなみに、弟の件は陳宮みたいなヤツが欲しいなと作っただけで、忘れたとかは別に伏線でもなんでもないです

ちよつと萌将伝買って来るわ！

**彼、人中呂布と共に行く(前書き)**

お久しぶりです、久しぶりの更新になります。

これからは更新できると思いますので楽しんでいってください。

彼、人中呂布と共に行く

総勢三万の黄巾党と相對する深紅の呂旗。

少女の名乗り上げを聞くにやはり呂布本人のようだ。

「かけえ！かけえよ！俺もアレやりたい！兄貴の名乗りをやってみたい！」

「そうか、なら……」

旗に抱き着いたままの政を旗ごと持ち上げた。

「先に行ってよろしく」

「……………は？」

その旗を思い切り振りかぶる。

「おいおいおい！冗談がきついぜ兄貴！？」

「ふんっ！」

思い切り投げた。

「ああああアアあー……」

「行くぞ！黒獅よ、あの戦場で試し切りだ！」

その旗を追いかけけるように黒獅を走らせる。  
背に担いでいた作ったばかりの自分の武器を持ち上げ疾走する。

「……………」

呂布は振り下ろした攻撃の手を止め、上空を仰ぎ見た。

「如何したのですか、恋殿？」

「……何か来る……ねね下がる」

「……へ？」

「アあああああー！ー！ー！」

そして天より落ちて突き刺さる旗とそれに付随する人影。

「な、何ですとあー！？」

「う、ぐつ畜生、覚えてろ……すううーっ！」

落ちてきた少年に驚き、その場の戦闘が止まった。  
そして少年は大きく息を吸い込むと。

「遠からん者は音にも聞け！近くば寄って目にも見よ！地に突き立つは緋色の太旗！鬼も恐れる鬼神の象徴！戦乱を駆ける一振りの剣、太史子義は此処にあり！」

その名乗りに呼応するかのように、一体の馬が凄まじい速度で接近



してきた。

「黒獅よ、今が駆け抜ける時！」

普通より一回りほど大きいその馬は返事を返すように嘶いた。

「刮目せよ！これぞ我らの乾坤一擲の一撃なり！」

そのまま黄巾党の軍勢の中に入った。

それは余りにも無謀に見える行動、乱入者を切るために黄巾党が殺到した。

「奥義かつこ仮！斬艦刀、逸騎刀閃ッ！」

その巨大な大剣を薙ぎ、そのまま上に持って回転させた。

その回転に巻き込まれた人間は天高く舞い上がり、細切れか潰れていった。

その一度で飛ばされた数は百人は超えている。

「フッ、我らに断てぬ物なし……！……馬上だからついやってしまった」

そのまま、旋回して呂布の元に向う。  
その隙にとばかりに散っていく黄巾党。

「助けなど入らないだろうが、助太刀する」

「……………誰？」

黄巾党を追いかけて走っていた呂布だと思われる少女の隣を走る。  
黒獅子には残ったチビコンビを守らせている。

「コレは失礼、私の名は姓は太史名は慈字は子義、流れの武者者です」

「……………恋は呂布」

「ええ、知っています、有名人ですから。それより助太刀しても？」

「……………（コクッ）」

「一つ頷く呂布、これは了解したと受け取って良いんだろうか？  
とりあえず戦い続けても何も言っても来ないので、合っていたんだろう。」

攻撃範囲が伸びた事で何時も以上に人が舞う戦場になった、呂布も一回の攻撃で数人飛ばしていくので倒す〃人が飛ぶと言うよく解らない構図になっている。

「やはり、扱いはいいな。これはやはり騎馬専用だ」

雑魚相手ならば構わないだろうが、これを持って星さんの様な猛将には当たれない。

騎馬戦ならば、黒獅と言うアドバンテージがあるお蔭で互角の戦いが可能だろう。

「……………まあ戦場での戦う手段の一つだな」

戦闘はあつと言う間に終わった、その速さこそ変わるだろうが、どちらか一人であったとしても結果は変わらなかっただろう。それだけこの二人の力は異常なのだ。

（俺は前世とかがあるし、不思議なほど力が上がってるからだが、それについて来れる呂布。三国最強は伊達ではないか……………）

静かになった戦場で、呂布のほうを見る護。

その視線に気付いた呂布は首を傾げながら近づいてきた。

「……………何？」

「口下手なんだろう、その一言聞いただけで終わってしまった。

それにしても有名人が、皆綺麗な女の子だと言つのはこの世界の常識なのだろうか？」

「いや、流石は人中の呂布と思ひまして、凄まじい戦いでした」

「……………恋で良い」

「え？それは真名でしょう？いいんですか？」

「……………かまわない、話し方も普通で良い」

「わ、わかったよ。なら俺の真名は護だ、そう呼んでくれ、恋ぢゃん」

「恋殿〜！」

「兄貴〜！」

黒獅の背に二人が乗ってきた。

それにしても黒獅は大人しいな、誰も乗せたがらなかったのが嘘のようだ。  
そして恋が連れていたちびっ子はこっちを見ると黒獅の上で立ち上がり

飛んだ。

「ちい〜んきゅう〜きい〜い〜つく〜!」

「……は?」

こっちに向って飛んできたので、その足を掴んで一回転し、勢いを弱めて着地させた。

「はっ!」

「百点っ!」

体操選手のように手を上げポーズを取ったので、ノリで言った。

「って、違うのです!何故受け流すのですか!」

「いや痛いのは嫌だろ、そして何故いきなり蹴りが飛ぶ」

「恋殿に近寄りすぎなのですっ！あいたっ！？」

「いきなり蹴るのは……ダメ」

「恋どの……」

その後、自己紹介などして、要らない助けだったなど恋殿一人で十分だなど、色々言われてしまったがとても良い子だった。

そしてその子の名を聞いて驚いたような、納得したような……  
とりあえず真名を呼んで良いことになったが、恋から言われて了承するという不思議な真名交換だった。

「ふむ、此処も片付いたので俺達はコレにて引かせてもらおうが……」

「……行っちゃおうの？」

「洛陽に行きたかったから、向っている途中だったんだが、急がな  
いと暗くなってしまうし……」

「それなら一緒に来るが良いのです！もし仕官するなら、ねね達が口利きをしてやるのですぞ！恋殿程ではありませんがそれなりに武は期待できそうです」

「おい！勝手に決めるなチビ！決めるのは兄貴だ！」

「チビと言つなです！お前の方がチビでは無いですか！」

チビコンビはにらみ合い、牽制する。

「にらにら、喧嘩するなよ政……」

「チツ、しょうがねえな」

「ふふん、やはり子供は素直です」

子供、の部分をやたら強調して挑発する。

「なんだと！」

「……ねね喧嘩ダメ」

「はいです…!」

「ぶっ!」

「むっ!」

その後もにらみ合いは続いた。

似た物同士の同族嫌悪が原因かな? やたらと相性が悪い二人であった。

行き先は変わらず洛陽。

口利きをしてもらい董卓軍に入る事になった。

「……………あれ? 董卓軍って連合軍にやられないか? ……人柄次第かな、恋ちゃんも従ってる位だからきつと良い人なんだろう。圧政なんかしてそうに無いな」

呂布である恋の性格が史実である物と大きく違うことと、幾つか立ち寄った村でも悪い噂を聞かない事から決めた。

「次に会えるのは董卓か、ゲームでは酒池肉林とか言ってた人なんだがどんな子なんだろうか……………」



恋から聞いた情報では可愛らしい女の子らしい、その事に思いを馳せて一路洛陽に進路を取った。

「兄貴そつちじゃないよ!」

「なに!?!」

彼、人中呂布と共に行く（後書き）

ぶっちゃけまだ買い直せてないんですが、もう良いか、と半ば諦め書いています。

なので合っていない所など沢山あるかもしれませんが。

まだ月ちゃんは洛陽に居ないよ！とかあるかもしれない、このとき  
どう言う状況だったか全く忘れてしまったので何かありましたら感想  
ください

彼、人外と認定される……（前書き）

更新しました！

今回はマジで御免なさい。

プレイし直さずに、書いたので可笑しなところが有ると思います。

彼、人外と認定される……

「すまない、もう一度お聞きしたい。董卓殿は……」

「だから目の前におるっちゅーとるんじゃ！いい加減にしいや！」

目の前にいる四人の女性、一人はさらしを巻いた何故か関西弁の武将張遼、もう一人も武将で名は華雄、そして恐らく軍師に当たるのだろう眼鏡の女性は賈？、矢張り過去有名だった人物は皆、女性のようなだ。そこまでは良い、いや良くはないが、とりあえず此処まできたなかで苟？、趙雲、呂布などが女性であった事から、予想はしていたが問題は

「へう」

この子である。

女性とは聞いていた。

がコレは完全に予想外だ、考えていた人と違いが有り過ぎて何度も聞き返してしまった。

女性ではなく、もはや少女だ。

人を殺せそうにない、と言うか虫すら殺せそうに無い。

しかし、弱弱い印象は無い、むしろ芯は確りとしているように見える。

決断するところでは確りと、出来るだけの強さを持つてるかもしれない。

何だ、この矛盾は……。

「それで？こいつを雇えと……確かに今武官は欲しい所だけど、いきなり連れて来て、はいどうぞって訳には行かないのよ？」

武官が必要と言つのは恐らく先頃聞いた、靈帝の死が関係しているのだろう。

この場に入ってきた時もなにやら会議をやっていた。

「……大丈夫、護、強い」

「まあ恋殿程ではありませんが、それなりに使える事は保障しますぞ！」

二人が口を揃えて、褒めるので賈？はどうした物かと思考に走る。

「それなら先ず、その武を見せてもらおうかしら？」

「せやったらうちがやる！」

一番に名乗りを上げたのは張遼だ。

「……ダメ恋がやる」

だが、その名乗りに待ったを掛けたのは恋、その事にその場に居た者は驚愕する。

彼女が自分から名乗りを上げるのは初めてではないだろうか。

「珍しいわね、あなたがそう言うなんて……」

恋も武人、共に戦場に立つたことで如何程か興味が湧いたのかも知れない。

そして場所は調練場に移る。

「兄貴いー！頑張れよー！」

調練場には既に数人の兵士と政がいた。

「あの子は？」

「俺の弟です、失礼がない様にあの場には連れて居ませんでした。何が居るんでしょうね？」

全く解らない。

いくらかの金を渡して、外で待っているように言った筈だったのだが……

「まあ其れくらいなら問題ないわ、其れよりアンタも武器を構えなさいよ」

賈？が調練場の端に置いてある大剣型の模造刀を指差した。その種類には幅があり、一般的な剣から、戦斧、大剣、槍など等、訓練しやすい環境を作っている様だ。

「俺は基本無手なので、武器は必要ありません」

「はあ！？じゃああの馬鹿でかいのはなんなの！？」

持ってきていた護の大剣を見たからこそその反応だろう。

「アレは、騎馬戦の時専用です。そうじゃないとあいつの背に乗って戦えない。其れより、此方の準備は良いのでそろそろ始めましょう」

既に恋は戦闘に思考が切り替わったのか、その眼差しは身体を貫く。護はその視線に身震いを感じた、武者震いと言うものだろう。

なぜなら、その顔は笑っているのだから……

「ではこれより、呂布、太史慈の模擬戦を行う。両者構え！」

それに合わせて構えを取る、虎立ちと呼ばれる構えだ。恋も槍をまっすぐこちらに向ける。

「始め！」

「……行く」

最初に仕掛けたのは恋、ただ普通の振り下ろし、しかしその速度は普通を軽く凌駕していた。

「速い！」

護はそれを斜め前に一步移動する事で回避し、そのカウンターで回し蹴りを繰り出す。

しかしその蹴りをしゃがむ事で回避し、恋は近づきすぎたと悟ると、拳を握り放つ。

護はその拳を、手で逸らし前蹴りを放つが、それを飛び退く事で恋は避けた。



「避けられた」

「それはこっちの台詞だよ、あんなに簡単に避けられるとは思わなかった」

そこから繰り広げられる両者のぶつかり合い、恋が本能と直感の戦い方に対して、護は理に適った動きで応戦する。  
全く戦い方が違う両者、しかしどちらも同じ領域に存在する。

飛將軍呂布と謳われたものところまで互角に戦う人間は果しているのだろうか。

「これは予想以上や、くうくうやっぱうちがやれば良かった！いやコレ終わったらやればええやん」

名案とばかりに頷く張遼、それに華雄が食って掛かった。

「次は私がやるのだ！お前は下がってる！」

「なんやて、勝手にきめんなや、次はうちとやるんや」

「ならば先にお前と決着をつけてやるうか」

「望む所や、かかってきい！」

護の知らない所で、また一つ戦いが始まった。

「詠ちゃん……」

「うん、ボクも驚いてる、まさかここまで出来るなんて……もしかして結構な拾い物？」

「そうじゃないよ詠ちゃん、早く止めないと此処が暫らく使えなくなっちゃうよ」

「……え？」

まだ戦い続ける護と恋、それに端の方では何故か華雄と張遼まで戦

つていた。  
調練場は、二人の戦いで穴だらけ、周りの壁などは華雄達が壊しながら移動している。

「ちょ！？ヤメヤメ！解ったから！雇う、雇うからこれ以上壊すな  
あー！」

「まだ、決着付いてない……」

「それはもう良い！だからあの二人を止めてきて！」

戦いを止めた二人、護は各所に擦り傷を負い、恋には打撲痕が見える。  
息を少しだけ切らしている恋は何処か不満そうだが、護は晴れやかに笑って止めに走っていった。

「人中の呂布に張り合う、人外の太史慈……アイツの蹴り跡でしょ  
コレ……」

「すごいねえ」

董卓と賈？はあの二人の戦闘痕を覗き込み、驚きを通り越して、呆れてしまった。

護は董卓の私兵として雇われる事になり、軍に席を置き、一軍を任  
される事になった。

こうして噂は広まっていく。

黄巾党三万を相手取る人中の呂布と人外の太史慈として二人の名は  
各所の勢力に知られる事になった……

彼、人外と認定される……（後書き）

Wikiに呂布が人中と言われていたと書いてあった時から、人外を使いたかった作者。

このたびチョコツと不名誉な通り名が付いてしまった護君。

そして恋ちゃんとの戦いは決着付かず終了。

うん、幾ら最強系でも簡単に倒してしまうと面白みが欠けてしまうし、恋ちゃんは負けないから恋ちゃんなんですよ！

なので今後も恋ちゃんとは決着をなかなか着けられないと思います  
がよろしくお願いします。

恋姫の褐色のキャラは全部好きである。

恋ちゃん癒されるが、まだ足りない、もっと俺に褐色娘を！早く  
呉に行きたい……

**彼、部隊を構築する(前書き)**

更新です！

ダラダラ書いてます。

楽しんでくれれば幸いです

## 彼、部隊を構築する

「いくで、護！」

「ふん、我が戦斧で蹴散らしてくれる！」

「何故こうなった……………」

こうなった経緯は少し前に遡る……

「さて、此処が隊舎か……………」

護が董卓軍に席を置いたのは良いが、董卓の私兵であるし、官位などもない、ほぼ無名の人間だ。

そんな人間の部下になりたい等と言う人間は居る筈は無く、急に將軍が増えたからといって、部隊がすぐに作れる筈がない。

と、思っていたが何故か誰も率いていない部隊が存在していた。

董卓の前にこの地を収めていた人間の時から兵で、能力はそれなりにあるが問題はかり起こすので、一纏めにした問題児部隊らしい。

「賈馱ちゃんがかかなり渋い顔をしてたのが気になるけど……」

そして隊舎の扉を開ける。

「……………ああ？アンタ誰？」

だらけ切った兵士達。

成る程、コレならば渋るのも頷ける。

「俺は、今日からこの部隊の隊長を任せられた、姓は太史、名は慈、字は子義だ」

その発言にその場の兵士達が反応を示した。

「はははっ！何だアンタこの部隊を押し付けられたのか！災難だったな！」

誰かがそんな事を言ったことでその場が不愉快な笑いに満たされる。

「別に災難という訳ではないが……………其れより早速だが」



「嫌だね」

「何故？」

「俺達は誰にも従わねえよ、今までそうだったんだ、今更命令されて堪るか……」

リーダー格の男が前に一步出てきてそう言って来た。

兵役の癖に何と自分勝手だ、とも思ったがなまじ能力があるせいで、辞めさせるに辞めさせられなかったのだろう。

「そうか解った、なら賭けをしよう」

「……は？」

「これから訓練場に行って俺対お前たちで模擬戦。お前達は俺に一撃を入れるだけで勝利、俺の勝利条件はお前達が誰も動けなくなったらだ」

「……その報酬は？」

乗ってきた。

周りの兵士達の目もギラついて来た。  
暗に一撃すら与えられないと言われている様な物だ、怒り感じているのだろう。

「これから先お前達には一切命令をしないし、給金は確り払う、逆に俺が勝つたらこれからは俺の指示に従ってくれ、如何だ？」

「解った、其れで良いぜ。今から行くのかい？」

「ああ、その積りだ。そもそも初めから今日はお前達の力を見せてもらう積りだったからな」

そして調練場に移り数十分。

「うつ、いてえ……………」

「うげえ……………ゴホっ！」

「ぜえぜえ……………」

懸命に攻め続けた兵士達だが、宣言通り一撃も喰らわす事が出来ず、逆にその身に一撃ずつ入れられた。

「成る程な、確かに一般の兵より能力が高い、よしではコレで終わりにするが……」

「待てよ、俺達はまだくたばっちゃ居ないぜ……?」

護としてはそれなりに本気で殴ったのだが、数名が気力で立ち上がってきた。

「何故立ち上がる?そんなに命令されるのが嫌か?」

「ああ、やだね!今まで俺達がどんな命令をされてきたか知ってるか!?言う事を聞かない殺せ、子供が邪魔だ殺せ、そんな事ばっかだったんだ!今更お偉いさんの言うことなんか聞いてられるか!」

其れは前の統治者だ、しかし彼等にとってはそれは如何でも良いことだ。

命令されてそうしてしまった、その事実だけで十分だ。

「なら、何でお前達は軍を辞めていない……」

「守るためだ！俺達の家族はこの街で暮らしてる、戦う以外俺達にはできねえ、だから戦って守る！今度可笑しな命令してるやつ見つけたら俺はそいつを……殺す！」

「なら俺と来い……俺は乱世を終わらせる、この武を持って！この街だけじゃない、この国の全てを守る！だから俺の後ろで俺を守れ！」

彼らには衝撃だった、真剣にここまで話をしたのは軍に入って初めてだったからだ。

そして護に全てを守ると言われ器の大きさの違いを理解した。

（俺達はこの街で限界、いやこの街すら守れてないのに……この人は……）

「だから俺と」

「何や、護やんか！良いところに居るやん、これからうちと一戦やっつてえな〜」

「だから私が先だといっているだろうが！」

しなを作って寄りかかってくる霞とその横から割り込んでくる華雄、  
全てが打ち壊しである。

「……………」

護の肩が震える。

「なあゝええやる？」

「何を言っている私と試合だ！」

「ええい！うるさい！纏めて相手をしてやる！かかってこい！……  
はっ！」

自分で似合わない事を言った羞恥心から言っではならない事を口走  
ってしまった。

「それ良いわね、丁度良いから私達も見学させてもらっわ」

「頑張ってください」

「護、頑張る……………」

「恋殿の応援を無碍にしたら許さないですよ！」

「頑張れ兄貴！！」

何時の間にか軍の重鎮が揃い踏み。

因みに、政は賈馱ちゃんに弟子入りして何やら政治関連を学んでいるようだ。

「やってしまった……」

そして冒頭に戻るのである……

目の前で武器を構える董卓軍の將軍お二人。

それに立ち向かうは俺一人。

ギャラリーは周りで倒れる兵の皆さん、それと笑顔で観戦している董卓ちゃんに賈馱ちゃん、たまたま見に来ていた政に恋は散歩の途中でネネは恋の付き添いで見ている。

因みに霞さんとは真名を交換した、武に惚れ込んだとか言っていた気がするが、武人として強い者には礼儀を、と言った所だろう。

「シヤアオラアアアー！！」

神速と呼ばれるほどの張遼こと、霞の突き。

矢張り槍の突きは線ではなく点であるので避ける事も受ける事も難しい。

「ふっせい！はっ！」

突きを丁寧に捌いていく。

そして突き出した槍を引いた瞬間に距離を詰める。

「どんな突きの達人だろうと、引かねば突けぬが物の道理。もらった！」

「私を忘れるなあー！！！」

寸での所で華雄の戦斧が、護と霞の間を横切る。

「ハア、やつぱり二人を相手にするところなるな……訓練になるから良いけどさ」

二対一にも拘らず、押しているのは寧ろ護である。

護の基本的な動きはテコンドー、蹴り技主体の戦い方でリーチを補い、腕で防御を固め、敵の武器を捌いたと同時に足がその首を狙う。

「なんや、素手の相手はこんなにやり辛いんかい！」

「まあ、俺の戦い方は基本となるものに色々混ぜてるからな、変幻自在ともでは行かないがそれなりに、な！」

テコンドーという武術は他の武術に劣ると考えられているがその実、足技ならばその多彩な攻撃手段はほかを圧倒する事がある。どの武術にも言えることだが様は熟練度の差である、故に普段使わない手を回避、防御手段にする事でその力を十二分に発揮する事が出来る。

「だから、私も居るんだぞ！無視をするなあー！」

激しさを増す訓練。  
其れを呆然と眺める兵士一同。

「なあ……………」

「何だよ……………」

「俺、あの人に着いて行こうと思うんだ……………」

「んなの、皆同じだ」

「そうかよ……………」

そして、太史慈隊はこうして結成された



**彼、部隊を構築する（後書き）**

如何だったでしょうか？

色々独自解釈ですが、良いかなあ〜と書いてます。

後何話かオリジナル入れて連合を書きたいと思います。  
それでは感想待ってます！

彼、時代の脈動を知る（前書き）

更新です！

今回はやってしまった感がありありと出ております。

## 彼、時代の脈動を知る

「……………」

日課である瞑想をこなしている護の近くに董卓が近寄ってきた。

「何をされてるんですか？」

「日課の瞑想を……董卓ちゃんこそこんなに朝早く如何したんだい？」

今は、やっと日が差し込んで来たばかりの早朝。

此処に来て数ヶ月経つが、このような時間に起きてくる人間は珍しい。

「私は珍しく早く起きてしまったので散歩に……それと、月と呼んでください。詠ちゃんや他の將軍さんには大抵そう呼んでもらっていますから。それに何ヶ月も経つのに呼んでくれないのは寂しいです……………」

「いや、望まれるのなら構わないけど、俺が呼んでも良いのか？」

「はい、勿論です。ところで瞑想って何でしてるんですか？」

聞かれた護は辺りを見回して、近くに落ちていた石を拾い上げ、軽く握った。

そして手を広げて見せると、握られていた石が粉々に砕け、小さくなっていた。

「この通り、少し力を入れただけでこれだからね。戦場ではこの力は有用だけど、日常生活は集中しなくては、周りの物を壊し過ぎるから、暮らし辛いんだ」

「大変、なんですね。……えと、邪魔じゃなければ、少しここに居ても良いですか？」

「ああ、構わないよ？集中するから話は出来ないけどね」

其れを聞いて近寄ってきた月を見て無性に頭を撫でたくなり、撫で上げてしまった。

「へう……」

撫でられた月は顔が赤くなり、身体が硬直していたが、暫らくすると身体が解れ静かになった。

その後瞑想らしい事はしないで、ずっと頭を撫で続ける護であった。

そこは薄暗い隊舎の一室。

そこに集まる六つの影は、頭を突き合わせ今後の予定を話し合っていた。

「今までの反応は上々、兄貴にも気付かれていない……」

一番小さな影が話し始めた。

「ああ、俺達もまさかこんな方法が有るなんて思わなかったぜ、しかし本当に知らせないでよかったですか？」

「そうだ、俺達は太史慈様の為にこの命を使うと決めた。其れなのにあの人に内緒で事を進めているのは……」

「何を言うのだ、赤、緑よ。あの人は誰かのためと言うが自分の事になるとてんで無頓着なのだ。僕達があの人を為に我らの部隊が優秀だと言うことを示さねばならない！」

「青、お前……」

「そういう事だ、行くぞ！今度の警邏でも精一杯暴れて来い！」

「「「「「了解！博士！」「」「」「」

「ところで博士って何ですか？」

「ん？兄貴がこういった組織を引っ張る存在は博士と名乗ると言うてたから、俺も知らない」

不思議な集団がその日の警邏に向っていった。

「ふう、これで今日の仕事はあらかた片付いたか」

「あ、ちょっと良いかしら護？」

声を掛けて来たのは賈馱、ここ数ヶ月で主に政策について何度か意見交換をしている。

これでも此処で生きる前は、一流と呼ばれる企業に勤める所まで行った自分、この時代で足りない物、新しく取り入れる物などの指摘が出来る。

「成る程ね、ありがと、助かったわ」

「問題ないよ、俺で役に立てるなら何時でも声をかけてくれ、賈馱ちゃん」

「……それいい加減止めない？月にも真名を預けられたんでしょ？私も良いわよ、私の真名は詠。これからそう呼びなさい？」

「あ、ありがとう」

「それにしてもアンタ本当に凄いわね、私でも思いつかない様な事まで平気で出てくる、それにアンタの部隊の演目の評判も良い。最初は正直アレには賛成できなかったけど……」

聞きなれない言葉に護は首を傾げて聞き返す。

「ちょっと待ってくれ、演目？」

「え？アンタの弟が持ってきた企画書で、前の統治者の所為で不信感のある民の心を緩和するためって事で……」

たまたま持ってきていたのか、懐からその企画書が出てきた。

そこに書かれていたのは『太史連者民を守る！』と書かれた子供が発想しそうな幼稚なネーミングだがミツチリと書き込まれた計画書だった。

「何てこった……」

「熱い魂をこの胸に！赤連者！」

「青空のような大きな心！青連者！」



「森が大好き！緑連者！」

「黄巾じゃないよ！黄連者！」

「男だけど！桃連者！」

「……我ら！五人揃って！太史連者！」

そして仮面を被った彼らは思い思いのポーズを取り、彼らの周りで籠を持って民の間を歩いていく政。

「どづもありがとづいづいます！あ、どづもどづも。ありがとづいづいます！」

籠の中に見物量としてお金が放り込まれていく。

「良し良し……これで我が家の経済は安泰だ」

「なあゝにが安泰だ？」

空気が凍った。

ギリギリと音を立てながら首を後ろに向かせる。

そこに居たのは護、顔が笑っているのだがそこからじみ出る恐ろしい覇気に町民は逃げて行き、部隊の人間は直立不動。

「計画書通りの事をやっているなら見逃していたのだが……しかも  
仮面まで作って……」

「い、いや、これには訳が……」

そして焦りながらも懐から、ある一枚の紙が出された。

「何だ？くだらん言い訳なら………これは本当か？」

首を縦に振り続ける政。

出された紙というのは、太家の家計簿、そこに書かれているのは赤字寸前の文字。

「だって兄貴、恋さんに飯をやり過ぎるんだもん、お蔭で食費で家計が……」

「うー？しかし、あの顔を見ていると何かを上げたくなくなるじゃないか！……良し見なかった事にしよう」

その場から逃げるように去って行く。

「よし！隊長公認だ！締まってこお〜！」

「『『『『オスツ！』『』『』』」

背後から気合の入った声が聞こえてくるが、其れを無視して帰るところにした。

「それにしても、副長が赤か……あいつ一番気合が入ってたな……」

そして、それから数週間経ち、やっと民達の間でも活気が溢れ始めた頃事件は起きた。

「た、大変です！」

会議中、突然扉を思い切り開けて侵入してきた。

「何事！今は会議中よ！？」

「そ、それが！袁紹が諸侯達に檄文を送り連合を結成！我が軍に宣戦布告をしてきました！！！」

これを聞いた護は、歴史は簡単には変わらないと理解し、これから先で歴史を変えられるか、真面目に思考を始めたのだった。

## 彼、時代の脈動を知る（後書き）

太史連者登場！

……うん、ふざけ過ぎかも、ただ蜀に訪れる事があつたときの為に華蝶仮面と夢の競演を実現するために作っただけなんだけど……  
因みにこれから出てくる場合、呼び名はそれぞれ、赤、青、緑、黄、桃となります

そして次回から連合です。

展開がバカみたいに速いですが、自分にオリジナルの話を作るのは限界がありしょうがないと諦めています。

感想、ご指摘、何でも待ってます！

彼、各勢力の動きを知らず（前書き）

更新しました！

うる覚えだ、関での董卓軍の勝利条件ってこんな感じだったっけ？

## 彼、各勢力の動きを知らず

檄文。

其れは袁紹が諸侯に送った文、その内容は圧政を敷く董卓を討て等、其れらしい事を並べているが、内容を要約すると、気に入らないから倒します、である。

其れを諸侯が承諾し、連合が結成された。

この連合はくだらない欲望から始まり、これから始まるであろう群雄割拠の狼煙の様だった。

「まさか、こんな形で彼女達とぶつかる事になるとはな……」

目の前に広がる軍勢、連合のものだ。

金、青、赤、緑と色取り取りの鎧が目を惑わしているようだ。

記憶違いでなければ、青の軍勢曹操の所には既に桂花が仕官している、別れ際に曹操の元に向かうと言っていたし、あれだけの才があれば先ず間違いなくこの戦いでも作戦を立案している事だろう。

そして、緑の小さな勢力、常人では見えないが、護の目には確りと趙の旗が見えていた。

「コレはキツイな……」

全体の総数が互いに同じだとしても、此方は関での防衛のため人数が限られ、一度に戦場に投入できる数は向こうが上。

そのため詠から説明された今回の戦いの主目的は時間を稼ぐ事。

連合の弱点は補給唯一点、兵糧さえ尽きれば連合は退却する。  
？水関に護と華雄、そして虎牢関に恋と霞をそれぞれ配置し、出来  
うるだけの時間稼ぎを行う事となった。  
しかし、相手に優秀な将、軍師が多数存在する、関に籠もって数日  
持つかどうかだろう。

「虎牢関が正念場か……」

護はその事を確認して後ろを振り返る。

そこには今にでも飛び出してしまいそうな華雄がいた。

「難儀だ……」

その華雄を何とか抑えるのが、今回護に与えられた最大の任務なの  
かもしれない。

「？水関攻略は公孫賛と劉備ですか……」



連合軍の陣内にて曹操は次行われる？水関攻略を自分の軍師荀？に知らせていた。

「ええ、連合の初戦、我々で引き受けた方が良かったかしら？」

歯切れの悪い荀？に曹操は聞きなおした。

「いえ、？水関の将は華雄とまも……太史慈の二人。華雄はそれほど強い相手ではありませんが、太史慈は危険です。飛將軍呂布に匹敵すると言われる力は脅威、戦力は虎牢関まで温存させておくべきかと……そしてもし、太史慈、彼が野戦に打って出てきた場合、距離を十分に開けなければなりません」

荀？は自分が知るだけの太史慈の戦い方を伝えていく。

「……………」

「如何したのかしら、一刀？」

話を聞きながら、無言になっている本郷一刀に声を掛ける曹操。

「太史慈って言う武将は俺も知ってるうけど、呂布に匹敵すると

は思えなくて……」

一刃は自分の知っている太史慈を語って聞かせる、確かに優秀な将だったが、そこまで逸脱した者ではなかった筈だと。今まで見てきた差異の中で一番の食い違いを感じた。

「そう、貴方の知ってるもので、今までズレていなかった個人の武が此処にきて大きく裏切られたと言う事ね」

これまで一刃は幾つか歴史のズレを知ってきたが、個人の武勇、勢力に所属する人間まではそこまでの差異は無かった筈だったが。だが聞けば聞くほど、その太史慈の個人の武力は圧倒的に違いすぎるのだ。

「全てが全て貴方の知る歴史とは違うということなのでしょう。…  
…今入った情報をあとで公孫賛と劉備のところにも送ってやりなさい」

曹操は情報を流し、恩を売ると同時に劉備の戦いぶりを見極める事にした。

「やれやれ、やはり彼が相手になるのですか……」

「星ちゃん知ってるの？」

劉備の陣営に曹操から情報が流れてきた。

その情報から得られたのは関を守る将が誰なのかである。

「太史慈と言うのは旅の途中に出会った友人です。しかしそうなる  
と、この戦いかなり厳しいものになるかも知れませんか？」

「如何いう事だ？」

「護……いや、太史慈は噂で聞くよりも恐ろしいやつだと言う事だ」

趙雲から太史慈の戦い方、人柄等を聞いた。

その中には俄かには信じがたいものもあつたが、どれもが直接見た  
趙雲からの情報だ、嘘なわけがない。

「くっ、何故それほどの豪傑が圧政などを敷く人物の元にいるのだ

!？」

「其れは解らんが……奴は金や名誉で動くような奴ではない、情に厚い男だ」

彼女らはこの連合の大義名分に違和感が増したのだった。

「それで??水関の将は二人だっけ？」

孫策は自身の親友であり、軍師である周瑜に確認を取る。

「ああ、先程帰った斥候から新しい情報だ、間違いない。関に籠もる敵将は華雄と太史慈の二人だ」

「華雄って確か、母様にコテンパンにやられた武将じゃない。たいした事無いんじゃないの？」

「さてな、あの時は華雄の同僚が暴走し、部隊が混乱に來たした。その隙を文台様によって突かれ敗走したのだが、あの時の戦いを基本にして、華雄の能力を推し量るのは危険だろう。更に、飛將軍呂布と並ぶと言われる太史慈もいる、一筋縄ではいかないだろうな」

其れ聞いた孫策は口元に笑みを浮かべる。

「へえ、劉備って言ったっけ。お手並み拝見ね？」

新参勢力ながら優秀な将を多数保有する劉備の戦いを曹操と同じく見極めることにした。

「……………冥琳は行ったわよね？」

孫策は周瑜の目を盗み、陣内を出て行く。  
流石に一人という訳には行かず、周泰を連れているが、隠密のため姿を隠している。

「あの……………どちらに？」

「ちよ〜っとね、あそこにいると息が詰っちゃう、だから息抜きよ」

孫策は陣から出て暫らく歩いていく。

「青！太史慈將軍は何処だ！？俺達だけだと華雄將軍を止められない！」

「解らない！見当たらないんだ！博士にアレだけ注意されたのに迷子になってるのかも！」

「くっ、それなら桃！黒獅を放して探しに行かせる！俺達より速い！……華雄將軍！？何で俺達に向けて戦斧を構えてるの！？」

「いいから……離さんかあああー！」

「……太史慈將軍ー！助けてええー！？」

「……此処は何処だろうか？関にいた筈なのだが……なんか悲しくなってきた……」

護は何処とも知れない場所を歩いていた。

「あら？」

「ん？何方でしょう？」

そして護は顔を知らないが為に気が付かないがそこに居たのは孫策だった。

彼、各勢力の動きを知らず（後書き）

護君……君は何処に向っているんだろうか？

作者も解らなくなり始めてます……迷子スキル発動！そして邂逅です

感想、ご指摘なんでも待ってます！



彼、小霸王と武器を交える（前書き）

更新しました。

明命ちゃんごめんよ、君の台詞が少ない……

## 彼、小霸王と武器を交える

「申し訳ない。その御二方、迷子になってしまったようなので不躰ながら道を教えてもらえないだろうか？」

既に空は暗く夜の時間、護は速く帰ろうと目の前に居るピンクの長髪に褐色の女性と、今は隠れている姿の見えない人物に語りかける。

「可笑しな事を言うのね、此処には貴方と私だけよ？」

護は首を傾げながら、ある一点を指差した。

「そちらの人はお知り合いではないのですか？動きからして護衛か何かだと思ったのですが……」

孫策と周泰は驚き一瞬表情を変えた。

周泰は隠密を得意とし、今まで気付かれた事はなかったのだから。

「はあ、もういいわ、出てきなさい」

孫策に言われ出てきたのは、黒い長髪にその人物の背ほどある太刀が印象的な少女だった。

「素晴らしい、その歳であればどの隠密を心得ているのか……」

護は素直に感心して笑顔を見せ、笑いかける。

「何で解ったの？この子の気配は消えてたと思ったんだけど、私は何処に居るか気付けなかつたし……」

興味深そうに理由を聞いてくる。

「おかしなことを言いますね？人間、いや、生き物がそこに居る限り気配と言うものは無くなる物では有りませんよ、っとそれよりも？水関はどちらの方角でしょうか？」

「？水関ならあつちだけど。ねえ貴方何処の所属？ウチに来る気ない？」

孫策は太史慈の顔を知らない為に、この場にいることで連合所属と勘違いして勧誘をした。

護もまさか自分が連合の近くまで迷っているとは気付かずに自己紹介を始めた。

「申し遅れました。自分は董卓軍所属の將軍、性は太史、名は慈、

字は子義です。？水関の場所を教えてください、どうもありが

護がそこまで口にした時、周泰が斬りかかっていた。

「まさか董卓軍の將軍、其れもこんな大物がこんな場所にいるとは思わなかったけど、気付いてしまった以上、その首置いていってもらうわよ？」

護は周泰を弾き飛ばした。

襲撃が失敗した周泰は、その場で様子見の構えを取る。常と変わらぬ態度で護はその場で首をかしげた。

「え〜と、お名前を聞いても？」

「私は孫策、でこっちが周泰」

名前を聞いた護は呆然とした。

「江東の麒麟児……だと？すると此処は連合の陣地近く？」

額に手を当てて、溜息を付いた。

自分の最大の欠点が最悪な形で効果を発揮したことを悟る。

孫策は腰に刺してある剣を引き抜き構え、周泰は先程と変わらず、警戒しながら様子見をしている。

「死合いましょう……二対一でも悪く思わないでね？貴方みたいな強いのと一人で戦うと冥琳がつるさいのよ」

踏み込んでくる孫策、其れを援護する形で背後からは周泰が迫ってきた。

「……問題ないですよ、慣れてるから……ふっ！」

孫策の横薙ぎの一閃を後ろに飛び回避して、その飛んだ勢いそのまま周泰が太刀を振りきる前に蹴りを放つ。

防いだ周泰だが、勢いを殺しきれず僅かに距離が離れる。

その間完全に一對一、僅か数秒だがその数秒が大事だったりする。複数と戦う場合、どの様に一對一にするかが、攻撃の範囲の狭い無手の使い手が常に課題とする所だ。

「シッ！セイッ！」

護の蹴りを寸での所で防いでいく。

上下左右と蹴り足が変幻自在と言わんばかりの動きに戸惑う孫策。

「うわ、はやっ！グッ!？」

防ぎきれない物が孫策の身体に当たり横に吹き飛ばす。

割と本気で蹴りを入れたが、死にはしない程度に力を抜いている。

護は将来、自分が仕えるかも知れない相手を殺すような事はしないもつとも、この連合相手でも負ける積りは無い為、暫らくは無いと思っっているが。

「雪蓮様!？クッ!」

焦りの余りに接近し、大振りの攻撃を放とうとする周泰だが、護は太刀の柄を蹴り上げて太刀を弾き、弾いた足をそのまま前蹴りの要領でその腹部に蹴りを出す。

「フウ、こんなものか……!？」

周泰を気絶させ、一段落かと思ったが、咄嗟に感じた悪寒。

その悪寒に従い、頭を思いつきり下げる。

護の頭の上を剣が通り過ぎていく、その剣は孫策が持っていた物だ。

「……………」

振り返ると、そこには孫策がいたが、その印象が先程と違う。

ピリピリとした殺気が肌に伝わる、其れはどこかで見たとような暗い変貌。  
先程まで軽口を叩いていた人物とは思えないほど冷たい目をしてい  
る。

「……随分と、危ないものを身に宿しているな……」

偶に居るのだ。

この様に、戦いながら理性が薄れてしまう人間が。  
所謂、狂化状態にあるのだ。

「熱い……身体が……」

「いいだろう、その熱が収まるまで相手をしてやろう……来い」

その対処法は知らないが、経験上捌け口になってやればいい。  
皆戦いを通して発散させていた。

そこから始まる激しい連撃、先程とは比べ物に成らないほど鋭く熱  
い攻撃。

「はっ！」

自然と口元が緩んでくる、楽しくて仕方が無い。

実力は恋に及ばないが、霞を微かに超える気がする。  
これだけの實力ならば、捌け口など出来なかったらろう、毎回殺し合いに発展するものに付き合うものなど居る筈が無い。

「……恐らくは、他の発散の仕方をしていたんだろうなっ」と!

「ウゲツ!?!」

防御の上から力尽くでダメージを通す。

そのまま地を滑りながら後退し、耐えた孫策だがそのままへたり込んでしまった。

「ハア……ハア……」

体力が切れたようで息切れを起こし、まだ顔に赤みが差しているが、興奮も抜けているようだ。

護は周泰を担いで孫策に静かに近寄っていく。

「……仕掛けといて何だけど、やっぱり殺すの……え?」

孫策は止めを刺されると思い覚悟をしていたのだが、頭に暖かい物が乗せられて見上げる。

護が乗せているのは自らの手、孫策の頭に手を置いて撫でているの



だ。

「今日はもう帰って休むといい、迎えも来たみたいだし……」

「……おゝ、策殿！」

暗くて良くは見えないが、こちらに向って歩いてくる女性の声がする。

其れとは反対の方角から馬の蹄の音も聞こえてくる。

「出来れば君の傍で、毎回その熱の相手をしてやりたいが、今は敵同士なのでね。今回だけで申し訳ないがまたいずれ……」

護は周泰を降ろし、走ってくる黒獅の鞍に？まり、そのままの速度で去って行った。

孫策は熱に浮かされた様な表情でその去っていく後姿を見続けた。

**彼、小霸王と武器を交える（後書き）**

フラグ？立てたよ？勿論。

と言うわけで、雪蓮さんにフラグを建築してみた。

後の展開は考えてない、成行き+思い付きでやっていますw

感想ご指摘なんでも待っています！

**彼、撤退戦を開始する（前書き）**

お久しぶりです。

何とか書くことが出来ましたので投稿します。

時間が空いてしまったので何かおかしい所があるかもしれませんが、それでも楽しんでいただければ幸いです！

## 彼、撤退戦を開始する

暗い夜道を駆け、空が次第に白んで来た。  
護は黒獅の背に乗りながら、あることを考えていた。

「この時代に、何故十文字の旗が……？」

連合近くに踏み込んだ事を知った護は、ある程度旗印を確認したのだが、その中で曹操陣内に見かけた十文字に違和感を感じていた。十文字と言えば日本ではそれなりに有名な旗印である。だがこの世界、つまり三国志の時代では旗印に自分の名を使う筈なのだ。

「十文字の旗印。あれが噂の天の御使いの物ならば、中々に興味深い……」

護の中で幾つかの予想が立てられた。

一つは自分と同じく、死後にこの世界に辿り着き、知識を使って有利に事を進めている場合。

二つ目は、死せずにこの世界に辿り着いてしまった場合だ。

三つ目はこの時代の人間が、何となく使っていると言う物だが此れは除外していいだろう。

一つ目ならば、珍しさが引き立つようにだが、二つ目ならば、特に何も考えていないのかも知れない。

「どちらにしても俺の存在は誤算だろうな……ッと、そろそろ帰り着くか……それにしても眠いな」

考えを中断して、眼下の関を見つめる。

眼前ではなく眼下なのは、絶壁を登って現在逆落とし並みに駆け降りているからだ。

「しょ、將軍！？良かった……本当に良かった……」

駆け降りた所で、見張りの兵が近付いてきてそんな事を言ってきた。

「何かあったのか？」

その様子が只事ではなかったので、重大な事が有ったのかと考えた。

「ええ、危うく華雄將軍によつて、内部から崩壊するかと思いましたが……將軍の隊の……何でしたっけ？連者？彼らが華雄將軍と互角に戦い、何とか怒りを静めてくれたから良かったのですが、二人怪我をしまして今日將軍が戻らなければ、突撃を敢行していたでしょう」

「五人居れば華雄さんと互角に戦えるのか……そんなに強かったん

だな、あいつら」

一般の兵が幾ら束になって掛かったとしても、将は其れを容易く破るのだが、彼らは太史慈と言う化け物相手に日々訓練を積んでいるのだ。

時間稼ぎならば、チームワークを駆使して保つ事が可能になっていた。

「悪かったな、今度から勝手に出て行かないから。其れより寝かせてもらおうよ？一睡もしてないんだ」

「はッ！此方はお任せください！」

相手の動き次第だが、今から寝れば三時間ほどは寝れるだろうか、など考えながら護は就寝した。

「……さい！……てください！」

「むう、うーむ……」

肩を揺さぶられて何事かと眼をかける。

「起きて下さい!!」

「うわぁ!?!」

目を開けて一番初めに眼に入ったのは血相を変えた連者の赤だった。外を見ても日はそれほど高く位置していないので、寝てからまだ二時間かそこ等と解る。

「……………何事だ?」

「今から一時間前に連合軍侵攻を開始!それに伴い華雄將軍が臨戦体制を取っていたのですが、少し前に向こう方からの挑発を受け門を開放!出陣されました!」

「最悪だ……………華雄さんは優秀な将なのだが、感情的になり過ぎるから、注意が必要だったのに……………」

護は、椅子に掛けてあった羽織を纏い、鉢巻を巻き立ち上がった。

「我が隊を集める！此れより出陣する！」

「はッ！」

赤は走ってその場を後にした。

「さあてと……撤退戦の始まりだ」

「將軍！我ら太史慈隊全員集合しました！」

「よし、長く話すことなどできる状況ではない！手短かに説明をする」

董卓軍の中でも問題児扱いされていた彼らが護の号令一つで整然と並ぶ。





地すらも揺るがしていると思ってしまうほどの咆哮が上がる。

「出陣―!」

「し、?水関に動きあり!新たな部隊出現!赤い旗に金字の八卦図、中央に太!太史慈です!」

華雄隊の突撃を受け、袁紹まで巻き込んだ作戦を成功させた義勇軍に伝令が駆け込んできた。

「なに!?!くツ、袁紹に華雄の部隊を擦り付けたと思ったのだが……」

「今まで出てこなかったのは、華雄の突然の出撃に対しての関の混乱を抑えていたといった所か、まったくそのまま引いてくれれば良かったのだが、護殿は味方を放って引くことはできんか」

「敵部隊、接敵！と、止まりません！？敵将太史慈を先頭にまっすぐ此方に！？」

その報告からすぐに前方に砂塵を確認した。

騎馬隊が真直ぐに突撃している所だった。

向こうもこちらに気がついたのだらう、後方の部下に指示を出し何と騎馬から降り立ったのである。

その後、太史慈を乗せていた騎馬と共にその部隊は本陣に強襲に行った。

「防がなくてよろしかったのですか？」

「なに、護殿を行かせる方が被害が大きそうなので此処で止めるのが正解でしょう……愛紗」

「解っている、正々堂々としたかったが仕方が無い」

星の隣にいる人物が解らなかったが手に持つ武器で人物の特定が出来た。

三国志でもっとも有名であろう武将関羽、そして其れと並ぶ將軍として知られる武将趙雲こと星。

「なるほど、相手にとって不足なし！我が名は太史慈！いざ……」

「勝負ッ！！」

彼女達は武人の頂を知る事になる……

彼、撤退戦を開始する（後書き）

如何だったでしょうか？

矢張り突撃してしまっぬまさんWW

感想ご指摘何でも待ってます！

彼、撤退戦に思考を廻らす（前書き）

更新しました。

うゝむ、護君を強くしすぎたかな？

まあ大丈夫だと思う、恋ちゃんはもっと凄い事してたからね。再プ  
レイで確認してきたよ

## 彼、撤退戦に思考を廻らす

「くっ！ハアアアッ！」

攻めきれない、愛紗が最初に感じたのはそれだった。

自惚れる積りは無いが、自分の将としての実力は並以上だと認識している。

自分だけではない、隣で同じく攻め続ける星も並以上の力を持った武将、それが二人纏めて相手取られて攻めきれない事に大きな衝撃を受けていた。

「フツ流石すな、護殿。まさか此処まで力に差が有ったとは……」

星も口では飄々としているが、額には汗が滲み、焦りを感じ始めていた。

「そうですね？自分はかなりギリギリの境界線を歩いてる心持ちなのですが」

その言も事実なのだろう、此方は無傷、あちらは所々裂傷が見て取れる。

だがそれだけなのも事実、二人が揃って僅かなりとも息を切らしているのにも拘らず、大きく息を吐き出すまでに治まった彼の体力の底が見えない。

「無手と言うのは、攻撃よりも防御に優れていると自分は考えています」

護は、向かい合いながら突然話し始めた。

「武器を持つ事によって攻撃する力は増しますが、その武器の内側に入ったものを捌くのは、達人にもならなければ、いえ、達人であっても容易ではない。だが無手は違う」

護は手を前に翳し、自身の身体を覆うように円を描きその手を動かしていく。

「この手が届く範囲が全て間合い。相手に手が届かずとも向ってきた武器は全て間合いの内側です。時間稼ぎであれば、例え後何人居ても耐える自信があります」

不遜とも言える言葉だが、彼の力を見てしまっただけでは、その言葉が真実のように感じてしまう。

「ですが、そろそろ合流しなければならぬので、此れで終わりに致しましょう！」



護は拳を地面に叩きつけ隆起させた。  
どれほどのバカ力で叩けば地面が隆起すると言っのだろうか。

「いかん！？愛紗避ける！」

「なに？……なっ！？」

星の言葉で間一髪避ける事に成功した愛紗は何が起こったのかを瞬時に理解した。

隆起させた岩を更に手のひら大にして、投げつけたのだ。

「部下が華雄さんの下に辿り着くだけの時間は稼がせてもらった。これで引かせてもらう」

「何！？逃げるのか！」

三人の距離は、先程の岩で意識を外した隙に大分開いてしまった。た。

「武人としての勝利より、軍人としての生を取る、部下に教えた事を自ら破るわけにもいかないのですね？」

騎馬が駆けて行った方角に向って走ろうとする護に、周りの兵達が逃がすまいと輪を作り迫ってきた。しかし護は、それを一瞥して拳を大きく振り上げた。

「陽岩割りッ！」

振り上げた拳をそのまま地面に叩きつけ、地面を大きく隆起させるだけでなく、衝撃波も伴って周りにいたものを吹き飛ばした。

「それでは、またいずれ戦場で……」

その言葉だけを残して護は走り去っていった。普段はアレだけ方向を見失うのだが、事戦場に関してはそれは当てはまらないようだ。

「星……」

「何だ？」

「強いな……そして遠い……」

「当たり前だ、何せ私を負かした相手なのだからな」

二人は肩を並べて、楽しそうに笑みを浮かべていた。

「……てて、数分は腕が使えないな……痺れる。まったく最後の一撃よりも彼女達の攻撃の方が痛む、無茶をし過ぎた」

護としても時間を稼ぐだけであれば何人でも相手にできるが、二人以上を同時に相手にしようとするとう倒しきれなくなってしまう。あのタイミングで抜けださなければ、深手を負っていた可能性すらある。

「一対一ならば倒す事も出来たのだがな……それよりもアイツ等、間にあつたかな？華雄さんを何とか助けてくれてれば良いんだが、この数では流石に華雄さんも捌き切れないだろ」

懸念事項としてあつた華雄の安否。

赤を先頭に、最も戦闘が激しい場所に駆けさせ、確認後できたのならそのまま虎牢関まで行く、華雄さんがそれすら困難な状態の場合そのまま洛陽へは戻らず、姿を晦ませる手筈になっていたのだが華雄さんがそれに従ってくれるかというのも問題だ。

「結局は俺もそっちの方に行かなければ成らないという事か……早くしなければ困いが完成してしまうな」

護が二人から逃げ出した時、華雄は張飛と戦いを演じていた。

「くッ！」

しかし明らかに劣勢、遂には受けていた戦斧までも砕かれてしまった。

「これで……最後だぁー……っ！」

「ぐっ……」

華雄はそこで死を覚悟した。

独断のみで軍を動かし、敵に一矢報いる事すらできずに朽ち果てる

事を心の其処から悔しく思いながら、その一撃を真直ぐに見つめていた。

だがその一撃に挟み込むように武器が煌めいた。

「イツテえ！？何だこのお子様は！？物凄く手が痛え！どんな力してやがる！？此れだから将とか嫌いなんだ！」

「うぐう〜おお〜！！手、手があ！痺れてうごかねえ……」

「カ、カカカ華雄將軍？ご無事デデデ？」

その攻撃を受け止めたのは護の隊の隊士。  
それぞれ、赤、青、黄だったか、昨晚相手にした中々できる隊士だったことを覚えている。

「き、貴様ら！何故来た！」

「それは勿論太史慈將軍の命令ですよ、華雄將軍の救出つてね。それよりも華雄將軍その怪我では虎牢関まで無理そうですね」

青が容態を確認する。

其処までの深手ではないが、浅くも無い、無理をすれば化膿<sup>かのう</sup>や壊死<sup>えし</sup>の恐れが出てくる。

「バ、バカにするな！此れ位私とってたいした事はっ！？ぐっ！」

「無理しないでください。良いですか、華雄將軍？このまま行方を眩ませてください。そして早いうちに手当てを……虎牢関まで行つていては最悪腕を切り落とす事になるかもしれません」

腕を切り落とす。

それは武人にとって死より思い宣告だ。

最初は渋っていたが、この先も戦えなくなってしまうと考えたら素直に従うしかなかった。

「話は終わったのかあ？鈴々待ち草臥れちゃったのだ」

話が一段楽した所でさっきの立ち居地から変わらない場所で手を後ろに回して暇そうにしている子供の姿があった。

「くっ！しかしお前達ではアイツに勝てないぞ！ここは私が残つて……」

「心配には及びません。我らの仕事は我らが敬愛する將軍の到着までの時間稼ぎ」

赤が歩きながら、張飛の前に出た。

「それくらいならば我らで」

赤の隣に立つように青が並ぶ。

「ですので將軍はお早く！」

青とは反対の側で立つ黄。

「行くぞお前達！欠番がいるが気合を入れる！正義に燃える赤連者  
！」

「此処が勝負時か……愛の戦士青連者！」

「気合を入れるための決め姿！我慢強いぞ黄連者！」

「」「我ら三人！欠番いるが太史連者！」」「」

思い思いの立ち姿でカッコよく決めた積りらしいが、一発ギャグに

失敗した芸人の後のように寒い沈黙が流れた。

( ( ( ( (えええ〜) ( ( ( ( (

此れが周りの反応で正しい反応だが。

「カ、カツコいいのだ〜……」

( ( ( ( (えええ〜!!) ( ( ( ( (

気合を入れるだけの積りだったのだが、奇しくも時間稼ぎという目標は達成できそうだった。



**彼、撤退戦に思考を廻らす（後書き）**

あれ？連者が最近活躍しすぎな気がする……どうしてこうなった

それと護君の技解る人いるかな？

いるだろうな、結構有名なゲームだし。

好きというだけで其処まで詳しくないww

派手な技なら結構出せる場面があるんだけど、個人戦向きな技が一個も無いww

彼、撤退完了（前書き）

更新です。

少し悩みました。

話し方が定まらないです……

## 彼、撤退完了

「ちよっ！？待って待って！そんなの当たったら死ぬ！」

「そんなの関係ないのだ！兄ちゃん達は鈴々達の敵なんだから平気なのだ！」

他の隊員に華雄將軍を、安全な場所まで連れて突破させた所を確認した所で、正気に戻った張飛が襲い掛かってきたのだ。風を切る音が耳元を過ぎて行く。

こんな物を一人で相手にしていたら五合と保たない自信が赤にはあった。

だが既に七合を数え、何とか保てている。

「いい加減に当たるのだあ！うりゃあー！」

張飛の蛇矛が横薙ぎから青の顔に伸びる。

青は動いた直後のため身体が反応できない。

「おんどりゃアー！」

だがそこで黄が青の足を払い、強制的に回避をさせる。

「むく、戦い辛いのだ。さっきから逃げてばっかですまんないのだ！」

彼らはまともに戦わない。

防戦一方といえはまだ聞こえは良いが、実際は恥も外聞も無く避けるに徹しているだけそのくせ相手が移動をすると目の前に現れるのだ。周りから見れば、武人の風上にも置けないなど陰口を叩かれそうだが彼らは気にしない、いや、それどころかそれを励みにするのだ。彼らは武人としてよりも軍人として将軍に仕えると決めたのだ。

「此処でお嬢ちゃんを止めなきゃ！あの人の役に立てねえだろうが！！！」

どれも必殺の威力を秘めた武将の一撃を気合だけで弾き返す。

「にゃにゃ！？」

「はあ……はあ……」

だが基礎となる物が違いすぎる。

少し優秀だからと言っても、自分達は兵士、将軍と言われる者の一撃に精神的重圧と肉体的圧力をそう長く耐えられるものではない。

「びつくりしたく、でもこれで終わりなのだ！」

（ああ……將軍とまだ一緒に駆けて居たかったなあ……華雄將軍を逃がせたし……役には立てたかな？）

目の前に迫る張飛の蛇矛を見ながら赤は笑っていた。

自分達を変えてくれたあの人の役に立てた事が何よりも嬉しかったのだ。

「まったく、最後の命令を忘れたのか？俺は死ぬなといった筈だが？」

「え……？将、軍？」

「だがまあ華雄さんの件はご苦労。この子を相手によく保った俺達の役目は終わりだ、これから虎牢関まで引き上げるぞ」

赤の顔に迫っていた蛇矛は顔十センチにも満たない位置で護に？まれピタリと止まっていた。

あと一息詰められていたら、頭から真つ二つになっていただろう。

「お兄ちゃん強そうなのだ、鈴々と戦え！」

「悪いけどそんな余裕は無いんだ。それに、掴んでしまったから君の負けは決定してるような物だよ？」

張飛が相手にされなかった事に苛立ち、力を込めようとするが踏ん張りが利かない、護に持ち上げられ足が浮いているのだ。

「にやにやにや!?!」

「そら、お姉さんの下まで飛んでいけ!」

「にやああああー!.....!!」

先程自分が走ってきた方角に向けて思い切り投げ飛ばした。

「うん、矢張りアレ位の身長だと投げやすいな」

「はは……何と呆気無い……俺達の苦勞が霞んでしまっじゃないですか」

「それだけの口が聞ければ十分だな？華雄さんを送った者たちも集

まっている、このまま突破するぞ！」

何時の間にか周りには隊員が全員集まっていた。それぞれが傷を負っているが、やり遂げたような顔をして気合に満ち溢れている。

「目の前に立ちふさがる趣味の悪い金の鎧を蹴散らし虎牢関まで突き進むぞ！」

「「「「「おおおおオー！！」「」「」

大将首を無視して、関へ雪崩れ込もうとしている袁紹の軍を見据え、陣形を再構築し突撃を決行した。

(さてさて……人数差は歴然だな。ここを抜ける為には……)

袁紹軍に向かいながら、護は必死に考えを巡らせる。

人数差を考えるならば、ここで大半の兵を失う覚悟が必要だろう、しかし、護はそんなことは一切認めない。

「俺は先に行く！後ろを突かれぬよう、慎重に、しかし早急に追って来い！」

「ハッ！」

そのまま急ぎ駆けながら、黒獅の背中から立ち上がり飛び上がった。

「……………は？」

着地した場所は袁紹軍のど真ん中。突然の訪れに、周りの人間は全く反応することすらできなかった。

護は呆ける兵を掴むと、そのままスイングし、中心に大きな空白を作りだした。

そして……………

「グオオオオオオオオオオツーーー！」

吠えた。

雑兵にはよくある事だが、冷静沈着な敵により数が減るよりも、理性を感じさせない者の方が、解りやすく恐怖を誘う為、護の声によってその場にいた者は足が竦む。

護は敵の恐怖心を誘い、敵の足が鈍った所をさらに近くに転がる岩を掴み、前方に投げさらに混乱を誘い、それに呼応するかのように、護を追っていた隊の人間達が背後から襲いかかる。

ここまでくれば精鋭にもなっていない袁紹軍は功績よりも命欲しさに簡単に瓦解していく。これを立て直すには諸侯が加わったとしてもしばらくかかるだろう。何せ数が多いのだ。



その隙に護の隊の人間達はその場から撤退していく。

「まさかあそこまで深く食い込んだにも拘らず、部隊の人間を失わず撤退を成功させるとはね……」

？水関を一番初めに抑えた孫策は虎牢関に向けて走り去る砂塵を見つめて感慨深く口にした。

「兵の士気は高く、太史慈に完全に心酔している。あの手の手合いは手強いわよ？」

「解ってるわよ、でもうちに欲しいのよね。冥琳なら何とか捕まえられないかしら？」

「無茶を言つな、アレはそう簡単に御せる者じゃない」

「そうなのよねえ〜はあ、でも欲しいなあ……まいつか、多分何時

か来ると思っし」

周瑜が肩を竦めて孫策の様子を見ていた。

「また勘？」

「そ、何時になるか解らないけど、きつとね？」

「見事ね、個人の武だけかと思つてたけど用兵もかなりの物の様だし、神速の張遼、飛將軍呂布共々欲しいわね」

素直な感心と興味から、曹操は太史慈を欲し始めた。

「な！？まさか華琳さま、あんな男を捕らえるお積りですか！？ただでさえ北郷が居るのにこれ以上増えるのは嫌です！女が増えるのも嫌です！」

曹操の独り言のような台詞を目聡く聞き取った夏侯惇が声を上げる。

「あら、春蘭は私のお願いを聞いてくれないのかしら？」

「うっ……しかし、何も捕らえなくても……」

「それは戦場の推移によって決まるわ。華琳様のお考えが解らないなんて相変わらずの脳筋なんだから」

「なに！お前だって男が増えるのには反対の筈だろう！？」

「誰が何時そんな事を言ったのよ、彼は有用よ？捕らえておいて損はないわ」

「何故お前は奴の事になると考えが変わるのだ！」

「な、なんで私が　　！」

口論を始めた二人を曹操と夏侯淵が見ていた。

「ああ、姉者はかわいいなあ……………」

「何やってるんだ？」

其処へ、一刀が被害の報告にやってきた。

「ちょっとね、面白そうだから見物してるのよ。」

「それはまた……………」

二人の言い争いは1時間は続いた。

「うう、気持ち悪いのだ……………」

「大丈夫か、鈴々？水を飲むか？苦しくないか？痛いところはないか？」

「愛紗は本当に姉バカだな、外傷は特に無いのだから、恐らくは飛んでいたときの体験が苦しませているのだろう。時間が経てば治まる」

今までに誰も体験した事の無いようなものを味わった事で意識が朦朧としている張飛を陣内で看病している。

護の元居た世界であれば空を飛ぶと言う事が人間でも当たり前になっているならば別だが、この世界ではまったく想像すらした事が無い出来事である為、精神的ショックは大きい。

「星！何を言っているのだ！この苦しみは味わった事の無い我らには知りようも無い恐ろしいものかもしれないのだぞ！」

「……私は護殿と一手興じた事が有ったのだがな？……人と云う者は案外簡単に飛ぶ事ができるようだぞ……？」

「……なに？」

超雲は何処か遠くを見つめている。

そしてゆっくり鈴々に近付いて手を握った。

「大丈夫だぞ鈴々！慣れてしまっただ！その感覚に慣れるのだ！」

その光景を横目に見ながら、軍師の二人とその主である劉備が先の戦いについて話し合っていた。

「やられちゃいました、幸い私達の軍は其処まで大きな被害を受けてないけど、袁紹さんの近くに居た他の諸侯の被害があるのは確かです」

「そうだね、被害が低いのは曹操さんと孫策さんの軍と私達。それにしてもアレだけ強いのに私達が近くに居て避けていったよね？何でだろ？」

太史慈は目の前に展開する劉備を無視し、態と袁紹のもとに突撃して行ったのだ。

「それは解りませんが、このままですと、被害が低い事を良いことにまた我らが関を攻めさせられるかも知れません」

「ふえええ〜！そんなの困るよ！兵隊さん達は戦い続けで疲れてるのに……」

その考えは翌日、現実のものとなり、人員が不足する劉備はかなり悩まされる事になる。

彼、撤退完了（後書き）

如何でしたでしょうか？

なんかサラッとキャラ崩壊の兆しが……大丈夫かな？

感想、ご指摘何でも待ってます！

彼、虎牢関を発つ（前書き）

更新しました。

なんだなあ〜臭い台詞ばっかり書いてたら、なんか笑いが込み上げてきますwwでも何とか書いてー安心。

ああしかし、のどが痛いなあ〜風邪かな？



## 彼、虎牢関を発つ

「すまない、関を落とされてしまった」

虎牢関まで撤退した護は霞と音々に報告を済ませる。

恋は何時も通り何を考えているか解らないが、関の遠く彼方を見つめている。

「しゃあないわ、どうせ華雄の奴が突っ込んだんやろ？護たちが無事やっただけで十分や」

「うう、でも予想以上に早く抜けられてしまったのです。連合は大きな関を得た事で補給も速やかに出来るようになって、弱点らしい物が見当たらないのですぞ」

そもそも、今回の戦いは連合軍の遠征の為の補給不足が唯一の勝利条件だ。

そのための時間稼ぎであつたし、少なくなる食料を目にした兵の士気は下がり、機能しなくなり撤退というのが理想であつた。

しかし、後数日は持つ計算だったが、華雄の暴走によって相手の糧食はまだ有余り、補給を余裕で待つことが出来る。

「月ちゃんの事を考えると文字通り、此処が最後の砦だな……」

「そやな、あの子優しいし、洛陽まで戦場になったら悲しむなあ」

虎牢関を抜けられれば、次に待つのは市民が暮らす洛陽が戦場に変わる。

その覚悟くらいは出来ているだろうが、彼女の性格を考えると如何しても考えてしまふ。

「どちらにしても、既に勝敗は決したと考えて良いだろう。現状を覆す術はもう無い……」

その言葉に音々が顔を伏せる。

軍師とは、不利な状況を覆す献策を出す存在だが、状況が悪すぎる。将の数が圧倒的に負けており、貴重な将が敗退、総数も既に連合が圧倒する現状。

これでは如何な軍師であろうと不可能と言えるだろう。

「問題は月ちゃんをどうやって助けるかだが……」

「逃がすしかないやろな。此処で時間を稼いで、何とか賈馱っちに誰にも見付からんように遠くまで行ってもらわな」

反董卓連合と言う名前で解りきっている事だが、この戦いで負けると言う事は討伐目的である月を殺されると言う事だ。

勝つ事が出来なくなってしまうたのならば、最低でも彼女の身の安全を確保しなければならない。

「それは難しいのです。何処に逃げようと逃げたと言う事実がある限り、逃亡生活は続く事になりますぞ？」

「そうだろうな、再起を凶られてしまえば意味がない。確実に息の根を止めに来るだろう」

「ならどうやって

」

「……来る」

今まで沈黙を保っていた恋が遠くを見つめたまま何かを告げてきた。

「来るて……連合軍がか？まさか。関を抜かれてからまだそれほど経ってへんのか？」

恋の言葉に反応して霞が身を乗り出しながら遠くを確認する。

「来よつたで、どうやら本当見たいやな……さてさて。張文遠、最後の大舞台や……派手に死に花、咲かせたるでえ」

遠くに見える砂塵、それは色とりどりの鎧の中に内包していた。霞はその砂塵を見ながら、これから始まるであろう最後の戦いに、己の全てを掛ける様に意志を固め、出陣の準備をさせ始める。そして護は、何かを考えるように深く眼を閉じ、十数秒してから目を開けた。

「もう考える時間は無いな。これから始まる戦いで無事に生き残り、洛陽まで辿り着けた者が月ちゃんと言ちゃんを安全な場所に届ける事、方法は個々人に任せる。いいな？」

「なんや、最後に最高の死に花、咲かせようと思ったのに死ぬな言っんか？」

それはつまり、確実に誰かが辿り着かなければならないという事、護は暗に、死なずに洛陽に辿り着けと言っているのだ。霞は護の言葉に何処か嬉しそうな顔をして聞き返した。

「如何かな？戦はそう甘い物じゃない事、それは此処に居る者は皆承知しているだろう。俺もそう都合よく生き残れるとは思っていないが……」

「……ダメ、死ぬの、良くない」

恋が護の服の袖を握りながら、上目遣いで見詰めてくる。

「戦って、生きる。それが良い」

「だ、そうなのでな。俺は生き残るぞ？勿論俺の部隊は全員だ」

護は恋の頭を撫でながら、決意の表明をした。

恋も元よりそのつもりなんだろうし、音々は恋に付いて行くので聞くだけ無駄だ。

「じゃあないな。うちだけさっさと死んだらおもしろいやろうし…」

…その話、乗ったるわ」

「決まりだな。……では最後に誓いを立てよう」

「何を誓うのです？」

「俺達は此処を生き延び、何時かまた八人で語り合おう」

その場に居る四名で円を作るように立ち、護が手を突き出す。

「そらええな。うち等四人と、華雄、月に賈馱っち……」

「それと、あの忌まわしいチビじやりを入れた八人で、また集まり語り合つのですぞ！」

「……また、皆でお話し、する」

それぞれが護に習う様に手を出し、手に手を重ねていく。

「絶対生き残るぞ！」

「おっ！」

同じ思いを胸に、けして死なぬと誓いを立てた。

「将軍方！出陣の準備が完了しました！」

「解つた、全体整列で待機！……では軍師殿、この戦いの布陣は如何に？」

音々は外を見て、連合の布陣を確認すると、一瞬の思考の後に答えをはじき出した。

「正面を恋殿が右翼を護殿、左翼を霞殿に行つて頂くのです！敵はまだ此方が籠城の構えだと思つてゐる筈。そこで恋殿は体勢を整えさせる前に一気に大将の所まで突撃。護殿は如何にかして右翼を押し込むのです！乱戦に持ち込めば、お二人なら混乱した戦場から逃げる事もわけないですよ！霞殿はそれまで耐えるのです。相手が曹操と言ふ今かなりの危険人物ですが、中央が混乱すれば動きが鈍る筈、其処で逃げるのです！」

「戦力差は七万か……やつて見せよう。……よし、出陣前に何かあるか？」

「なに言つてんねん。こつと言つ物は、大将が言つもんやで？」

「大将？此処での大将は、れ……霞だろう？」

「そないな事関係無いわ。うち等は護から聞きたいんや」

護の言葉を兵は元より、霞や恋、音々までもが待つていた。彼らの反応に驚きながらも、護は期待に応えようと前に一歩踏み出した。

「皆、これは勝つ事の無い戦いだ……我らは負ける、これは既に逃げよつの無い現実である」

負けることが決まっていると言つ言葉に重苦しい空気が流れる。

「だが、死ぬな！友を置いて逝くな、家族を置いて逝くな、愛する者を置いて逝くな！我らは一人ではない！各々の隣に立つ戦友を助けろ！もう一度言う、死ぬな！これは命令だ！」

護の台詞に兵たちの瞳に再び闘志が宿る。  
護は大きく手を上げ門を指差した。

「我らの未来を切り開く為に！出陣！！」



彼、虎牢関を発つ（後書き）

如何だったでしょうか？

作戦とかいまいち思い付かなかったんで適当にしてみましたんですが、こんな作戦で大丈夫か？

感想、ご指摘なんでも待ってます！

彼、一人洛陽へ（前書き）

更新しました！

少し恋ちゃんに喋らせすぎたかなって書いてて気が付いたが、他に  
思い付かず、このような形に……  
気にせず読んでください！

## 彼、一人洛陽へ

「どうなっている？動きが妙だ……」

虎牢関を出て野戦に討って出た護たちだが、連合の動き……いや、劉備軍といった方が良いのか、それが何やら奇妙な動きを見せていた。

恋の相手をしている劉備軍は態と此方の動きに合わせてるように見える。

更に呉は城門に張り付き、破る事に躍起になっている。

「恋ちゃんを無視して城門に走ったか、恋ちゃんは大丈夫そうだが、あっちは逃げられそうに無いか……」

曹操の軍はゆっくりとであるが、霞の軍を包囲していた。気が付いた頃には包囲を完了している事だろう。

「霞さんは史実通りなら、無事に曹操に仕えるだろうから平気か」

自分というイレギュラーが居たとしても、それぞれが所属する軍は変わらないのと、曹操が人材を無駄にするわけが無いという事から、死にはしない事を半ば確信していた。

「此方もそろそろ決めるか……」

黒獅の横に立ち、鏢迫り合いのように硬直する戦場を見詰めて、黒獅に取り付けられていた自身の武器を外す。

「道を空ける！！死にたくなければ伏せておけ！」

護の声に反応するように、太史慈隊は左右に割れた。その割れた味方が居ない場所に護が大剣を振りかぶり投げつけた。すかさず黒獅に飛び乗り、走り出した。

「続け！このまま中央まで雪崩れ込むぞ！！」

戦力比が違いすぎる為、立ち止まったままでは何時か崩されてしまう。動き回り、敵将を優先して討ちに行き、指揮系統が混乱した所で引き上げる事にした。

「我らの突撃！止められるものなら止めてみよ！」

「遅い……」

中央の戦端は将同士の戦いで激しさを増していた。

恋を相手にしている将は関羽、趙雲、張飛、孫策の四名。

しかし、その四名を相手にしていてもまだ彼女には余裕がみられる。

「ホント、とんでもなく強いわね」

「だから言ったではないか！」

「愛紗よ、今はそんな事を言ってる場合ではないぞ」

四名は果敢に攻め立てるも、悉く捌かれ反撃まで見舞われる始末である。

「ふむ、流石は呂布だな。我らを相手にして逆に有利に立つとは、最強の名は伊達では無い様だ」

趙雲が素直な感想を口にすると、恋は首をかしげてその発言を否定した。

「違う……恋より強い人、居る……」

その言葉に驚くと同時に、矢張り彼女達は武人らしく興味が沸いてきた。

「護、恋より強い……」

「ま、待て！それは太史慈の事だろう！？我らは一度戦ったが、お前のような理不尽な強さは持っていなかったぞ！」

彼女達は全員、彼と対峙した事がある。

そのときは圧倒されたが、今この場で戦う彼女より強いとはどうしても思えなかった。

なにせ、関羽と趙雲二人で抑える事も、掠り傷程度だが付けることも出来たのだ。

「護、本気だけど、全力じゃ無い……」

その言葉に驚く余り沈黙。

そして、納得している趙雲が居た。

「護は優しい、強すぎる力を抑えて……誰かに向ける事、怖がってる……」

野性の勘の様な物なのか、恋は護が最も気をつけていることを言い当てた。

「成る程な、優しいあの方らしい事だ。だがこれで、どうして武器が無事なのか解った」

「如何言う事なのだ？鈴々解んないのだ」

「考えてもみる、護の攻撃を我らは受けたのだぞ？あの地をも砕く剛撃を……」

例え鍛えられた武器防具の類だろうと、あそこまで強い衝撃に耐えられる物ではない。  
折れなかったにしても、曲がれもしないというのも可笑しな話である。

「だから恋は……」

話は終わりだとばかりに武器を向ける。

「皆、守る……」

最強と呼び声高い飛將軍が攻めに転じた。

「將軍！上手い具合に釣れてます！このまま引つ掻き回せば、戦場の混乱は必至です！」

護の斜め後ろを走る赤は、後ろを見ながら報告をした。

「そうか、ならばこのまま」

「で、伝令えー！」

このまま戦場が混乱すれば、逃げる隙を作れると踏んだ護は、その



まま突撃を続けようとしたが戦場はそれを許さなかった。息を切らした斥候が、すぐ横まで駆け込んできた。その表情からよほど危機的状況になったことを悟る護。

「報告します！先程虎牢関の関が……………破られました！！」

城門が破られた。

その報を聞き、隊が一瞬も乱れないのは流石であるが、逆にこの報が敵にも伝わっているようで敵が、先程よりも勢いを増し始めた。

「チツ！かなり早いな。流石は将来、三国を担う国の兵と言ったところだろうか……………」

小さく呟き、この後の動きを考える。

関を抑えられたと言う事は、事実上洛陽への道が塞がれた事になる。流石に敵中に飛び込むほどの余裕も無い。

「しょうがないな。太史慈隊はこの戦場を放棄し、このまま撤退する！」

恋もそのように動くようで、戦場から去っていく深紅の旗を見る。

しかし、何処を探しても霞の旗は見当たらない。

途中曹操の軍が乱れたので、もしかしたらと思ったが、矢張りあの包囲を突破する事は出来なかったようだ。

「霞さん……今度は味方ではなく、敵として戦場で会いそうですね」

曹操軍の方を見ながら呟いた。

「良いか！このまま戦場を離脱し、この先の村で待っている！」

「え？將軍は如何されるのですか！？」

「俺はあの関を突破し、洛陽まで行く！」

戦場を未だ駆けながら、護は無謀とも言える行動を叫んだ。  
確かに彼と黒獅だけならば、制限も無く存分に駆けられるだろうが、  
その行動は常軌を逸している。

「そ、そんな！幾ら將軍でも無茶がすぎます！」

それを言ったのは赤であるが、周りもその決定に異を唱えている。

「おいおい、俺を誰だと思っている」

自信に溢れた護の顔を見て、彼らは言っても聞かない事を理解し、同時にこの人ならば出来てしまおうと言う気さへした。

「俺は性は太史、名は慈、字は子義、字は子義！お前らの隊長であり、最強と並ぶ将だ。こんな場面でやられたりはしないさ。それに、政も待つてるからな」

「解りました……では必ず政殿と共に我らの元に戻ってきてください！我らが将と仰ぐは貴方唯一人！戻って来て下さらない場合、我らは死を選ぶ所存です！」

それぞれの顔には決意と覚悟、更に信頼が込められていた。自分を此処まで心酔してくれている彼らを殺すわけには行かないと、護も何としても死ぬ事を避けると決めた。

「やれやれ、強情だな……俺も、俺の隊も……」

「そりゃ將軍の隊ですから！」

「そうか、では行って来るぞ。お互いにけして死なずにまた会おう！」

隊の全ての人間はその場で大きな声で答え、一つであつた隊は二手に分かれた。

一つは洛陽に向つ護と黒獅、そして二つ目は戦場を離れる太史慈隊。

「我が前に立ちふさがる者は悉く踏み砕く！それが嫌なら道を空けよ！」

その人から外れた行動に、人々の中で更に強く人外と言う名が広まる事になった。

彼、一人洛陽へ（後書き）

如何でしたでしょうか？

細かい戦闘は省いて大味なものになってますが、何時もの事と流し  
てくださいww

感想ご指摘なんでも待ってます！

彼、約束繋ぎ……（前書き）

反董卓連合編完！！

どうも久しぶりです。

連合編終了です。

彼、約束繋ぎ……

「はあはあ……静かだ……」

一人洛陽に帰ってきた護は、必要以上に静かな洛陽に目を丸くしていた。

幾らこの後に籠城を控えているからと言っても兵の一人すら見えないのは可笑的ではないだろうか。

「おお！兄貴！戻ってこれたのか！？」

暫らく進み、城に辿り着くと中から政が駆け寄ってきた。その背後からは、月と詠が出てきた。

「ああ、何とかな。……それよりもこの静けさはどうなっているんですか？兵すら見えないんですが……」

「逃がしたわ。この戦況じゃ、如何頑張っても勝てる見込みはないし、援軍が来ない籠城策なんて愚策にしかないしね……私達もこれから逃げるわ。帰ってきてくれたアンタには悪いけど、アンタとの縁も此処まで」

「逃げ切れる見込みは……？」

護は、詠の話遮る様に口にした。

その言葉を受けて苦い顔を作った詠は、暫らくして睨みつけてきた。

「あるわけ無いでしょ！？でも無くたって逃げ切って見せる！月の為にも！」

「詠ちゃん……」

切羽詰った表情で言い切った詠とそれを悲しそうに見詰めている月。護はそれを見て、この二人の信頼と友情の深さを今改めて理解し、恋や霞と誓った約束の為に彼女達を確実に逃がす策を考えた。

「策は考えました。逃がします確実に……」

「だからどうやって……」

意を決して、護は二人の顔を順に見て口にした。

「服を脱いでください」

「……は？」



「何かすんなり入れちゃったね……何かあると思ってたんだけど」

「はい、しかし、労せず洛陽一番乗りを果たしました。今後を考えるとかなり良い結果になりました」

洛陽に到着した劉備軍はある場所で陣を張り、拠点を築いた。洛陽では戦闘は無く、先鋒を任された自分達は労せず高名を得た事になる。

「最初はどうなるかと思ったけど良かったね」

劉備は少し前に行われた軍議を思い出していた。

「報告します。現在も洛陽に動きはありません。斥候の情報では兵士の一人すら見ていないとの事です」

洛陽の目前に迫った連合軍は、本陣の天幕にて軍議を行っていた。

「不気味だな。何かの策なんじゃないのか？」

「何を仰っているんですの？そんなの、こ・の・私の華麗な進軍に恐れを為したに決まってるじゃありませんか。おーほっほっほっほー！」

最初に口を開いた公孫贄の策という意見を袁紹は真っ向から否定し、高笑いした。  
それを周りの人間は何時もの事と流しながらも苦い表情を浮かべるのみだった。

「それで？誰が先鋒を務めるのかしら……」

軍議が進まないと、曹操は無理やりに話しを進める。  
最初に自分と発言しようとした袁紹は、何かに気が付き、暫らく考えた後に口を開く。

「そうですね……劉備さん？あなたが行きなさい」

「え！？私達ですか！？」

「あら？先鋒の名誉を欲しくはありませんの？安心なさい、あなた方の後ろにはこの名家の出である袁本初が務めて差し上げますわ！」

「そ、それは欲しいですけど……」

劉備は隣に座る自陣の軍師諸葛亮に視線を向けるが渋い顔をして首を振るだけだった。

もし本当に敵の策であった場合、総数の少ない劉備軍は一溜まりも無い。

後ろから袁紹軍が付くと言うことは、敵の策の場合に逃げる事を許さないと言う完全な脅迫なのだが、現在弱小勢力である劉備に拒否する事はできなかった。

「それではこれで軍議は終わりですわね」

劉備にはその後何を言われているのか、まったく頭に入ってこなかった。

被害らしい被害も無く、誰も傷つかない。  
高名を得たよりも、彼女にとってそれが何よりも嬉しかった。

「本当に何も無くて」

「桃香様！大変です！」

「ふえ！？」

のんびりと過ごしていた劉備の元に、義姉妹である関羽が血相を変えて飛び込んで来た。

「何があったの！」

何時に無く焦りを見せる関羽の表情に、ただ事ではないと感じた劉備は、駆け寄って先を急かした。

「た、太史慈が……太史慈が桃香様にお逢いしたいと……」

「え、えええ〜！！」

「ちょっと！本当に大丈夫なんでしょうね！？」

「ええ、知り合いが居ますし、評判を聞く限り此処が一番安全です」  
護は確かに評判も聞いて決めているが、決め手は前世の三国志の中の話しで出た劉備の人徳にある。

星が所属していると言う事もあるので、人徳と言う事に関してはほぼ確実である。

また、今からする話は今の劉備にはこれから始まる群雄割拠に向けての勢力拡大の為に必要だろうと考えていた。浅い考えながら、よっぽどの事が無ければ、断られる事は無いだろう。

護は危険が無いように手を後ろ手に縛られて座り込み、月と詠はその護のすぐ近くに張り付いていた。

しかしその格好は村娘のそれと変わらず、誰が見ても一庶人として見えるだろう。

「あ、あの……」

護が退屈凌ぎに近くにいた見張りの兵と談笑していたら、目の前に可愛らしい女性を先頭に見知らぬ女性が数人現れた。その中には星の姿も見られる。

彼女を見ると話をしていた兵が直立不動になった事から、この人物が自分達の目当ての人であることが解った。

「このような姿で失礼致します。自分は性は太史、名は慈、字は子義と申します。貴女が劉備様で間違いありませんか？」

「は、はい。私が劉備です」

「早速ですが、御願いが御座います。此方に居る二人の少女を保護していただけませんか？」

「え？それくらいなら」

「待ってください！」

近くに控えていたベレー帽の様な帽子を被った小さな少女が、静止をかけてきた。

護は劉備の近くに控える彼女が誰であるか、大体の当りはつけてい

た。

「はわわ、はなしを止めてすみません。しかし、此処だけはハッキリさせておかなければなりません。貴方ほどの人が保護を求めるその二人……どちらかが董卓さんでは無いですか？」

ズバリ言い当ててくる事に驚きは無い。

この子は恐らく諸葛亮もしくは鳳統、これくらいは考えて当たり前だ。

「あわわ、董卓さんであった場合、保護した事が他の諸侯に知られた時、私たちに危険があります。簡単に決められる問題じゃなくありません」

魔女の帽子と言えば解り易いか、目深にその帽子を被ったもう一人の少女が補足する。

「嘘を申し上げる気はありません。この少女が董卓様です、そして隣がその軍師賈馱。私は両名の保護を求めます」

周りの兵士が董卓の名に身構える。

それを護が一瞥し、威嚇した。

動きが取れないはずなのに、睨まれただけで一歩後退する兵士達。

「バカな！？ 圧政を敷いた者を助けるなど」

「此処に来るまでに町を見られた筈。その様な事が事実無根である事は理解されていると思いましたが？」

歩いてくる道中を思い出しているのか、それぞれが顔を変える。

「……解りました。私達が責任を持って保護します！」

「と、桃香様！？」

「だって困ってる人がいるんだよ、助けられるなら助けてあげたい！」

真摯に人を助けたいと言う劉備に感動と親しみが湧いてきた。護とて、誰かが困っていれば助けてあげたいし、事実助ける為に奔走していた。

「やはり、貴方を頼ってよかった……。よろしくお願いします！」

頭を地面に擦り付けて、深く礼を述べる。



「ちょ、ちょっと!?!?そこまでしなくても良いですよ!」

慌てて劉備が止めに入り、頭を上げる。

「しかし、そうするとどうやって匿うかですが……」

しょうがないと言う風に、どうやってやり過ごすのかを考え始める  
軍師達。

「それならば既に考えてあります。策としては……」

「居たぞお！！董卓軍の太史慈だあ！！腕に董卓を抱いているぞお！！董卓は手負いだ！劉備軍の者が致命傷を負わせたぞ！！」

護は洛陽の彼方此方を走り回り、自分の居場所を業と知らせるよう  
に走る。

「大丈夫か政？」

「平気平気！もっと飛ばして良いぜ？ガンガン行こうぜ！」

腕の中に居るのは、月が着ていた立派な服を着込んだ政だった。  
護が考えた策とは、影武者による逃走を演じる事。  
このまま逃げ切れれば、まさか連合内に董卓が居るとは気付く者は居  
ないだろう。

「この後噂で董卓が死んだと流せば、実質的な功績は無いにしても  
民は劉備と言う人間を賊を討った人間として、他の諸侯よりも早く  
思い浮かべる。劉備軍にも益は出た」

「でも兄貴が狙われないか？」

「だから暫らく放浪だな。隊の奴ら連れて彼方此方回るつもりだ」

「そっか、楽しそうだな」

頃合を見計らい、洛陽の出口に向う。

既に其処には、かなりの数の兵が配置され、突破をするのには一苦  
勞しそうだ。

「刻み込め！私を殺して主を死なせない！いざ参る！！」

「行っちゃったね……太史慈さん」

護が去った後を見詰めながら劉備は月に話しかける。

「は、い……」

涙声の月に詠は優しく頭を撫でる。

だが彼女の涙は止まる事無く、しかし声を殺しながら泣く。

「ま、もる、さん……最後に……『御仕え出来て良かった』って、  
いって……私、何も……してあげられて、ないのに……」

自分以外の誰かの為に、死ぬかもしれない事を平然と遣って退ける  
護のあり方に、劉備は尊敬の念を抱くに至った。

「私も頑張らないと！」

『貴女の目指す矛盾の道。しかし、諦める事無く進んでくれる事を  
祈っています』

彼が最後に言った事を現実にする為に……

彼、約束繋ぎ……（後書き）

如何でしたでしょうか？

感想ご指摘なんでも待ってます！

うる覚えで書いているからキツイ……再プレイが必要か。  
でも三国全部やるとかなりかかるからなあ

彼、収監される(前書き)

更新です。

此処から新章突入です！が、名前が出てこないな……呉加入編で良  
いか……いや、短く呉編で良いかも……

## 彼、収監される

「兄貴、最近人が増えたよなあ……」

「そうだな、荒っぽい奴らが多いけど、みんな俺を慕ってくれてるし、悪い奴らじゃないよ」

董卓の死を噂として流してから暫らく、放浪を続けて旅をしている中で、仲間が増え続けていった。

始めは食糧の問題やらで大変難しい事もあったが、ある村を拠点とし、その村の痩せた畑などを護が前世の記憶を頼りに豊かにしていた。

数ヶ月と言う結構な時間は要したが、お蔭で食糧問題は解決し、この村も発展し、結婚までした隊員すら居る位だ。

「心配なのが、此処が袁術の領内だと言う事か……」

この異常な発展は必ず、袁術だけでなく孫策達の耳にも届いているだろう。

戦慣れしている昔からの隊員は、村が発展したと同時に他の小さな村に散り散りになった。

護が教えた農業を伝える為だ。

護とて農業は知識のみで、ならばと、本業に知識を与え、後は任せの方が良いだろうとなったのだ。

村が豊かになると言うことは、それだけで山賊の類は減るのだ。

そのため、戦慣れしており信頼の置ける者は離れ、戦いになった場合、まともに戦えないだろう。

「何も起きなければ良いが……」

最近、孫策と袁術の間で争いが起きそうな流れがあるが、油断はできない。

しかし、今までの逃亡生活や、ここでも長のような立場にいた護は平和が長く続いたことで、ほんの少しだけ油断をしてしまった。

「う、うわああーッ!」

と、その時外から突然悲鳴が響いてきた。

「何事だ!?!」

「た、大変つすよ!袁術が、袁術の軍が攻めてきやがった!」

「なっ!?!くそっ!」

「兄貴!?!」



武器を装着し、戦う準備を整えて外に飛び出した。

「はいはい、大人しくしててくださいねえ」

しかし、既に外では何人もの人間が取り押さえられており、手を出す事が出来なかった。

此処まで近付かれても軍の動きに気付かなかったのは、完全な自分の落ち度だ。

熟練度の低い兵なのだから、其処まで考えるべきだった。

「いやあ、まさかここで太史慈さんに会えるとは思いませんでしたよ。最初は賊が村に集まってるって言う情報で来たんですけど驚きました」

「むっ」

賊、今は違うが、新しく加わった者達は賊に身を竊っていた者達だ。討伐し、改心した者達を加えて行っている内に大所帯になり、今の村に腰を落ち着けていたのだ。

しかし、賊の顔を知っている人間から見れば賊が集まっているようにしか見えないだろう。

忙しい時期にも拘らずこの場に来たのは、そう言った声が高まったことで、仕方なくと言う事らしい。

タイミンクの悪い事だ。

「あ、私、張勳って言うんですけどお、美羽様の命令で此処に来たんです。最初は孫策さんに来て貰おうと思っただんですけど、丁度違うことをお願いしたばかりだったんで、しょうがないなあと私が来ちゃいました」

「それで？その袁術様の所の方がこの後如何されるおつもりですか？」

「ええ、大人しく捕まってくれるならこの人たちはお放しします。私じゃ、太史慈さんに勝てませんから、搦め手です！」

周りに控え、隊の者に武器を向けている者達がその手に少しだけ力を込めた。

「！解った！解ったから止めろ！」

手に装着していた武器を外し、張勳に投げて渡して、その場に座り抵抗をしなかった。

「はあ、いい、それじゃあ皆さん、帰りましょう。太史慈さんを捕まえたって教えたらきつと美羽様から褒めてもらえますよ」

手を後ろに縛られ、捕虜のようにそのまま運ばれていった。

「あ、兄貴!!」

追いかけてよと政を周りの隊員が必死で止めている。  
正しい判断に、護は嬉しそうに他数名の隊員と共にその場から歩いていった。

「大將軍様！あの馬如何しましょう？たしか太史慈の愛馬の筈ですが……」

「勿論連れて行きますよお」

「し、しかし既にその馬の手に掛かり、何人もの者が怪我を！」

手綱を持たれる事を嫌った黒獅はその巨体から繰り出される圧倒的な蹴りを繰り出し悉く吹き飛ばしていった。

「え、ええと、そんな気性の荒い馬が居てもしょうがないですね。今回はこのまま引き上げて、専門の者をよこしましょう」

黒獅の被害を見た張勳は冷や汗を流しながらこの場を後にしていった。

「な、何で止めたんだ！？兄貴が、兄貴が連れて行かれちゃったのに！……てっお前等！？」

軍が姿を消して漸く拘束から逃れた政は、後ろを振り向き大きな声で怒鳴り散らした。  
そこで確認した姿に政は言葉を失う。

「落ち着いてください。あの状況で動かれたら、それこそ大変な事態になってました」

「いやあ、定期集会に来て見たら、何か大変な事になってましたね」

「おちゃらけてる場合か、將軍が連れて行かれたんだ。何か考えないよ……」

そこに居たのは、懐かしい太史慈隊の面々、赤、青、緑、黄、桃の五人だった。

護は定期的に決められた日に集まり、報告会をしていた。

「そ、そうか、今日だったな……」

丁度今日が、その報告会の日だったのだが、一步遅く、軍が護を連れて行ってしまった。

「今俺達に出来る事は、將軍がいつでも戦えるように、太史慈隊を集結して待っていることだけだな」

流石に人数が圧倒的に違いすぎる為に奪還や、その他の作戦で戦えない。

残されたのは、護が出てきたときに逸早く自分たちが駆けつけるようにすることだけだ。

(兄貴、待ってるからな……)

「あ、おいつ！黒獅、如何したんだ!？」

繋がれていた馬舎を打ち抜き、外に飛び出してきた黒獅は制止をかける人間を無視して走り出した。

「兄貴を追いかけに……？いや、村を回り続けてる？」

黒獅は只管に村の外周を回り続け、止まる事は無かった。

「あ……そうか、お前も待ってるんだな。兄貴の事を……」

何かを求めて走ると言うよりも、求められた時に答えられるように身体を作るように、その背には誰がつか解らない重石を乗せられ、純粹に自分の乗り手を待ち続けていた。

「孫策殿が、は、反乱を起こしました！」

「な、何じゃとーっ！？」

孫策の裏切りによって、袁術たちは焦りを見せた。

一揆を起こした民をも吸収し、その勢力は恐ろしいまでに膨らんでいた。  
そして、その対策を一手に任された張勳は歩きながら溜息を漏らしていた。

「はあ〜……英雄って呼ばれてる孫策さんに、私達が勝てるわけ無いのになあ〜……」

「ど、如何しましょう、大將軍様？」

「んー……戦うしかないけど、お嬢様を連れて逃げる準備、しとかなくちゃだね」

「そうですねえ。英雄に自分たちが勝てるわけありませんもんね」

絶望的状况に緊張感の無い話し方で、会話を続ける張勳だったが。

「ああ！良いこと思いついちゃいました。英雄さんに当てるには丁度良い人がいたんです！」

笑っている顔は綺麗だが、その中では腹黒い考えが渦巻いていた。

「ムグツムグツぷはあく……飯は確り食わせてくれるんだな」

薄暗い牢の中で、用意されていた食事を平らげている護。

此処に収監されてから、どれほど経っただろうか。

一月はまだだが、二週間は経っている。

「今日も生きてらっしゃいますか？」

今日は珍しく牢の外から闖入者が現れた。

「いやまあ、食事が出てるから飢え死にはしないしな……それよりも、こんな所に来るなんて珍しいな」

「そつなんですよ。今日はお願ひしたい事があるんですよ」



敵将、と言つか捕虜を使おうとする気持ちが解らないが、出してく  
れるなら是非も無い。

「実はですね？孫策さんと戦ってもらおうと思いましたが」

「何……？」

彼、収監される（後書き）

如何でしたでしょうか？

捕まってしまう収監された護君、しかも利用されそうだ！

この後どうなるのか！次話を待て！w w

彼、呉に敗れる(前書き)

更新です。

書くのが疲れました……戦闘とか苦手です。

それではごっごー！

## 彼、呉に敗れる

「前方に砂塵を確認しました！恐らく敵の部隊と思われれます！」

「あら？袁術ちゃん達にしては展開が速いわね？」

「ここは袁術達が拠点とする寿春城からまだかなり距離がある。反乱の報を受けてからまだそれほど経っていない。」

「そうだな。奴らの性格から野戦に出る事は無いと思っていたが…誰が指揮を取っている？数は？」

「敵の数は此方の約半数にも満たないかと……。敵将の旗は未だ確認されていません」

「半分以下？ならば袁術軍の本隊ではないな。狙いは時間稼ぎか、それとも……」

「あ！旗を確認しました！旗印は……ええ！？」

前方を睨み、敵の動きを逐一報告していた周泰は旗を見た瞬間悲鳴にも似た声を上げた。

「どうした！？誰が率いている！」

「あ、すみません。旗印は中央に太の字」

それは今の乱世において、武の頂にいる者として、その名は呂布と並んで知らぬ者は居ない。

「敵将は……太史慈です！！！」

「……孫策の軍が見えてきました」

「そうか……」

護は感情の籠もらない声で返事を返した。  
そして気が付かれない様に後ろを振り返った。

(見張りがいるな……俺の動きを報告しているのか)

到る所から感じる視線。

それは護の監視に放たれた兵たちだ。

(少しでも可笑しな動きをすれば、隊の人間の命は無いか……)

護が何故こうも簡単に命令を受け従っているかは、人質を取られて  
いるのが原因だ。

村で共に捕まった複数の隊員、その命が今袁術たちの指先一つ。

「裏切れば殺す……か。それにしてもこの数でどうやって勝てとい  
うのか」

相手にするのは反乱した民十万と孫策軍の精鋭たち。

対して此方は十万など届く事は無く、信頼関係などないレンタル軍。

「……出来る事はやるさ……奴らも動いてくれれば……」

それでも己に課せられた仕事を全うしようと、負けが確定したも同然な、負ける事の許されない戦いに身を投じる。

「これより我らの戦いは始まる！死力を尽くし事に当たれ！突撃！」

ここから戦いは始まる。

「やっぱり強いわね……太史慈。でもたった一人が強くて戦いには勝てないわよ？」

護は兵を上手く動かし、有利に事を進める事は出来るが、策を廻らす事には長けていない。

正面からの激突から始まった戦いは、伏兵やその他の策に、護は終始翻弄される事となった。

「雪蓮、何をやっている！？出すぎだぞ！」

「でも祭達だけじゃ、彼は止められないわよ？」

「何を言っている。将の殆どを奴の元に向わせたんだぞ？それでダメだと言っのなら、奴はどれほどの化け物だと言っのだ」

遠くで一際高く土煙を上げる戦場を見詰め、孫策はなにやら考え込んでいた。

「だめとは言っていないわよ？これだけの数なら幾らなんでも討ち取れるでしょうけど……私はね」

悪戯を思いついた子供のように無垢な笑顔を浮かべて、またしても親友の頭を悩ませる一言を言い放った。

「彼を生け捕りにしたいのよ」



「だめだな……これ以上の戦線の維持は不可能だ。しかし今撤退するのは……」

「ほれ！何をよそ見しておる！其処までワシ等は退屈かの？」

「ちっ！……女性に此処まで執拗に求められるのは満更でもないですが、少々人数が多くありませんか？流石に全員をお相手するのは骨が折れます」

矢を避け、剣を避け、更に軽口を叩きながら黄蓋、周泰、甘寧等、名立たる武将を相手にしていた。

さらには呂蒙と名乗る少女が、戦況を近くで動かし徐々に味方の数が減り、所々暗器らしき物を投げつけてくる。

近付こうにも此方の兵を追い込み進路を防いだり敵の中にあえて飛び込んだりと、味方ごと倒す訳にも行かない為思い通りの動きが出来ない。

「もお〜！なんでシヤオを無視するの！？」

更に困ったことに、如何見てもこの場に不釣合いな少女がいる。相手が女性等で手心は加えたりしないが、何故か手を出すのを躊躇われる。

しかも不釣合いながら、その強さは他の武将の一段、もしくは二段ほどしか変わらない為油断も出来ない。

「尚香さま！危ないですから下がっててください！？」

黄蓋が慌てた様子で声をかけて下がるように声をかける。

それを聞きながら「これが弓腰姫かあ〜……」と如何でも良い事を考えていた。

「それにしても本当に戦い辛い方が多いな！……それに、上手い！」

黄蓋はもとより、周泰も甘寧も鏑迫り合うタイプの将ではない為、近づく事が少ない。

しかも死角ばかりねらっての一撃が目立ち、黄蓋はその二人の攻撃の際を埋めるように矢を放つ、経験から来る視野の広さは今現在の一番厄介なものであり、護の今まで戦った事の無いタイプだ。

更に護にとって悪い知らせが続く。

「私も混ぜなさいよね？」

孫策である。

本場に護にほぼ全ての戦力を傾けた形であるが、袁術側には護以外に将がいなかった為残った者だけで事足りてしまったのだ。

「これはこれは……何時以来ですかね？」

「さあね、董卓連合以来だから一年は経ってないわよ？」

言葉を聞いたただけなら、知人にあつた挨拶だが護の手は未だ動き続け自身を脅かす攻撃を捌き続けている。

「……それにしてもまた派手に削ってくれたわね？此処まで被害が出るこの後に差し支えるんだけど？」

「申し訳ない。ですが、自分にもやらねばならない事がありますので」

「それでも良いけど、貴方の部隊は、みんな逃げちゃったわよ？」

攻撃が一旦止まると、周りを見る事無く落ち着いたまま構え直す。

「元より彼らは私の配下ではない。余計な被害が出ない分……やり易い！」

飛翔してくる矢を震脚により隆起させた地面で受けると、その岩を砕き目晦ましとして黄蓋に肉薄する。

それを予見していたのか、黄蓋は既に剣を抜き構えを取って待ち構えていた。

そして、その剣をそのまま振り下ろしていた。

「ふっ！」

護はその振り下ろしを確認すると、受ける事無く、避ける事も無く、そのままさらに一步詰めた。

(この孺子ウラハチ!?死ぬのが怖くないのか!)

一步詰めたことで、身体で剣を受けたが、深く刺さる事無く逆に護の射程範囲に入った。

「俺は奴らの為にも!此処で貴女方を止めなくてはいけない!」

剣を受けそのままの形で戦闘不能になるであろう力で蹴りを入れた。

「ぬうつ！？」

「こつちも忘れないでよね！」

孫策が剣を横薙ぎに払い、それを後ろに飛ぶ事で回避し着地すると、そのまま援護が受けるのに一番遠い位置にいる孫策目掛けて突撃した。

孫策はそれを突きで迎撃に出たが、護は其処でも回避よりも進む事を選択し、頬を掠める剣を確りと握り固め、動かなくした。

「…………え？」

そこで護は呆気に取られた。  
掴んでいる剣に重みが消え、逆に自分を拘束する何かを感じたからだ。

「今よ！冥琳！」

その言葉が叫ばれると、空に網が投げ放たれた。  
それと同時に護は自分を拘束するために抱きしめてきた孫策を確認し、振り解いて此処から逃げる為の時間が足りない事を認識すると

頭の中にある言葉が浮かんできた。

(……俺は……負けたのか……?)

それは護がこれまで生きてきた生の中で、初めての決定的な敗北だった。

彼、呉に敗れる（後書き）

護君にとつての敗北とは戦争の勝敗ではなく、自身の周りの範囲だけの勝敗です。

つまりこれまで経験した撤退戦等はあくまで戦争の勝敗であつて、護君個人の敗北ではなかつたのです。

感想、ご指摘何でも待ってます！

彼、恩義を返す〜前編〜（前書き）

お久しぶりでございます。

最近リアルが忙しいでございます……執筆活動が進みません……

そんなこんなで最新話！連投しますが気にしないでww

三話連続投稿します

この話は賛否別れそう……



彼、恩義を返す（前編）

「うちに仕官しなさい！」

「お断りします」

捕虜として捕まった護は孫策からの猛烈な誘いを断り続けていた。勿論、呉に入るとは護にとって悪い事ではない、しかし、時期が悪すぎる。

今呉に入ってしまったら裏切り扱いを受け、隊員は殺されてしまう。

「自分には色々やらなければならない事があるんですよ。このまま首を飛ばしてくれた方がまだ良い」

話は平行線を保ったまま、護は何処から情報が漏れるか解らない故にけして口を割らないし、孫策も諦める気は無さそうだ。

「雪蓮、何時までも立ち止まっている訳にも行かない。無用な時間を掛ければそれだけ準備を整えられてしまう」

「解ってるわよ。でも捕虜を連れて歩くわけにも行かないし……」

まだ全員が集まっていならしく、この場には四名の人間が居た。そのうち二人が話に夢中になってしまった為、隣に立つ恐らく護衛だろうと思われる周泰に目を向けた。

「周泰ちゃんって素直だよね」

「ふへっ!？」

いきなりの事で可笑しな声を上げこちらを見てきた。

「ああ、いきなりごめんよ。ただね？戦っていて、君が余りにも素直だからとても楽しかったんだ」

「えと……。それはどういう意味でしょうか？」

小さく小動物を思わせるその少女は隣に座り、興味深そうに耳を傾けた。

「うん。君は死角からの攻撃が上手い、隠密だけなら君より優れている将を見た事がない」

「そ、そうでしょうか！私上手くやれていますか!？」

「もちろん。君の年で其処まで出来ていればかなりの物だ。……でも君は攻撃する瞬間が素直すぎるんだ。虚実を混ぜなきゃ」

「虚実……ですか？」

「そう、たとえば……」

可愛らしく首を傾げる周泰に護は少し近付くように動かない身体で擦り寄ると、頭突きをするように頭を動かした。勿論、そんな見え透いた攻撃を避けられない筈無く難なく避けられるが。

「あうっ!？」

攻撃を避けた直後、護に巻かれていた鉢巻が周泰の鼻を直撃する。

「これが虚実。敵に避けたと思わせ本命の攻撃を当てる。実戦じゃ、皆もつと気が張り詰めているから、あんな簡単な手は引つかからない。だからもう少し大きくやるんだけどね」

「そうなのですか……」

大きく何度か頷き、メモをつけ始めた。

そのメモの中に猫のイラストが見えたのは忘れる事にしよう。

「やってみるかい？練習」

「良いのですか？」

「うん。まだ話は終わらないみたいだし、暇だからね」

まだ話し続ける孫策たちを見た護は周泰に指導の真似事を始めてしまった。

「それじゃ、やってみようか？」

「はい！行きます！」

そしてそのまま、護がやったように頭突きを繰り返してきた。

其処から攻撃を止めて別の攻撃に移るはずなのだが、いきなり上手く行く筈も無く、そして護が動ける訳もない。

結果として

「いたッ!？」

「あつあつっ……!」

激しく顔をぶつけ合った二人。

周泰は額を押さえて唸っていたが、護は手も足も動かない為に衝撃を止める物がない。

そのまま背後に身体が持っていられる。

「姉さま、此方の作業はおわ……り、ました……」

「あ……」

背後に倒れるという事は当たり前であるが仰向きであり、その上を丁度通ろうとする美しい女性がいた。

護は美しい褐色の足の根元を包む純白に輝く

「き、きゃああああー!」

「ぐはっ!？」

避ける事叶わず、上から降って来る足をその顔に受けた。

「い、痛い……同じ箇所を二度連続……き、効くっ……」

うつ伏せになり、痛みを堪える護を隣で介抱する周泰。

「お前は誰だ！な、なぜお前はそこで倒れている！何故私を見上げる……」

「ふ、不可抗力と言いますか……態とではないのですが……じ、自分分は、太史慈です。え〜と？」

痛みが引いたのか、自分の名を名乗り、その女性を見上げる。其処には美しい桃色の長髪と青い瞳の女性が立っていた。

「貴様が太史慈だと！？……天下無双とまで言われる呂布に並ぶ人間には私には見えないが。人違いと言う事は……」

名前に大きな反応を見せたその女性は護を凝視し、矢張り優男にか見えなかったのか、酷評がその口から出てきた。

「ほう、蓮華様にはそう見えますか？」

天幕に次に顔を見せたのは、戦闘中に知った事だが呉の忠臣である黄蓋だった。

「ああ、これは黄蓋さん。お怪我は大丈夫ですか？暫らくは動けない様に攻撃した筈なのですが、流石ですね」

「手を抜かれて何時までも寝ておれんわ。これしき次の戦いに支障ない」

面白い物を見るように黄蓋は近寄り語り掛けた。

「其処まで大げさにしたつもりはないんですが……ばれてましたか？」

「そ、それは如何言う事だ……」

「この孺子ウチは蹴る時、態と手を抜きおつたのです。全く、これまで生きてきてそんな事されたのは初めてだぞ」

流石は歴戦の武将と言う所か、短い戦いの中で護が攻撃時に力を緩めているのを感じたのだろう。

「自分は武人、無駄な殺しは避けてるだけですよ」

「ふうん、殺さない配慮、ね？……甘いわ。そんなんじゃ何時か殺されるわよ？」

黄蓋と話していたら、後ろから孫策の声が聞こえ、剣が首元に突きつけられた。

「甘いですよ……でもそれが、太史子義の生き様で、これまでの俺の人生そのものです。……そんな事よりも、俺をこの場で殺す事で決まったんですか？」

剣を構えた孫策を見詰めたまま、護は次の台詞を急かす。

「いいえ、貴方は殺さないわ。このまま何処へなりとも行きなさい」

突きつけていた剣を戻しながら、孫策は信じられない事を口にした。

「……は？」



「ね、姉さま!??どう言いつもりですか!」

予想を斜め行く台詞に護は呆け、恐らく孫権であろう少女は姉に突っ掛かった。

周瑜は頭に手をやり呆れ返っていた。

恐らく孫策が押し切った形で話が纏まったのだろう。

「だって、うちに仕官しないって言っし、このまま捕虜として連れるのも今の現状難しい。後は殺すか逃がすかだけど、殺すには勿体無いし、私も見逃された事あるからね。これで貸し借りなし」

「き、聞いてません!姉さまが見逃されたって何時の話ですか!??」

「董卓連合の時だけど?」

姉妹での話しが続く中で、護は深く考えていた。

このまま開放されると言う事は、とんでもなく甘い決定だ。

この場にいる人間全てがそれで良いのかと感じているが、護にとってはそれ所ではない、帰ること事態が危ぶまれているのであった。

(困ったな……どっちが村だろうか……?)

有り得ないほどの方向音痴の護にとっては、まだ捕虜として繋がれ

ていたほづが生存率は高いのではないだろうか？

彼、恩義を返す〜中編〜

「孫策様。この御恩、必ずやお返しいたします」

「そんなの良いわよ。さっきも言ったけど、最初に貸しを作ったのは私なんだから」

縄を解かれ、天幕の外まで出てきた護は、この決定を下した孫策に礼を述べていた。

周りにはまだ多数の兵が警戒の為に立たされているが、兵の大半が護に対して危機感を抱いていなかった。

僅か数時間の間、捕虜として捕まっていただけの筈なのに、現在も気さくに兵と会話を楽しんでいたり、何故か皆好意的であった。

「それでは兵の皆もまた何時か見えよう」  
まみ

孫策と幾つかの会話を済ませた護は、今度は兵に向って大声で声を投げかけるとそのまま歩き出した。

「雪蓮姉さま、一体何を考えているんですか！？奴がこのまま袁術の元に戻れば、今度こそ私達は……！」

護との戦いによって、その圧倒的な力に恐怖した民達はかなりの数

が逃げ出してしまったのだ。

残された人数だけでは袁術との戦いは負けはしない物の、かなり厳しい物になる。

其処に護が加わると、また将を一纏めにして当てなければならなくなり、敗北の危機すら出てきてしまう。

「大丈夫よ。袁術のところなんかに戻ったりしないわ」

「また勘か？雪蓮」

孫策の自信に満ちた発言に、孫権は渋い顔をして近くにいた周瑜は何時もの事か、と確認を取る。

「そつ。でもそれだけじゃないのよね……。祭は彼のこと如何思う？」

「……何と言ったらいいのか……。ちぐはぐな印象を受ける奴じゃったの」

黄蓋は腕を組みながら、真剣な表情で護の姿を捉えていた。

「ちぐはぐ、とは？」

「うむ、才能は確かに有るじやろうが、奴の戦い方は経験から来る物だろうよ。だが、ワシが感じた奴の年季と、見た目の年齢が合わない。それに、生きる術を常に探してる目をしながら、死兵の様な戦い方をしよる」

黄蓋の言っている事は、かなりの的を射ていた。

護は、前世の格闘技の試合や、たまに絡まれたりする不良との喧嘩の経験、今生でも数多の戦場を経験し、年季ならば歴戦の将にも匹敵する。

そして死兵の戦い方とは、死を覚悟し、どんな攻撃にも怯まず、恐れないことを指す。

これは、敗北した軍によく見られることだが、護の場合は、彼が死を経験し、死に対する恐怖が薄まった事により正常な人間では、決して踏み出せないギリギリの境界線を常に越えて戦う事が死兵のように映ったのだろう。

「ふう、それは今はいいでしよう。それよりもこれからの事を話しましょう。まず、太史慈にやられた損害だが……」

周瑜が皆が集まったのを確認すると軍議を進めていった。

(おいっ！本当にこっちで合ってるんだろっなっ！)

(知らんよ？緑、お前が知ってるんじゃないの？)

(俺！？俺はてっきり青か桃が知ってるんだとばかり……)

お馴染みに成りつつある連者、その中の青、緑、桃の三名。  
現在、誰にも見付からないように暗がりでも密談を交わしていた。

(青、お願いだ。お前が一番知識が有るんだから知らんと言わない  
でくれ……)

(先行しだしたのは誰だっけ？)

(それは……)

小さな声で無駄な言い争いをしている三名は現在ある場所に潜入していた。

「貴様ら！そこで何やってる！！」

「「袁術様の為に！えいえい、オーー！！」」

三人で一つの壺を掲げながら、怒鳴ってきた兵士に向き直る。それぞれの額に冷やが汗流れる。

「何だお前ら？新入りか？」

「え、ええまあ、ですから私どもの村で取れたこの蜂蜜を持って行くのかと……」

壺に入った蜂蜜を兵士に見せると、その兵士は苦笑いを浮かべる。

「まあ、た蜂蜜か。いい加減にして欲しいよな？解った、行っていいぞ」

そのまま励ますように肩を叩いてきた兵はそのまま何事も無いように歩き去って行った。

「おい、袁術の所ってこんな警戒なくて大丈夫なのか？所属も聞かれなかったぞ……」

「主があれだから、その兵士能力なんかもそれ相應、と……」

「なにはともあれ、これで俺達の仕事をこなせるな。全ては……」

「「「我らの將の為に！」「」」

三人は声を揃えて口にするのと奥へと進んでいった。

彼らがこの場に赴いた原因は、ある一通の手紙から始まった……



「博士っ！将軍から手紙が届きました！！」

赤が手紙を片手に大声を上げて、政がいる場所に突撃してきた。その手紙は太史慈が呉に対して出撃が決まった時に書かれた物だった。

「この内容は……！」

その内容を読んだ政はすぐに青達を呼び行動の指示を飛ばした。その内容とは。

『自分だけ、これから孫策軍と戦う為袁術様の城から出撃する。敵から仲間を守る為援軍を送れ。問答無用である』

事務的な護らしくないその文面を読んだ政は、護が何を期待しているのかを正確に読み取った。

『自分だけ袁術の城から』と書かれていることから、共に捕まった隊員は同行していない。

さらに捕まったにも拘らず『孫策軍と戦う』のには理由が必要で、敵から仲間を『の文がその理由を語っている。

この手紙は『人質に取られた仲間を城から救い出すために援軍を送れ』と取るのが一番解りやすい。

「回りくどいぜ、兄貴！」

遠まわしな書き方になってしまったのは、手紙を書くことを許された護が、必ず検閲される事を見越し、出来るだけ不自然にならないように自分の隊に救援を要請した結果である。

「よ〜しっ！誰がある！」

「はっ！」

「青たちはもう袁術の城に行ったな？それなら今度は黒獅を放て！兄貴を迎えるのならあいつが一番正確だ！」

既に少数の潜入三人は移動を開始し始めており、手紙が届いた時間を計算すれば、もう時機孫策と当たるだろう。今黒獅が走っても間に合うことはないだろうが、迎えに行かなければ帰って来れないのだ。

「太史子義を捕らえた事を後悔させてやる……」

護が戻ってこない事は考えていない。

必ず戻り、報復は性格上しないまでも、孫策に加勢位はするだろう。

「兄貴には、人を惹き付ける何かがあるからな。そうじゃなきゃ、此処まで付いてくる人間が増えるものか」

外に集められ、待機している太史慈隊の面々を見て、政は笑った。

「博士、何であいつ等行かせたんすか？俺も居たのに……」

赤が不貞腐れながら政に話しかけた。

「しょうがないじゃん。お前が副長だし、一番の知識人は青で工作関連は緑と桃が一番優秀なんだから。黄とお前は戦う事が一番だろ？」

頭の後ろで腕を組みながら、赤の質問に答えていく。

「そりゃあそうですけど……。てか、確り將軍の専属軍師が板に付いて来ましたね？」

「だめだめ、俺は軍師に向いてない。……くそ、あのチビじやりに今度合った時こそ……」

最後に小声で何かを呟くと、盤上の駒を動かし始め、それ切り話しかけても返事をしなくなった。

「何か、昔にあったのか？」

ぶつぶつと何事かを呟きながらひたすら駒を動かす政を不思議そうに赤は見詰めていたのだった。

彼、恩義を返す〜後編〜

「あれ、か？」

「そうらしいな。とりあえず、牢の番を遠ざけなければ、鍵を取りにいけない」

潜入を行い、見事、部隊の人間が捕まっている地下の薄暗い牢の傍まで辿り着いた青たちは、壁に掛けられた牢の鍵と、その傍で椅子に座り込んでいる兵を見て物陰に隠れ考え込んだ。

「それなら心配要らないと思っぜ？そろそろ……」

「おい！！火事だ！かなり大きい！お前も来い！！」

「なに！？孫策軍に続いてか！？工作人員でも忍び込んでんじゃねえだろっな……、わかった今行く！」

階上から慌てた兵士の声が地下で木霊し、それを聞きつけた牢番をしている兵も慌てながら、その場を後にしていった。

「……何やったんだ？」

「一寸いちゆつとしたからくりを。時間を置いて火が広がるようにしておいた。城攻めも始まったみたいだし、一石二鳥！」

「そういつた物が得意とは知っていたけど、凄いな桃……」

「いや、俺なんてまだまだ。夏候惇人形の作者には全然敵わないって。どんな人が全然知らないけど俺の心の師匠だ」

自分の目標を語りながら、近くに居た自分と同じ目標を持つ緑と会話を花を咲かせ始めた。青はそれを後目に掛けられていた鍵を取ると、牢に一人で近付いていった。

「う、……あ、あんたらは……！連者様たち！？ま、まさか助けに？」

副長の赤を擁する連者の彼ら五人は、部隊内でも可笑しな呼ばれ方をしていた。

その呼ばれ方に一瞬眉を寄せる青だが、すぐに気を取り直し、鍵を外しに掛かった。

「すぐに準備をしろ。ここから出て城壁に行くぞ！今起きている火

事に乗じて、狼煙を上げる」

「城壁に？それに狼煙とは？一体何を……？」

困惑顔を見せる捕らえられていた隊員達に、三人は悪戯を思いついた子供のようになかつかつと笑い、こう告げた。

「勿論……。反撃の狼煙さ！」

「結構時間掛かるわね……」

「しょうがないですよ。さっきの戦いでかなりの脱落者がでましたから。本来、城攻めには三倍の兵力といわれているのに、同数より少し多いくらいです。それなりにかかりますよ。」

城門を前にして、前線に出ることを止められている孫策は、暇だからか愚痴を溢し、その隣で陸孫は笑みを浮かべた表情のまま、その言葉に答えていく。

「ねえ、隠？行っちゃダメかしら？」

「冥琳様に怒られますよぉ〜！」

前線で指揮を取る自分の上司の顔を浮かべて、笑みを少しだけ崩し提案を退けた。

「もう、冥琳はケチなんだから。……………？何かしら、あの煙……………」

孫策が城壁に視線を向けると、赤い煙が立ち昇っていた。火事が起きているのは、戦いが始まってすぐに起き、気が付いていたが、普通の火事なら黒い煙である筈で、赤い煙など、人為的であれば可笑的い。

「何かの合図でしょうか？それにしても敵さんに動きはありません……………それどころか、困っているようにみえますねえ？」



細く、それでいて目立つ赤い煙は、孫策軍に緊張感を、袁術軍には困惑を与えていた。

「で、伝令!!」

「如何した！前線で動きがあったのか!？」

駆け込んできた伝令のあまりの慌てように、一瞬前線の将が負傷でもしたのかと危機感を抱いたが、戦線には全く乱れは見られず、気のせいだと安堵した。

「東門の方面に砂塵を確認！総数は不明ですが敵の増援だと思われ  
ます！周瑜様からは、撤退も視野に入れると……」

悪い知らせは望んでなくとも届くもの。

それを聞いた孫策は小さく舌打ちをすると、いまだ開け放たれない城門を睨みつけたのだった。

「七乃おゝ、妾は蜂蜜水が飲みたいのじゃ！まだ孫策は追い払えんのかの」

「無理です！と言うか、さっきも言ったじゃないですかあゝ、このままじゃ危ないですから、逃げる準備しましょうって」

玉座にてその小さな身体をバタつかせて、自身の好物を要求する。

それに答えながら笑顔を崩さず、それでも逃げる事を進言し続けた。

しようがないので一旦了承し、自らの部屋に戻った張勳は必要な物を掻き集めた。

「はあ、太史慈さんも思ってたより使えませんでしたし、このままだと危ないですね。まあ、時間だけでも稼いでくれましたし、美羽様を説得して早い所、こんな所からおさらばしちゃいましょうか」

せつせと二人分の身支度を整えて、玉座に到着すると、血相を変えた兵が突入してきた。

「た、大変です！城の内部に敵工作員が侵入、捕らえていた太史慈の部隊の者と城門にて狼煙を上げております！火災もその者達の可能性が！」

一人が報告を終えると、タイミングよく、更に兵が駆け込んできた。

「も、申し上げます！狼煙に呼応し、敵増援出現！攻撃を開始しております！て、敵将は……そ、その……」

言いよどむ兵は遠慮がちにその名前を告げた。

張勳はその名前を聞いて、一も二にも主を連れて早急に逃げる事を選択した。

護とて、最初から利用されるだけで終わるつもりはなかった。

救出が終わったと同時に逃げ出し、自分の手勢だけでも袁術を攻めるつもりだった。

少々厳しいが、それを行えるだけの自信と実力があつた。順序良く進めば、まさかの太守まで成れたかもしれない。しかし、今回は呉に捕まり、さらに見逃す事までされてしまった。護としては二重の意味でこの戦いに出向かなければならなかった。

「ふ、ふふふ、ふはははははっ！蹴散らせ！我らを侮辱した袁術に、その愚かしさを教えてくれようぞっ！」

「うおおおおおおおおおっ！！！」

「な、何だ……この可笑しな連帯感は……俺の知らない間に部隊に何があつた……それから政、目的が物凄く変わつて……」

無事に黒獅に拾われら護は、政が予め予測し、準備していた部隊と準備を使い、そのまま寿春城を攻め立てた。

その数およそ一万。

たった一人の為に、一万という数は多すぎる。しかも、その兵一人一人が元山賊だったり、農兵などよりも腕が立つのだから性質が悪い。

義勇軍に近いその集まりは、義勇軍に有るまじき戦慣れと統率が成され、あつと言う間に城門に取り付いた。

「將軍っ！お帰りを心よりお待ちしております！隊員は無事に救出を完了。これで將軍を縛る物はございません」

何時の間にか、護の近くに来ていた青が、護との再会に喜ぶ、しかし報告は確りこなす。

その報告の中で救出、放火、狼煙と数々をこなした青たちは、その変わりに発覚が早まり城門を内側から開けられなかったと、悔しさを滲ませる。

「いや、十分すぎる。お前たちは俺の誇るべき部下であり仲間だ。

……俺の我が儘に付き合ってくれる誇るべき同胞よ、改めて聞いて欲しいっ!!」

護の一声で、まるでモーゼの海の様子に左右に割れ、作り掛けで不恰好な形の破城槌を前に道を空けた。

その破城槌には車輪が取り付けられており、大人数で転がしながら此処まで運んできたのだった。

「俺は大恩の下、この戦に介入する！敵である俺を無傷で逃がした孫策殿にその御恩を返す時！」

破城槌の後ろに立ち、大きく力を溜めると、大きな叫び声と共に解き放った。

「突撃せよっ!!」

「「「「「うおおおおおおおおお「「「「「」

護に力の限り押された槌の車輪は拉ひっぱげ、槌本体は城門と共に粉々に碎け散った。

孫策軍も、袁術軍も、そのあまりにも馬鹿げた現状に一瞬呆けてしまうが、護の兵達はそれが当たり前であるかのように、城門を超えていった。

「あはははっ！はははっ！ダメ面白過ぎ！」

まさか逃して直ぐに加勢に来るとは思わなかった。  
しかもかなり大規模と言える人数だ。

「何を笑っている、雪蓮！そんな暇はっ！」

あまりの異常事態に近くに来ていた親友から、怒鳴られてしまった。それでも笑わずには居られない。

「だってあれ見たら何かバカらしく見えちゃって」

「太史慈の事か？ そうだな、バカらしいほど実直な男の様だ……」

「そうじゃない、そうじゃないのよ……。私は英雄だなんだとか言われてるけど、私から言わせたら、ああ言うのこそ英雄って言うんじゃないかしら？」

孫策の視線は心底楽しそうにまだまだ激しい戦場に向けられていた。

（人を惹き付ける魅力。従っても言いと民に思わせるだけの魅力を持つているのかもね？）

彼、恩義を返す〜後編〜（後書き）

と、いう感じで一時間毎に予約を入れて三話連続しました。

最近執筆から離れてたから、勘を取り戻しきれないかと思いますが

（元から其処まで上手くないけど）楽しんでいただけたら幸いです！

それでは感想などをお待ちしています！



彼、正式編入へ（前書き）

更新しました。

ヤバイ……恐ろしいまでに評価を頂いて、お気に入りに入れてくださっている人もそろそろ千名に届きそう……

嬉しいけどプレッシャーが酷い事に！？テンションが上がってきた  
ああー！！

## 彼、正式編入へ

「それじゃ、貴方は私に仕えるのね？」

「ええ、最初からそのつもりでこの戦いに参加しましたから……。だから俺の部隊は大人しく投降をしたんでしょう？」

袁術軍との戦いは護の介入で大きく動き、孫策軍の勝利で終結した。袁術軍を蹴散らし、護の命令を受けた部隊は全ての戦闘を止め、そのまま孫策軍に投降を行なった。

「まあ、あの場で襲われなかったのは正直助かったが、貴様が袁術軍にいたのは紛れも無い事実。その事実がある限り、簡単にお前を軍に入れることは出来ない」

「それも理解してるのでこうして再度、縄で縛られているんですよ」

護は投降した兵とともに、縄で再び縛り上げられ、今は袁術が居なくなつた寿春城の玉座の間に座らせられ、将が集結している。

「まあ、袁術を捕まえられればそれを手柄に出来たんでしょうけど、逃げられてしまったので、これ以外に方法が見付からなかったんです」

「……良く言っわ……」

護の白々しい発言に、孫策は小さく口から漏らすと、周りの将が声を上げ始めた。

「でもおゝ、太史慈さんが来なかったら被害はもつと出てたんですから、そこを考えればあ……」

「そもそも被害が出る原因になったのは、その前にこの男と戦ったのが原因だ。やはり、このまま孫呉にと言っものは……」

反対意見と、賛成意見が半分ずつに別れている中で、孫策は一時も放さずに、護の事を見詰めていた。

「あ、あの、なにか？」

「なんでもないわ。ただ、袁術が何で逃げられちゃったのかわかってね……」

「さ、さあ？自分もすんなり入れるように手柄を求めていたんですが、見付からなかったんですよね」

「へえ……」

孫策は見ている。

彼が袁術を誰よりも早く発見した事も、最後に自分の隊の人間を使つて、誰にも気が付かない様に城外に連れ出したことも。

『あれは太史慈と袁術？』

孫策は物陰に隠れて、護と袁術の会話に耳を傾ける。

『君が袁術ちゃん？』

『だ、誰じゃお前は！？』

『俺は太史慈、それより張勳……』

『は、はい！困りましたね、捕まった怨み、とかってヤツでしょうか？出来ればお嬢様だけでも逃して……』

張勳の表情は引きつり、汗で凄い事になっているが今も逃げることを考えていた。

『君たちを如何こうするつもりは無いよ。約束は守る』

『や、約束ですか？』

まったく身に覚えのない張勳は首を傾げながら、周りに視線を向ける。

屈強な護の兵が固めていて逃げ場が見当たらない。

『忘れたか？ 君たちの逃げる時間ぐらいは稼いで見せる って俺は言ったぞ？』

『あ……あんな口からでた言葉を守る為に……？』

それは護が孫策と戦う前に張勳に向けて言った言葉、勝てるとは最初から思っていなかった護は時間だけでも稼ぐと言って城を後にし、

本当に時間稼ぎを全うしたのだ。

『君達が逃げられていないから時間稼ぎと逃げられる様にと言う約束は続いている、ここからは俺の隊が道先案内人だ。誰にも気が付かれない様に、ここから逃してやれる』

護の部隊の人間がそのまま袁術を囲み、城門に向って進んでいく。

『私も袁術ちゃんを殺すとか如何でも良かったけど……』

「え、ええと、そんなに見ていられると居心地が悪いんですけど…

…」

「ん、良いわ。うちに来なさい」

「なっ！？雪蓮！そんな勝手な事を！まだ信用が出来るか解らないというのに……！」

「そうです、姉さま！ましてやこの男は元董卓軍で、今まで袁術軍加わっていたんです！何時私たちを裏切るか！」

「私は彼の事を信頼出来ると思ってるわよ？それに元々、家に仕官させるのが目的だったんだし、もし心配なら暫らく私の私兵という形でも良いわ」

反対派の二人の怒声を受けても、何時も通りの自分で話を進め、それならばと反対派の人数も減り始めた。

「お前の近くにやるのが一番危険なのだ……！はあ……まったく、言い出したら聞かないな。仕方ない、優秀な将兵は何時だって必要だ。私にこの件に関してもう言う事は無い……」

「冥琳！？如何して！」

「蓮華様、良くお考え下さい。この男の力は蓮華様もご覧になった筈、上手く使うことが出来れば……」

「それは、そうだが……」

孫権の頭の中に出て来るのは、たったの一撃で城門を抉じ開けた太史慈の戦場での姿。

圧倒的な力への恐怖と、何処か憎めない男の表情を見て、溜息をこぼす。

「はあ、解りました。ですが暫らく此方から監視を置かせてもらいます」

「しょうがないわね。心配性なんだから」

「姉さまが軽率すぎるんです!」

「あ、でも優秀な人じゃなきゃダメよ?監視にならないから」

元々護は近くに誰かを置く事になっている。

それが誰かに変わるだけだと、護にとってあまり変わりはない。

「それと部隊の再編成が必要だな。太史慈の部隊の能力が高すぎて、部隊の連携に難が出てくる」



「それじゃ、俺はこれから……？」

「そ、これからよろしくね。……ところで貴方の真名は？」

自己紹介をしようと、勢い込んで立ち上がった護は、縄に気が付かず、強引に引きちぎってしまふ。

「「「はっ？」「」

「ほう、やはり意味が無かったか。まあ大人しくしていた方が無難なのは確かじゃったな」

現実離れした現象に、何人かは口を大きく空けて縄と護を交互に見る。

「そりゃそうよね。城門を吹っ飛ばすような人間に、縄で自由が奪えると考える方がどうかしてるわ。どうせなら鎖、いやそれでも心許ないか……」

護自身は仕官が成功した嬉しさのあまり、自分が何をやったのかを気が付かず、そのまま口上を述べた。

「性は太史、名は慈、字は子義。そして真名は護です！これより孫呉の御旗の下でお世話になります。この身命を賭しても主である孫策様を守り抜く所存です！よろしくおねがいます！」

こうして護は史実との違いはある物の孫呉の元に、加わったのであった。

## 彼、正式編入へ（後書き）

すみません。前書きでかなりはっちゃけてしまったw

今回は、護君の正式に編入されるまでの流れです。

次から呉の拠点フェイズっぽくそれぞれのキャラが書けたら良いな、  
と思っております。

彼、指導者として（前書き）

更新です。

ゲームをやり直して来たですよ。  
そこで気がついた、そろそろ大イベントだ！

## 彼、指導者として

「はああああー!」

「……………」

「ふう……………」

麗らかな日差しの中、目の前で行なわれている孫権と甘寧の稽古を二階でのんびりと見下ろしていた。

何故この場で稽古を見ているかは編入する日に言われた武官に出来る事は今は無い、というその一言で、ここ暫らく暇を持って余す事になってしまったからだ。

少しばかりならば、文官の真似事は出来るが、政が加わった事でそこに居るだけで邪魔者扱いされてしまった。

「闇雲に切り込めば言いという物ではありません、蓮華様」

「ええい、その余裕……………今日こそ崩して見せる!」

孫権はその言葉が言い終わるとそのまま切り込むが、またしても甘寧に捌かれていた。

だが見ていて孫権はどうも熱くなりすぎな気がしてならない。

堅守の王と言うイメージがあつた護にとってはその姿は年相応な少女の様に見えていた。

「権様ツ右足一步前っ！剣は左から振り抜いてッ！」

暇でしうがなかつた事と元来の面倒見のよさの為、つい稽古中に声をかけてしまった。

「えっ？」

声に反応するように一步前に出た孫権はそのまま左方に来ていた剣を言われるがままに振り抜いた。

「……ッ！？」

その一振りは甘寧を掠め、彼女に少しばかりの危機感を抱かせた。

「あ……、って貴様ッ！ここで何をやっているッ、確かお前には幾つも仕事があつたはずだろうー！」

「太史慈か……なるほど……」

厳しい言葉を投げってくる孫権と、護を一瞥すると理解したとばかりに甘寧は孫権の後ろに控えてしまった。

まだ信用を得ていないのでしょうがないだろうが、真名もまだ呼んで貰っていない。

「ええ、まあ。しかしその仕事を終わらせて、やる事が無くなったのでこうして稽古を拝見させていただいてましたと……」

二階から飛び降りて、その足で孫権たちに近付いていく。

朝から調練を行い、書類仕事をやってから他にも合った筈の仕事を終わらせてこの場にいる。

何気に戦いだけで無く色んな事に対しても優秀な護。

バカでは困るが、文官と遜色ない仕事をこなされては扱いに困ると、冥琳がぼやいていた。

「だからと言って、稽古中に声をかけてくるな。気が散る」

「ん〜、しかし、動きがアレだったので、つい声を……」

「なっ!?! だから稽古をしているんだ!」

護の口から出た言葉に、激しく反応して苛立ちを募らせていく孫権。何時もならば、この程度の言葉で激昂しないのだが、未だに護の事

を怪しんでいる孫権にとって同じ空間にいただけで、彼女の機嫌は悪くなつていく。

「ああ、失礼しました。動きがって言いますか、稽古の仕方があれだつたんですよ」

「なに……?」

「甘寧殿も優秀な将ですが、孫権様に教える人間としては不資格だと思えます」

その言葉を聞いて殺気立つ甘寧と孫権。

いきなり来た新参の人間に、そんな事を言われれば誰であっても怒りはするだろう。

しかもこの二人は長く一緒に稽古に励んできた関係で、今さらそんな事を言われても、納得できる筈が無い。

「ああ、すみません！別にお二人が合わないって言ってるわけでは無いですよ？戦場も何度かお目にかかりましたから、お二人の連携は完璧だと知っています。しかし、事武術の稽古となると……」

「なんだ？言ってみろ」



「孫権様の戦い方と、甘寧殿の戦い方では感覚が違うのです。甘寧殿は戦場で感じる直感で戦う方ですが、孫権様は理から来る堅実さで戦う方です。ですから、甘寧殿の戦い方を教えても、孫権様はこれ以上の武の進歩は恵まれないと思います」

戦うタイプはこの二つに大まかに分類される。  
野性的とも言える直感に優れた人種と、堅実な方法で手堅く攻める人種。

「策様が甘寧殿の戦い方に近いですが、孫権様の戦い方に近く、それでいて人に教えることが出来る人間と言つと……」

護は呉軍で戦う面子を頭に思い浮かべた。

祭さんが真つ先に出てきたが、真面目に教えるとなると頭を傾げざる負えない。

他となると、経験が不足し、人に教える時まで行かない気がするのだ。

「ふん、それならば貴様が私に指導すると言つのか？」

「蓮華様ツ!？」

「え？俺が教えちゃって良いんですか？」

孫権は冗談のつもりで言ったのだろうが、護は嬉々とした表情でその申し出を了承した。  
今さら取下げられるのも気まずく思った孫権はそのまま稽古を受ける事になった。

「貴様ツ、私をバカにしているのかッ！何だその装備は！ただの扇ではないか！」

護は稽古と言って取り出したのは何の変哲も無い扇。  
暗器であると言うのなら解るが、通りがかった女官から借り受けた物でその場に立てば、武器であるなど考えなくても解ると言う物だ。

「扇を馬鹿にしていけませんよ。これでも一応、扇での武術はあるんですから」

「……ならばいくぞっ！ハア

」

納得してはいなさそうであるが、気を取り直し手に持つ剣に力を込め裂帛の気合と共に

「はい、その一歩目からダメです」

止められた。

最初の切り込みまで行く事無く止められ孫権だけでなく甘寧すら呆然とした。

「良いですか？権様は力み過ぎです。それではどうやって攻撃するのかを相手に教えている様な物、ですから先ずは……」

「ちょ、ちょっと待ってッ！？まさか一つ一つの動きを全て直していく気なのか？」

「は？まさか、それでは今までやってきた稽古が全てふいになっってしまうじゃないですか。俺がやるのは精々矯正と言った所です。粗を削れば、早々不覚を取る事無い筈です」

甘寧の慌てたような声に、護はさも当たり前のように答えていく。その教え方は堂に入っており、元となっている型を崩す事無く、不完全だと思われる箇所を正確に矯正していく。

「権様は王と為られる方ですから、敵を倒す事よりも守る事を考えてください。そう言った戦い方のほうが合ってますよ。少し直せば、恐らく甘寧殿が本気で相手になっても、守勢に回れば少しならば持つでしょう」

護の指導を受けながら、孫権は未だに納得していないが、外から見ていた甘寧はその驚くべき指導力に舌を巻いていた。

「これが、大陸最強と言われる部隊の強さの秘密という事か……」

その後丁寧を守る戦い方を教えていた護だが、それを一刻ほどこなした後その日はお開きとなった。

蓮華との訓練から数日、最近怠っていた自身の修練に力を注いでいた護に、雪蓮が近付いてきた。

「ねえねえ護、蓮華とは上手くやってる?」

雪蓮は木の上で酒を煽りながら、下で瞑想をしている護に声をかけた。

「まあ……それなりに。それより策様、早朝からなに酒など煽っているんですか!?これから政務が御ありでしょう!?!」

「ん〜、まだ堅いわね?雪蓮で良いって言うてるでしょ?」

護の注意など何処吹く風とばかりに、尚も煽りながら話が変わってしまった。

「気が向いたら呼びますよ。それよりも酒を

「

「居た。護ッ!」

「あれ？権様じゃ無いですか、どうしたんですか？」

雪蓮と話していると、そこに駆け足で近寄ってきたのは蓮華だった。

「どうしたじゃないでしょう。朝稽古に時間になっても来ないから、迷子になっているんだと思って探しにきたのよ」

「あ、もうそんな時間でしたか。甘寧殿も探しに……？」

「ええ、呼べばすぐに来るでしょうけど、急ぎましよう」

「ああ、ちょっと！？そ、それでは、また！」

護の手を引きながら進んでいく蓮華はどうやら雪蓮の事に気が付いていないようだった。

「貴方が来れなかった昨日のだけど、思春から腕を上げたと褒められたのよ」

「そ、それは良かったですね」

木の上から、そんなやり取りを見ていた雪蓮は一言言葉を漏らした。

「何だ、全然上手くやれてるじゃない」

彼、指導者として（後書き）

どうでしたでしょうか？

一応拠点っぽく……できてませんね。すみませんw

ご指摘感想なんでも待ってます！



番外：彼、知らぬ所で（前書き）

今回はふつと出た思い付きをパパッと書いたら一話分になったので上げてみる！ツて感じの内容です。

## 番外：彼、知らぬ所で

「……ふむ、やはりこの配置か」

冥琳は自分の執務室で太史慈隊の編入に伴った部隊編成について頭を悩ませ、ようやく納得できる物が出来た。

「赤はそのままだけど、これは……。冥ねえさん、大体は大丈夫だと思っけど、この四人は俺としては無理だと思うな……」

文官として、その才能を余す所無く使い、冥琳の補佐の立場にまで選出されていた政は竹簡を持って苦言を呈していた。

彼が指を指したのは、太史慈隊でも古株であり、今は連者と言ったほうが理解する者が多い四人だ。

元々太史慈隊とは一つの部隊ではなく、太史慈を頂点に置きながら、彼ら五人を中心とし、役割を与えられた小さな軍と言ったほうが良いような集団なのだ。

「……何故だか聞いても良いか？」

それならば、益々細かく軍内部できつちりと分けたほうが良いのだろうか、政の仕事振りには信頼を置き始めていた冥琳は彼の話の聞く姿勢をとった。

元々、実質的に太史慈隊の部隊を運営していたのは政であったし、

聞いても損は無いと言う判断だろう。

「この五人が一番兄貴を心酔してる。言う事を聞かないって事は無いだろうけど、こいつ等の土気の問題だな……。後、こいつ等の所属先の将も耐えられるか……。いや、実際やってみないと解らないか。ゴメン、気にしないで良いよ、冥ねえさん」

最後の耐えられるか、と言う言葉は気になるが、多少の土気だけならば問題ないだろうと、冥琳はこの配属を決定し、彼らの移動が始まった。

「はい、次はこの竹簡です。それが終わるまでこの本はお預けさせていただきます」

「そんなあゝ、一冊ぐらい大丈夫ですよ、だから……」

青が配属されたのは穩の部隊。  
知識面で他の部隊の人間より明るい為の配属だが、穩にとってはと  
ばっちりも良いところである。

「解りました。ではどうぞ……」

「わあ、ありがとうございます。……ふむふむ……」

「終了です」

「あああ！？まだ最初の一枚だけなのに……」

「それだけ読めば十分です。それでは続きを。これが終わればまた一枚です」

青の宣言に穩はこの世の絶望でも見たような顔をして叫んだ。

「ふええ〜、冥琳様ああ〜」

「ま、またお前か！？ワシは今酒を……」

「そんな事よりも訓練っすよ、黄蓋様」

その戦闘能力を見込まれ、黄蓋隊に配属されたのは黄は何時ものように訓練をやるために、祭を探していた。  
何時もは護が本人が願ひ出る間も無く相手をし、足腰が立たなくなるまでやり合うのだが、違う部隊に配属され、護がいないので黄はそのままの役目を祭がするだろうと祭を見つけ出し、無理やり引っ張って行く。

「ええい、ワシは今仕事では無い！放せ！」

「ぐえッ！？」

良いのが一発入ったが、気にする事無く祭はその場から去ろうとする。

「黄蓋様あゝ、待って下さいよお」

「なっ!?!お前今……」

「あれくらいなら慣れてますんで。それよりも訓練を……」

「だからワシはまだ休みじゃと言っておるじゃろっが!」

先程は手を抜いてしまったか、と思い今度はあまり手加減をせずに殴った。

それを避ける事が出来ずに黄はそのまま腹を抱えて蹲りそうに為った次の瞬間。

「はあゝ、黄蓋様って素手でもかなり強いんすねえ」

「ひいつ!?!」

殴っても殴っても効いていないかのように立ち上がる黄を不気味に  
思い可愛らしい悲鳴を上げた。

それもそのはず、太史慈隊の中でも黄が最も耐久力があり、護の制  
拳を受けても一発では倒れないのだ。

耐久力だけでは一介の将にも勝てないので部隊員止まりであるが、  
とにかく耐えまくるのだ。

「黄蓋様あ、訓練……」

「こ、公謹ツ〜!?!」

あまりの異常さについて助けを呼んでいた。

「はう～～、御ネコ様あ～」

「こんなのどうっすか？」

「俺たちの新作ツス」

「ここは周泰隊。

工作などを得意とする桃と緑は仕事を担当する事が多い、明命の部隊に配属されていた。

そこでは何時もならば真面目に仕事に従事している筈の明命がだらしのない顔をして猫の動く人形に夢中であつた。

「あ～～～～、遊ぶのは後にして仕事を……」

明命に似たのか、真面目に仕事をしようとする注意してきた隊員に桃と緑は堂々と宣言した。

「これは遊びじゃない！」

「そうツ！俺たち作業員は手先が器用でなくては勤まらない。だからこうして日々手先を動かし鈍らない様にしてるのだ……あ、これもあるんすけど」

「はう～～ツ！新しい御ネコ様がああ」



「名づけて、招きネコイコイだ！」

どのようにして作ったのか、手が何かを招く様に動いていた。

「ダメだこいつ等、早く何とかしねえと……」

その壊れた隊長である明命とそれを成し遂げ、今も尚壊し続ける隊員を見て、古参の工作員たちは溜息を漏らした。

「……穩が部下の苛めに耐えられなくなり、黄蓋殿が部下の異常さに恐れをなし、明命は仕事に為らず、か……」

「やっぱりそうだったか。将のほうが無敵だと思っただけで、耐えたほうだと思っよ……」

数日前に移動をしたばかりな筈が、既に彼ら四人が配属された場所から苦情が上ってきた。

最初二つは我慢させる手もあるが、最後の仕事に為らないというのは酷い物だろう。

「あいつ等、兄貴と一緒にいる様になって、異常性が増したからな……」

「はぁ……、一つの部隊に戦力が集中するのは避けたかったが、これは仕方がないか……」

「すみません。俺の隊の人間が」

「お前が気にするな。それよりこの件を……」

「ああ、俺やっときます」

「助かる。……ふう、身内に居ても敵に居ても大変な奴だ」

冥琳は庭で孫権に稽古をつけている護を見てうっすらと笑みを浮かべた。

考えてみれば、これだけ騒々しいのも懐かしいものだ。  
昔の事に思いを馳せ、気分転換をし、また書類に向って仕事を始めるのだった。

番外：彼、知らぬ所で（後書き）

どうでしたでしょうか？

これはこれで正しい反応だと思ったのですが。  
特に明命辺りがw w

## 彼、部隊の訓練の実態（前書き）

更新です。

そろそろ孫策曹操の戦いを書きたくてもしょうがない。  
でも、まだ書けてない人たちが多数いる……三十話を目安に書いて  
いこうと思います。

## 彼、部隊の訓練の実態

「ふむ……、青、そっちの竹簡を……」

「これですね、はいどうぞ」

ここは護の執務室。

今も自分の書類を片付けており、その補佐に青が付いていた。何時も通りの昼下がり、もうすぐ仕事片付こうとした時に、それは起こった。

「護ッ！」

「ん？どうしました、祭さん」

慌てた様子で扉をこじ開けてきたのは祭であった。

「ちょっと手を貸せッ！」

「え？もう少し待ってくれませんか？仕事ももう少しで……」

「えええい！問答無用ッ！」

祭はそのまま護を掴むと、外に飛び出していった。

護が訳も分からず引き摺られていく様を青は笑顔で見送っていた。

「さて、護様の仕事を片付けて置く事にしようか。仕事は出来る方なのだが、毎回誰かに拉致られてどこかに行ってしまうから仕事が終わらない。でも楽しいから良いですが……手の掛からない人は楽しくありませんからね」

「はあ………」  
「うう言う事ですか」

街の中央広場まで来ると、何時もとは違いまるで祭りの日のような人だかりが出来ていた。

そこを遠めで確認すると、雪蓮と老夫婦、さらに老夫婦を人質に取った山賊のような男達がいた。

「ああ、ワシも詳しくは知らんが、何処かの残党が街中に潜んでいたのを策殿が見つけたらしくての」

「要するに、捕まるならばとヤケクソか……」

この街中で人質を取った所で、逃げられる訳が無い。  
要点は、どの様に人質を無事に助け出せるかに掛かっている様だ。

「お前達は、この状況で人質を取ってどうするつもりだ」

対面していた雪蓮は人質を取られている事などお構い無しに、堂々とした声で語りかけていた。

「ど、如何って……」

「まさか人殺しをしたい訳ではないでしょう？」

「うっ……いい、良いのか？そんな口を利いて。俺達にやあ人質がいるんだぜ？こっつしてちよつと動かせば……」



「ひいつ!？」

雪蓮を脅すように手の中にいる人質に剣を当てる男たち。

それに小さな悲鳴を上げる人質、しかし雪蓮は全く表情を変える事無くまた声をかけた。

「でも殺しちゃったら、貴方たちの大事な人質が居なくなっちゃうわよ?意味無くない?そのまま放したら命だけは助けてあげる、どう?」

挑発にも聞こえる交渉だ。

正しいとは言えないが、間違っているとも言いがたい。  
その交渉に山賊たちは揺れ動いている。

「しょうがないな策様は……」

「お、おい、何処に……」

「あれを何とかしてきます」

しかし、見ていると解るのだが、雪蓮は非常に気が立っている。このままでは交渉したにも拘らずやってしまうのではないだろうか、そう考えた護は、なおも話し続ける雪蓮と山賊達を後目に、行動を

開始した。

「ちょっと失礼するよ」

雪蓮と男たちが対峙する反対側から声をかける。

「な、なんだお前は!？」

「軍関係の人間だ。一応その孫伯符の配下の者だ」

「ちょっと、一応って何よ、一応って」

「策様、余り細かい事を気にしないで……」

一瞬で緊張感が抜けた現場。

だがまだ人質を助ける隙を作れていない。

「そ、その配下が、何の様だ!ちょっとでも動いてみる!こいつ等殺すぞ!」

「まあ、落ち着け。お前たちに仕事を持ってきた」

「はっ？」

男達だけでなく、雪蓮すら呆れた顔をしていた。

それもそうだ、いきなり現れ、仕事をやるといえば意味が解らないのも頷ける。

「お前たちがこんな事をするのは、生きたいからだ。だが生きるためには金がいるのは必然。仕事があれば、こんな事はしなくても良いだろう？まあ、暫らくは罪を償う為に金は無いが、食事は俺が保障するぞ？」

それは山賊たちにとっては夢のような話ではなからうか。

山賊の多くは元は農民であったりする事が多く、幾ら統治が良くなってきたからと言って、彼らのような人間が減る事は無い。

生計を立てられなくなった彼らは、食べる物と仕事が無いから奪い、殺す。一度やったらもう戻れないその道に、戻る為の道が強引に作られたのだ。

「そ、それは……」

男たちに動揺が走る。

ここで暴れても未来が無いのは彼らとて理解は出来ているらしい。

「わ、わか  
」

「礼を言っぞ、護。ハアアアアッ!!」

本当に僅かな隙、そこを正しく突く事が出来た雪蓮は彼らに肉薄し、剣を走らせる。

一般兵にも劣りそうな彼らには、雪蓮の剣を止めることなど出来ず、そのまま行けば何も考える事無く斬られるだろう。

「チッ！俺の話の途中だろうに！」

護は、雪蓮が動くと同時に動き出し、孫策の剣を足を使い地に叩きつけ、残った両の手で山賊達を昏睡させていく。

流石に折るといふ事はしないが、地面に深々と突き刺さった剣は容易には抜ける事は無い。

抜けない事を確認した護は、残っていた山賊を残らず、叩きのめしていく。

「何故邪魔をするの!!」

「策様こそ邪魔をしないで下さいよ。俺が約束をしていたじゃ無いですか？」

「え！？あれ本気で言ったの!？」

「当たり前です。俺は無闇な殺生は好かんのですよ」

「ホント……甘い……」

「それを知った上で、俺はここに居させて貰っていると思っただけですが？」

護の発言に、一瞬呆気に取られた雪蓮であったが、すぐにその顔は笑顔になった。

「ふふふっ、良いわこいつらは任せる。でも、ウチにはこんな奴らに払う碌は無いわよ?」

「それも解ってますよ。暫らくは俺の私兵として家で世話をしながら、訓練漬けです」

その後、祭の部下たちが山賊を纏めて縛り上げ、連れて行った。それを追う様に一言雪蓮に声をかけると護もその場から離れていく。

「そうだった。私は、あの甘さに助けられたんだっけ……」

一度目の戦いの見逃し、二度目の戦場での手加減、三度目の援軍。今こうして、彼がこの軍にいるのも、どれも彼の甘い思想に感じる所があつて自分が招いた結果だ。

「飽きない人ね。本当に……」

護に引き取られた元山賊たちのその後は……

「「「「ヒギヤアアアツ!? もう殺してくれええええっ!!」」」」  
「」

「オラオラッ! 走れや! 新入り!!」

「あと少し速度が落ちればさらに追加で訓練を……」

「いやいや、新兵器の実験台に……」

一般の兵士たちがこなす物よりも、さらに過酷な訓練を平然とこなす護の隊の五人が作った自分たちでもきつい物を全力でやらせていた。

馬の上で槍を持ちながら、追い回す赤に、それを遠くで見ながら、続きの訓練の構成を練る青と緑。

「『死ぬ！？これ死ぬってええっ！？』」

訓練を受けた彼ら曰く「あの時殺されたほうが良かった……」らしい。

**彼、部隊の訓練の実態（後書き）**

如何でしたでしょうか？

サブタイを考えるのに、最近一番時間が掛かるWWW



彼、北郷を知る（前書き）

更新ですよ。

今回はこう言つサブタイトルですが、一刀君が出てくるわけではないですW

## 彼、北郷を知る

「ねえ、そんな所に居ないで、こっちで話でもしない？」

「いえ、仕事中ですから……」

自分の仕事を終わらせた護は街をのんびりと歩いてた。

その後ろを隠れるように着いて来る明命であるが、その姿は周りには見られず、町民から見れば護が独り言を離しているように見えることだろう。

「その仕事って、俺の監視って言うあれだよ？人が代わる代わるだったからそうかかって思ったんだけど……」

「ああ、やはり護さんには、ばれていたんですね」

「まあ、蓮華様がああ言ってたんだから、少なくとも数ヶ月は覚悟してるよ」

蓮華とはある程度距離が縮んだと自覚はあるが、それだけで一度出した命令が撤回されるわけではない。

護としては、自分が何処に行くか解らないので、迷った時は逆に後をつけて助かっていたりする。

「……ッと、忘れてたよ。これ、桃と緑が」

「お猫様ッ!」

(今動きが見えなっただぞ……)

懐から出したのは、緑と桃が明命の依頼で作ったらしい猫の人形。それを見るや否や、先程の言葉が嘘のように、一瞬で目の前に現れた。

「お猫様あゝ!」

かなり砕けた顔をして頬擦りをしながら、抱きしめている。

「そこまで喜んでくれると、きつと二人も嬉しいだろうな」

「……はッ!?!、いや、これはあれでそれで……!」

「ほら、慌てない慌てない。深呼吸しようか?」

「は、はい！すう～～～～、はあ～～～～」

「落ち着いた？」

「はい！おちちゆきました！」

「はははッ！噛むくらい落ち着いたのなら良かった、少しお話しよ  
うか？」

結果が良ければ全てよし。

この状況を作った二人に感謝しながら、会話を楽しむ事にした。

「あ、そうだ。二人が言ってたんだけど、コイツここを回すと、鳴  
き声を出すらしいよ？」

幾つか昔話などで会話を楽しんでた時、護が思い出したかのよう  
に言い出した。  
恐らく中に何かを詰めて、動くとそれが鳴り出す仕組みなのだろう。  
明命は嬉々として背中にある螺旋を回しだした。  
すると……

《ニヨオオホオオ～～～～……》

「……………」

「……………」

二人の心の中で「どうやって作ったの!？」と同調していただろう。

「でも、この声もこれはこれで……………」

「そうかな……………」

暫らく二人で会話をしていたのだが、明命が周りを見渡し始め、そわそわと落ち着きがなくなってきた。

「どうしたの?」

「この辺りは、お猫様が集まる溜まり場だったのですが、今日はまだ一匹も見えていないと思ひまして……………」

明命の言葉を聞いて護は頭を掻いて気まずそうに苦笑いを浮かべた。

「ああ……、多分、それは俺がここに居るからだ」

「え？何故ですか？」

「ん……、俺はどうやら動物に嫌われる体質らしいんだ」

動物とは潜在的に強者に怯えるものだ。護と言う、人間から逸脱した力を持つ者に怯えて、どんな動物もある程度の力が無いと近寄る事すらしてこない。

それで今まで困った事と言えば、護が乗ると馬が怯えてしまい、動かなくなってしまった時くらいだろうか。

今は規格外の馬が護を乗せているので、問題は無いが、それ以外ならば恐らく走る事すら叶わず、足で戦場を行き来す事になるだろう。

「それは、可哀想です……」

「可愛い、そう？……初めて言われたな、そんな事」

「だって、それではお猫様の素晴らしさが解らないじゃ無いですか！？悲しいです……」

猫基準なのは相変わらずだが、とても真剣な顔で話してきた。

護としては、それほど困っていないが、寂しいと言つのは事実だ。

「……そうだね。でも、今はこれで我慢しておくよ」

「あうあう……」

「……しかし、これは良いな……」

寂しさを誤魔化す様に、明命の髪を梳く。  
だが以外にも、その黒い長髪は手に馴染み、触り心地が良く暫らくそのまま撫で続けていた。

「そうだ、話は変わるんだが……」

「あ………なんででしょう?」

「うん、曹魏にある十文字の旗。あれって、天の御使いって名乗ってる奴だろう?名前を知らないんだけど、明命は知ってるかい?」

以前から気にはなっていた十文字の旗印。

董卓軍の後は騒ぎが収まるまで静かに暮らし、その後すぐに袁術軍に捕まるといった事が続き、最近までまとも情報を得る機会が無か

った。

「そんな事ですか。えええとですね、光に反射する服を着て、天の御使いを名乗って魏に在籍し、警備隊の隊長についてる筈です。名前は北郷一刀、魏の」

「ちょ、ちょっと待って！？その名前に間違いは無いの？」

「は、はい。珍しい名前なので、恐らく間違いはないと……」

光に反射と言うと、恐らく生地ポリエステルなどを使っているのだろう。

この時代ではあり得ない物だから、天の使いと噂されると言うのも頷ける。

護が以前推察した内の一つが当たった事に為るが、その推察だけは当たって欲しくは無かった。

「運が良かったんだな……」

自分と同じ転生などであれば、この世界に順応も出来るが、いきなり連れて来られて苦労したのは間違いない。あるのは天の御使いと言う噂のような不確かな物。

最悪山賊に身包み剥がされ、殺されていただろう。

だが、向こうの知識を此方で転用できるだけの柔軟な思考を持って



いるのだろう。

曹操と言う人物は、物珍しさだけでは重用しない筈なのだから。

「魏領内では非常に人気が高く、天の御使いと言うのと合わさって民衆受けしています。……えと、それですね、その方には二つ名まで付いていて、魏の種馬と言って……」

「ぶふううっ!?!」

苦勞したのだろうと、心の中で同情していたのだが、その二つ名を聞いた途端そんな気持ちは吹き飛んだ。

「何をやっとするんだ……」

非常にあれな二つ名だが、民からの受けが良いというのを考えて、強引というのは考えられないだろう。

それに、唯の学生だった人間に、この世界の将を押し倒せるとも思わない。

「……それなりに巧くやっていると言う事か。会う事が叶えば、久しぶりに、向こうの事を聞いてみたいものだな……」

昔を懐かしみ、護は魏に住まう同郷の者といつか会える日を楽しみ

にするのだった。

彼、北郷を知る（後書き）

うん、やはり一刀君は種馬だ。

魏の種馬、原作でも出てきた素晴らしい呼び名WW

個人的にはち〇こ太守と言っ呼び名も嫌いじゃないW

それではまた次回！

彼、テンパリながら決意する（前書き）

更新です。

ホントすみません……サブタイが思いつかないからこんななっち  
やった。

彼、テンパリながら決意する

「まあ〜もお〜るッ!!」

「ツとと、これは小蓮様。今日はどうされました？」

「見つけたから、呼んだだけっ！」

無邪気に笑いながら、背中に飛び乗ってきた小蓮。

何が気に入ったのか解らないが、毎回会う度にこのような事がある。

「それはそれで良いですが、訓練と勉強の方はどうしました？確か今日も勉強の筈ですが……」

「もっツ！護まで冥琳みたいな事言わないでよ！ほら、そんな事よ  
り、シャオと一緒に街に行きましょう！」

「しょうがないですね。でも少ししたらまた勉強の方に戻ってもら  
いますよ？」

「ブーブーツ！」

そのまま小蓮は護の肩に跨り、肩車の状態を維持していた。護も既に慣れた物なのか、そんな事は気にせず、街に下って行く。

「ねえー、あれあれ！カワイくない？シャオあれ欲しい！」

「ああ、はいはい。あまり高いのは無理だけど、あれ位なら何とかできるかな？」

まるで妹が出来たようで、護は自然と小蓮に甘く接してしまう。今言われた欲しい物も、かなり高いが、見栄でも何でもなく買ってしまうのだからさらに酷い。

「ねえ、護はさ〜……」

「ん？今度はなんですか？」

買い物を暫らく二人で堪能し、そろそろ戻らなければならない時間が迫ってきた。

小蓮は護の肩に乗ったまま、足をゆらりと揺らしながら、静かに聞いた。

「雪蓮姉さまと蓮華姉さまどっちが好きなの？」

「ぶっ！？だ、誰がそんな……！？」

「え？違うの？」

「全く違います。そもそも、どちらも自分の事は一武官程度にしか思っていないでしょう？まったく小蓮様はませているんですから……」

女性との付き合いなど、今まで皆無な護はその関連の話にまるで疎く、戦事であれば、正しく自分の力を理解できているが、その関連の自分の事を過小評価する。

「ふう~~~~ん……」

頭の上に居るので、護には解らないが、小蓮の顔は小悪魔的な笑みを浮かべなにやら思考しているようだった。

「それじゃ、シャオが護のお嫁さんになってあげるね」

「だ、だからそう言う冗談は……、小蓮様、もうすぐ城ですよ？帰ったら勉強、してくださいね？……小蓮様？」

返事が返って来なかったの、上の様子を見ようと見上げる。

「ん~~~~」

すると、目の前に小蓮の顔がアップで映り、額に柔らかい感触が伝わった。

その感触が何なのかを理解すると、護の顔は段々と赤みを差していき、最後には蝟の様に真っ赤になっていた。

「照れてる。やあん、可愛いっ！戦場でも凛々しくて素敵だけど、こつ言っ顔は可愛くて好き」

からかわれていると感じながらも、護は海水魚の様に口を空けたり閉じたりするだけだった。

「今日だけで、色んな護を知れちゃった！それじゃ、またねえーっ！」

言うだけ言うと、そのまま駆け足で城の中まで戻っていった。

「ふう……なんだろう。今の一瞬でドツと疲れた……」



自分用に買った荷物を持ちながら、護もまた自分の執務室に戻っていった。

小蓮とのプチデートを終えて帰ってきた護は、荷物も片付けず、自分の仕事に取り掛かった。しかし、それも元から溜っている訳でもなく、すぐに片付いてしまった。

やる事も終わってしまった護は、外の空気を吸いに城の中庭に出て行く。

暫らく歩き、庭の端にある休憩所で一休みしようと赴くと、そこには既に先客がいた。

「あれ？策様は兎も角、冥琳さんは珍しいですね。昼間から飲んでるなんて……」

「なによッ、私は兎も角ってどういう事ー！それと雪蓮って呼んで  
つてば！」

「まあ、飲んでいると言うより、付き合わされていると言ったほうが  
良いが……。お前も如何だ？」

雪蓮の小さな非難の声を聞きながら、その席をこゝ一緒する事になっ  
た。

「で、これは何の祝杯ですか？」

「決まってるでしょ？ようやく独立できたお祝いのお酒よ！今まで  
色々有ってできなかったからねえ」

言いながらお酒を口の中に流し込む雪蓮は既に顔を真っ赤にしてい  
た。

「ああ、そっか。俺の部隊の編入とか、領地の統轄とかごたごたが  
有ったもんな」

既にその辺は片付き落ち着いた政を行なえているが、羽目を外すよ  
うな時間は中々できなかった。

今その反動が来ているのか、上機嫌な雪蓮と冥琳とお酒を飲む事となった。

「……………」

先程まで明るく呑んでいた雪蓮の顔に不意に影が差し込んだ気がした。

「……………雪蓮？」

「ん？どうしたの冥琳。可笑しな顔して」

「どうしたもなにも、可笑しかったのは雪蓮だぞ？」

「ああ、違うのよ。ちょっと、考え事してただけ……。お母様、褒めてくれるかなって……………」

「文台様が？」

「それは、策様の母上の……………？」

文台、確かそれは雪蓮達の母親だった筈。

孫文台。既に亡くなられているが、その逸話は数々残っており、江東の虎と呼ばれ恐れられていたほどの名将だ。

「そつ、独立を勝ち取ったんだから、幾ら厳しいお母様でも『良くやったわね』ってそろそろ認めてくださるわよね？」

「文台様とはどういった方だったのですか？そこまで厳しい方だったのですか？」

護の質問に、雪蓮懐かしむように即答する。

「あのねえ、厳しいなんてもんじゃないんだから！もう、鬼よ鬼！戦の鬼！」

口では嫌っている様に自分で言っているが、彼女の口から出てくるのは、仲のよい親子そのもので、声も何時もと比べ、張りがある気さへするほどだ。

そこに冥琳も昔話に加わり、二人が共に今まで護に見せた物とは違う、明るい物を持っていた。

「なるほど。策様はお母上の事を大変好いておられたのですね？」

「もおおッ、ちゃんと聞いてた？どうしたらそう言う答えになるのよー！」

「護は正確に理解していると思うが……」

その後も文台さまの話は続き、どの様に育てられてか、またどのような場所に行ったか等事細かに語っていた。

「でもねえ、戦場で育てられた私だけど、蝶よ花よで育てられても良かったかなーっ、なんて偶に思っちゃうのよね……」

「……どうした雪蓮。らしくない事を言うな」

戦場で生き生きしている姿を見れば、冥琳の言った一言は誰もが抱く違和感だろう。

本人も本気で言ってる訳ではなく、そうだったらと言う仮定の話をしていた。

まして、自分にはそれは似合わないと自分で苦笑いを漏らしていた。

「似合うと思うんですが……素敵な女性なのですし、家庭的な策様も見てみたいと……」

「ほう……」

「ちょ、ちよつとっ！冗談なんだからそんなに真面目に答ええないでよ！？は、恥ずかしいじゃない！」

「え？……あつ！？いや、別にそう言う訳じゃ！？無いと言う訳でもないですけど！えつと！？」

護は盛大にパニックに陥りながら、それを笑っている二人を見て、心の中で強く思った。

『この方はどんな事をしても助けなければ』と……

## 彼、テンパリながら決意する（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回で全部で三十話。以前書いた通り、次で曹操軍との話を書こうかなと思います。

「まだ俺の嫁書いてねえじゃんっ!!」とか言う人がいたらコメくれば、書こうかなWW

そしてまだまだ先の事ですが、深刻な問題が二つほど……

美羽様達のその後を書こうと思ったのですが、話を面白く書こうとするとうちやっても護の田舎に辿り着き居つくと言うルートになり、パクリになるorz

そしてもう一つはこの話の完結のさせ方なんです、どうしたら良いか解らないWW

最も簡単で、誰も脱落者のいない形にすると、蜀ルートの最後にあつた五胡の襲撃が一番ですが、それも既と同じ方が使われた物。

元々この作品はその作品と類似点が多く、それをやってしまうと、不愉快に思われる方も多いでしょう。

美羽さまは書かなければ良いのですが、終わらせ方が他に思いつかない。

魏ルートの終わらせ方だと、華琳が勝利して護君が居る意味がないし、呉の終わらせ方だと、そもそも華琳様が大陸に残らない……

全く新しい終わらせ方など思いつかないこの駄作者にお知恵を！！



彼、主の為に……（前書き）

更新です。

記念すべき三十話！しかし、今回の話はあれです。  
賛否両論であるのではと……

彼、主の為に……

「華琳さま、出陣準備整いました」

「ご苦労様、それでは一刻後に出陣しましょう」

魏の国内にて、出陣準備が開始されていた。

その目的地は呉。

揚州一帯を瞬く間に制圧した孫策を危険視した曹操は、今、真つ向から打ち破ろうとしていた。

「ふふふつ、英雄孫策に武神とまで言われるまでになった太史慈。まさか一刀の言う通り、あそこに流れるとは思わなかったけれど、こうして相對するのは楽しみね」

「ん？もう出発か？華琳」

玉座で独りになっていた曹操に白い服を着た少年が声をかけていた。

「あら、一刀。遅かったじゃない、もうすぐ出陣するわよ。兵のほうは大丈夫なの？」

「ん〜……、それなんだよなあ。この間入ったばかりの人たちが居るんだけど、その人たち柄が悪いって言うか、その人たちは置いていきたいんだけど……」

「一刀と呼ばれた少年は天の御遣いとして、魏に籍を置きある部隊の隊長として従事していた。」

「ダメね。今から始まる呉との戦いに遊ばせて置ける人間はいないわ。それに、この戦いを超えることが出来れば、良い兵になれるでしょう」

「そうだよなあ……解った。部隊の編成とかは稟に任せてきちゃおうよ」

「よろしく」

「知らず知らずに、口元に笑みが浮かんでくる。」

「これまで戦ってきた相手とは違い、この戦いこそが曹操が本当に待ち望んでいた英雄と英雄の戦いだろう。兵の士気も高く、最高の状態だ。」

「さあ、孫策。お互いの死力を尽くしての戦いをしましょう」

曹魏が動く。

一つの不安材料を抱えながら……

「嵐の前の静けさじゃないと良いが……」

城壁に立ちながら目の前に広がる平原を前に、護はゆっくりと腰を降ろした。

呉に入ってからそれなりの時間が過ぎ、揚州全土を制圧するに至った。

制圧と言っても、戦闘らしいもの等数えるほどしか起きず、武官としては少し不満ではあるが、平和である事なのは良いことである。

「あ、こんなところにいた。探しちゃったじゃない」

「これは策様、俺に何かようでしたか？」

「最近、仕事ばかりやらされて、運動してないから相手してもらおうと思ってるね」

「……そう言えば、冥琳さんに捕まってましたね」

制圧する地域が広くなるとそれだけ、王は忙しくなる。

当たり前的事だが、その所為で雪蓮はこの所机仕事ばかりであった。

「解りました。そういう事ならお相手しましょう」

「さすが、呉軍最強の矛！そう来なくちゃねっ！」

二人で訓練場に移動し、まるで約束組み手のように拳と剣を合わせ  
ていく。

周りに居る兵すら見惚れるほど、美しい戦いが行なわれていた。

人の限界に挑戦するかのように、集中力が切れるまで、長く熱く激  
しく、二人は笑い戦った。

「はあ、はあ、はあ、もう無理ね」

「そのようですね」

息を切らせながら、その場に座る雪蓮と少量の汗を拭き立ったままの護。

「……ねえ護、今日は暇？」

「何も無いからあそこにいたんですよ。何処であろうとお供します」  
「よ」

「そう、良かった。一緒に来て欲しい所があるの……」

孫策に連れられるままに城を抜け出し、ある川の辺に辿り着いた。そこには石で作られた墓地があり、荒らされている訳ではないが、この辺りには人が来ることが稀な為か、汚れが溜っているようだった。

「じじは……」

「じじにね、お母様が眠ってるの……」

「じゃあじじは、文台様の……」

雪蓮は護に答えず、手に持っていた布で墓石を拭き始めた。護も川から水を汲み、黙々とその手伝いを始めた。

「こんなところかしらね？……やっと綺麗に出来たわ」

すっかり綺麗になった墓を満足げに見る二人。

「ここに来たからには、挨拶しなければいけませんね」

そして護は徐に手につけていた武具を外した。

「あら、外すの？……そう言えば、外してる所始めてみるわね」

仕事の途中であつても睡眠を取るなど以外、けして外す事のなかつた護の武具。  
習慣なのか、護にとって、それは眼鏡などと一緒で身に着けるたしなみの様なものになっていた。

「さすがに、ここで着けながら挨拶をするのは、無礼でしょう」

そのまま墓の前に片膝を付き、臣下の礼を取りながら名乗りを上げた。

「私の名は姓は太史、名は慈、字は子義と言います。孫策様とのご縁があり、今こうして孫呉にお仕えしております」

目の前に本当にその人間が居るかのように、真面目に、真剣に語る。

「貴方が築いた呉の大地は、策様の手で取り戻し、その大きさを広めています。私はまだ新参ですが、策様はこの身を削る事に為らうとも、全力でお守りいたします。我が真名に懸けて誓いましょう」

宣言を行い、無言のうちに立ち上がる。

「そこまで気負わなくても良いわよ。貴方は、何時ものままで十分助かってるんだから」



「そもも言ってられないでしょう？既に大陸は数名の王が治めるま  
でになっている。今だ残り続ける勢力も近いうちにどこかに併合さ  
れるでしょう」

孫策の呉、曹操の魏、劉備の蜀。

護が知っている勢力通り世界は進み続けている。

この次に控えるのは赤壁等と言った、歴史に名を残す激戦中の激戦  
だろう。

そして、知っている歴史的に重大な出来事は年代こそ違うが、必ず  
起きているのだ。

(歴史通りならば孫策は赤壁を迎えず……)

どの様に亡くなったかは生憎と覚えていなかったが、暗殺や、戦場  
での討ち死にならば守る事が出来る。

「それでは策様、そろそろ戻りま

「そうね、冥琳も待っているでしょうから……」

護は振り返り雪蓮を見たときに見えてしまった。彼女に向って伸び  
る矢を。

その矢には、怪しく光る水滴のような物が見え、すぐに毒矢である事が理解できた。

一秒が引き伸ばされる感覚、一瞬が何時間にも感じるその感覚の中、護は有りつ丈の声を上げて彼女を呼んだ。

「雪蓮――ーッ!!」

「えっ!?まも

」

護の切羽詰った声に反応した雪蓮はまだ矢に気が付いていなかった。振り返った顔はなにやら嬉しそうだが、今はそんな事を護は気にしていられない。

「ぐっ!?」

距離を詰める事が出来た護は、そのまま雪蓮を腕の中に収め、矢に對して雪蓮を守った。

刺さったのは利き腕、何時もの手甲をしていたら弾けていただろう場所にそれは刺さっていた。

「護ッ!?チッ、奴らかッ!!」

「一人、二人、三人……」

漸く事態が飲み込めた雪蓮は護から離れ、矢を放ったであろう者たちに向って駆け出した。

「動くなっ！！……ゼアアッ！！」

追いかけた雪蓮を大声で呼びとめ、落ちていた握り拳大の石を掴むとそれを今まであまり使わなかった全力で投石した。それは風を破ると音と共に、敵の頭に当たり、はじけ飛んだ。

「刺さった箇所が変色しました。だが、急げばまだ……！」

数人逃したが、気にする事無く、護は羽織っていた昔からの羽織を脱ぎ岩の上に置き、鉢巻を刺さった腕の根元で縛りつけ、今まで使った試しなど無かった小刀を取り出した。

「護ッ！貴方を……！」

「あの矢は毒が塗ってある。深く刺さりすぎて抉れないし、即効性の毒であった場合、城に戻っている時間も無い。……俺はまだ死ぬ訳には行かない！」

「護ッー!!」

止めようとする雪蓮を無視し、そのまま力尽くで小刀を振り下ろした。

「酷いなあ……護は……あんな時だけ真名を呼ぶんだもん……」

「咄嗟……だったので……時間も無く……」

息も絶え絶えになりながら、痛みを堪えている護を膝枕をしながら介抱する雪蓮。

始めは直ぐにでも城に運ぼうとしたが、動く度に護が苦悶の表情を浮かべると、本人の希望でその場で安静にする事にした。

片腕は羽織に包まれ、切断された腕は確り止血をされていた。

「姉さま、大変です！！曹操軍が  
腕……！？」

ッて、ま、護！？貴方そ  
姉の行く所は把握していたのか、蓮華がその場に現れた。  
蓮華はその場に広がる血と、倒れている護の現状を見て声を震わせ  
ていた。

「蓮華ッ！報告は確りなさい。取り乱さないの……」

「は、はい！曹操軍が国境を越えて侵入。我が軍に宣戦布告をして  
きました」

「そう……やっぱりあれは、曹操軍か……」

「曹操と言う人物からは……考えられないな……暗殺など……やは  
り部下の、暴走か……」

「どちらにしても、下の者を巧く使えなかったのは、あちらの失敗  
でしょう。……行って来るわね？」

「ああ、行ってらっしゃい」

雪蓮は立ち上がると、羽織に包まれた腕を抱きしめ、血塗れになる事を気にせず、その場から歩き去って行った。

「さて……こんな形で、英雄同士の戦いにケチが付いてしまった……。やはりとめないで行けないかな……？」

痛む腕を抑えながら護も立ち上がった。

雪蓮はこの出来事を揺さぶりに使うだろう。そして、曹操が噂に聞く人物ならばそれは大きな打撃を与えられるだろう。しかし、護はそんな決着は納得がいかない。

「両軍共に止めて、被害を最小限に、か……ははっ奇跡でも起こさなければいけないかな？ やってやるうじやないか……」

片腕を失ったにも拘らず、その獰猛な目は、今だ武人の終わりを告げていなかった。

彼、主の為に……（後書き）

護ッーーーーー！！！！！！！！！！

と、今回の話で片腕を失ってしまいました。

結構前から決めていたんです。片腕消失は。

孫策さんを助ける為に片腕を無くす。原作でも毒矢だったし、助けるなら、やっぱりこれくらいはしないと原作での感動が……

今回の話を作って思った。

ハーレムじゃなくて、策さん一筋で良いんじゃないかと……

彼、無謀極まる（前書き）

大変。大変長らくお待たせいたしました！

半年以上開けてしまいました。一話で来たのであげます。

忙しい期間が続いており次回も不定期です

今回はかなり悩んだ末に投稿しました。

感性で適当に書いている部分が多々あるので、説明不足や、可笑しなところが多いかも。



## 彼、無謀極まる

雪蓮達が去ってから十数分。

痛みが徐々に引き出したとき、護が行動を開始した。いや、痛みが引いたと言うよりも、痛みが強すぎて感覚がマヒしてしまったのかもしれない。

「大丈夫……まだ、死ぬほどじゃない……」

確りと頭の中に刻まれた『死』と言うイメージ。

そのイメージを持つ護は、自分の傷が、今だ死に届かない事を理解できた。

それ故に彼は行動を起こす。醜くも足掻き、何かを掴むため、泥を啜ってでも彼は止まらないだろう。

「……間に合ってくれよ」

護は駆け走った。

自身の体から次々と流れる血液を無視し、城を目指す。まず手に入れなければならないのは、火だ、止血するために火がいる。

火によって腕を焼く事で応急的に止血を施そうと考える。だが、時間との勝負だ。少しでも遅ければ、失血量から言って、気を失い次の行動に支障を来す恐れがある。

「俺の傷の事が、伝わってれば、用意してくれていると思うが…」

考えを巡らせていると、城が見え始める。

城に入り、直ぐに処置をしようとまた足を急がせる。

だが、それをして直ぐの事だ、城の前に集まる人影が見えた。目を凝らすとそこには見慣れた自分の隊の人間に愛馬、さらに。

「政か、出迎えご苦労だな。でも悪いが、直ぐにでも出たい。お前の事だ、すでに準備は出来ていると考えてもいいか？」

全幅の信頼を寄せる義弟。

その政は傷を見た瞬間に非常に悲しげな顔を見せ、それでも何も言わず、用意していた松明を見せてきた。護が頷くと、政は躊躇う事無くその腕に松明を押し付けた。

「ぐっ！？ううっ！？ぐああ……！」

短い呻き声を出し堪える護に隊の皆は真剣な表情だ。

「……はあはあはあ、よし、これでまだしばらくは動けるだろう。……行くぞ黒獅……！」

呼ばれ傍まで行く黒獅の背に跨った護は、一瞬、片手が無く不安定だったが、直ぐにバランスを取り直し、護の意思をくみ取るかのよう  
に、自主的に黒獅が動き出す。

隊の人間ははまだ無言のまま、ただその背中を見送っていた。

不安、絶対だと信じていた隊長の片腕の盲失。期待、この後何をし、  
自分たちの心を満たしてくれるのかを心から楽しむかのように気持ち。  
ち。

色々な気持ちが胸中に渦巻いているのだろう。

「……………すぐ戻る。ハッ！」

黒獅は、今までで一番の嘶きを聞かせると、あっという間にその場  
から見えなくなっていた。

「……………うっぐうっ……………！」

「泣いても良いんですよ、博士。悲しい時や、嬉しい時には泣かな  
きゃ」

隣で立つ赤が泣くのを精一杯我慢している政を諭すかのようにその  
背を撫でる。

「生きていてくれて嬉しいん、でしょ？あの方の傷が深く悲しいの

でしょう？ならば今は泣かなければ、この後忙しくなりますよ？」

意味が解らない政は赤を見る。

赤だけではない、その周りに控える太史慈隊の幹部と言える人物たちも一様に赤と同じ表情をしていた。

「あの人が、ただで終わる筈ありませんから！」

信仰、ここまで来るともはや狂信とも言えるかもしれないが、彼らは信じ続ける。

自分達が主と定める人が、片腕を失ったくらいで止まるような潔く優しい方ではないと……

「無様だろうと足掻き、醜いだろうと前に進む。それが出来るのが英雄で、それが出来るのが我らが隊長でしょ？」

「急げッ！！絶対に戦闘行動はするなよっ！迅速にここを離れるんだ！！！」

兵たちの動揺は大きい。

いや、それよりも華琳の動揺が酷い。

英雄同士の対決を誰よりも望んでいた華琳。それが、自分の軍の末端が台無しにしたのだ。

卑怯、卑劣と罵声があちらこちらから聞こえてくる。

「隊長っ！もう無理なお。逃げるばかりじゃ被害が大きいのに！」

「だめだっ！絶対に戦わせるな！二人一組になって、お互いを守らせて攻撃をしないように徹底させて！俺は華琳の所に行くてくるッ！」

「私もお供します。隊長一人ではここから華琳様の元にたどり着くのは難しいでしょう」

「ああ、風ありがとう。……真桜、沙和ッ！二人で風の隊の指揮も頼んだ！」

「任しとき！隊長は大将の事頼んだで！？」

予想以上に混乱が大きい。

華琳がまだ指揮を取れるだけ回復していないのか。

相手の攻勢が早いのか。

「まあ両方だろうけどな」

凧に前方を切り開いて貰いながら、最近漸く遅れずに乗る事が出来るようになった馬で必死に駆ける。

誰よりも強い信念を持つ彼女だが、誰よりも脆い心を持っている事を知っている。

だから、傍で支えなければ。

一刀はそんな事を考えながら、遠くに立つ、赤い布を持つ孫策に視線を向けた。

『なぜだ！？』

「曹操軍の私を狙った卑劣な暗殺と言う手段によって、私が最も信頼する呉の武の象徴太史慈はその片腕を永遠に失う事となった！」

「！」

『誰がそのような事を命じたッ!?!』

「生かして帰すなッ!我らが武の誇り、この地を赤く染める事で贖わせろッ!！」

心躍る筈だった、彼女との舌戦は考えもしなかった最悪の形で無に帰した。

すぐに問い詰めた、愚かにも聖戦を穢した愚か者を。

それはすぐに出てきた、業とらしい顔をして恩賞を貰えるなどふざけた事を言いながら。

その首を直ぐに刎ねさせた。

本来ならば、敵将の討つ事で恩賞を与えたかもしれない。

だが、それも戦場での事だ。

暗殺などと言う行為を曹操の矜持が、誇りが、許しはしなかった。

呉軍の攻勢が始まった。

しばらく呆けていたが、次の瞬間には霸王として指示を出す。

「呉に使者を出せッ!このような穢れた戦いに意味などないッ!一度退くッ!この場で戦っては我が霸道に何の意味もなくなる!！」

すぐに聞こえて来る筈の軍師の声は、僅かに震えながら、返事を返してきた。

それは自身が信頼する軍師の声。

苛立ちを覚えながらも、その軍師、桂花を見ると孫策が持っていた片腕を見つめ、小さく震えていた。

そこでふっ、と気が付いた。

桂花は太史慈と面識があつたはずだ。

「桂花ツ！今はこの戦いを収拾させよっ！」

だが、今はその事を忘れて貰わなければならない。  
でなければ、私たちが危ないのだから。

「は、はっ！御意っ！」

そこから離れていく桂花。

あの様子ならこの戦いが終わるまではしっかり働いてくれるだろう。  
華琳は立ち止まりながら、呉軍を見ながら歯噛みする。

「華琳っ！！」

「一刀！？なぜここに居るツ！自分の隊はどうした！？」

「真桜達に任せてきた。俺なんかよりもの確に人数を残してくれるよ。……そんな事より、早くここから離れよう。いつ敵が来るかわからない」



一刀の後ろに風が控え、いつでも離れる事が出来るように逃げ道を探していた。

「解っている、解っているが、この戦いはっ！」

「良いからッ！それはこの場を逃げ帰った後に聞くッ！！今は一人でも多く逃がす事だ。それが出来るのは華琳ッ、君だけなんだッ！！」

見つめあう二人。それは僅か数瞬だけであったが、華琳表情からは僅かに険が抜けた。

そこからの行動は迅速だった。表面上は冷静さを繕っていたものの、行動すると、その差が歴然と現れる。

一刀はこれでこそ曹孟徳だ、と表情は強張らせながら、心で昂揚を感じた。

戦場で気を抜くわけにはいかない。だが、王の凜とした立ち姿に、改めて見惚れる以外一刀にはできなかつた。

見惚れていた一刀は視線の端に、光を反射させる何かを見た。

何度も言うが、ここは戦場である。光る物等幾万と言う数が存在する。

しかし、一刀は虫の知らせのようなもので、何気なくその方向を見渡した。

「…………ッ！！ダメだ！華琳

！！」

遠くで鏃が射掛けられているのを見た。

それはほんの些細な偶然だったが、それは今にも指から放たれ、華琳目掛けて飛ぼうとしていた。

一刀は必死の思いで手を伸ばす。

(届いてくれっ!!)

そして一刀の手が華琳に触れた。

一刀は思考する。突き飛ばすか、いやダメだ、ここで馬から落ちれば、今以上に危険な目に合う。

彼女を引き寄せるか、それもダメだ、悔しいが慣れない馬上で力で勝てるとは思わない。

ならばどうする。矢は既に放たれた、時間が無い。

通常の自分ではあり得ない程の集中力で一瞬のうちに幾つもの考えを頭に過らせ、そのどれもを実行に移せない事を把握した。

(決まってるっ！それならッ)

「一刀っ！？ちよ、ちよつと離しなさい！今忙しい

！？」

華琳は見た。一刀と同じものを。

そしてそれが放たれ、もはや回避不能な位置にある事を。

一刀は退かない、矢に背を向け華琳の体を力一杯に抱きしめている。

まるでコマ送りのように感じられるその瞬間はジリジリと迫りつつあった。  
目を閉じず、迫る矢を見続ける華琳。  
もうすぐ来るはずの衝撃。

だがその瞬間は永遠に來なかつた……

「……俺は毎回こう言つたタイミングで來れるな。呪われてるのかな？」

赤黒い何かに、矢は中程から握りつぶされ、へし折れていた。  
いや、何か、ではない。それは人の腕。  
その腕を伝つて顔を確認すれば、驚くべき人物がその場に居た。

「魏王曹操、この場は直ぐに離れられよ。その少年は気を張り過ぎて氣絶しているようだし、ここははまだ危ない」

目の前に居るのは、片腕を失い、戦線に出れない筈の太史慈だ。  
あの場で言つていた太史慈の片腕の盲失は虚偽だったのかと、その眼を太史慈の反対の腕に向けられる。  
だが、そこには何も無い。

ある筈の腕がそこに無い事で、先ほどの舌戦の成り損ないで言われ

た事が真実だと告げられているようで、強張っていた顔が、さらに険しいものになった。

「なぜだ……、なぜ貴様が私を救うツ！」

「救ったわけでは……、違うな、確かに私はあなたを救うと言う選択肢を選んだ。だが、それはただの自己満足だ。あなたは何も言わなくても良い。ただこれだけは言える、英雄同士の雌雄を決する場はあのような奴の手で穢されていいものではない」

突然の敵将の出現に、両軍ともに大きな混乱を呼ぶ。

呉軍は狂喜、魏軍は殺気立ち、ざわめきはその際限を無くしていく。華琳の周りをいた兵たちが殺到する。

それを、守れ、と大きな声をあちらこちらで上げながら、呉軍も殺到するように戦力が中心によっていく。

「ああああアアアアアアあ

！！」

両軍が動き出したことによって、護も動き出す。

咆哮とも絶叫ともつかぬその大声は、戦場の隅から隅まで響き渡り、その存在を知らしめる。

次いで来る激しい振動。

地震がこの時やって来たのではと錯覚するほどの振動が、太史慈を中心に広がっていく。

どの時代でもそうだが、この時代は特に、地震に対する構造を持っていない建物が多い為、天災と呼ばれるモノに人は大きな恐怖を寄

せ、その動きを大きく鈍らせる。

「我らが王！孫箔符様にお願ひ申し上げるッ！！」

両軍の中心点まで歩きながら、喉が壊れてしまつのではと心配してしまつほどの大声で遠くに居るはずの雪蓮に願ひ出る。

戦場の只中にありながら、膝を付き頭を垂れて自身の主に言を放つ。

「この戦い、我が右腕に免じて軍を引いて頂きたいッ！！このような戦い、英雄同士の戦いに非ずッ！このまま続ければ、今後大きなしこりを心に残す事になりましょう」

その発言に両軍に衝撃が走る。

雪蓮もそれは同様であり、しかし、直ぐに王としてまたは為政者としてその発言に対して考える。

（ここで引かねば民の信頼を失いかねない……）

舌戦に置いて、自身を守るために片腕を失った誇りある将と語って置きながら、それをここで無視すれば、呉国をここまで繋いできた絆に亀裂が生じかねない。

既にこの場に居る人間すべてにこの発言は行き渡り、箝口令を布こうとこの話は民の間でも流れる事だろう。

民の信頼を失うと言う事は、この時代の国にとってあってはならない事だ。

雪蓮は護が後ろから襲われればそれを口実に出来るのと言う思考が流れ、苦虫を食んだ様な顔を浮かべながら、その自分の思考に気持ち悪くなった。

「……軍を退くわ。これ以上は両軍にとって益は生まない」

「ああ、そうだな。それで、太史慈だが……」

「流石にこれだけの事をしておいて、お咎め無しと言うのは無理よ。独房へ」

王を助けたと言う実績があったとしても、その後敵の逃亡を手助けすると言う行動に出た者を何の罰も無しと言う事にはできない。

だが、ここで死罪を科してしまうのも、兵の間で良くない流れを生みかねない。

慎重な判断を要求されるだろう。

「まったく、あなたには毎回驚かされてばかりね。……ああ、あ  
多分遠くに飛ばす事になりそうねえ……。もう、私の傍から離れて  
欲しくないのに」

乙女な自分と為政者としての自分の板挟みだが、その苦勞も彼のや  
らかす事態ならば、それほど苦に感じない雪蓮だった。

彼、無謀極まる（後書き）

数か月ぶりに入ったら、メッセージが幾つもあり感涙しました。

こんな拙い作品を応援してくれてありがとうとございます！

モチベーションが全く上がらなかったのがそのメッセージのおかげでまた上がりました！

前書きでも書いたのですが、忙しいのが続いておりますのでこれからはメッセージに返答できないと思います。

内容はしっかりと読みますので、これからもよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7334m/>

---

真・恋姫十無双～女神の恩恵～

2011年11月21日20時40分発行